宅尾横穴群

1990年3月

島根町教育委員会

序

本町では，古墳時代の横穴群が町内の大芦，野波の２地域に各々一箇所ずつ存在することが古くから知られており，今までに数多くの土器等が出土している。

このたび発掘調査された横穴群はそのうちの１つで，昭和59年島根町誌編纂の時点で５穴の横穴が確認されており，「周知の遺跡」として町民に親しまれてきた。

ところが，本横穴群を含む小具地区の丘陵一帯が昭和60年「急傾斜地崩壊危険区域」として指定されたため，崩壊対策工事に着手することになった。

そこで，今回その対策工事に先立って工事区域内を発掘調査し，全容を明らかにしたのである。あくまでも住民の生命，安全を第一とする立場から，やむなく記録保存に留める結果とはなったが，調査によって知り得た資料は，その量，質とも予想をはるかに上回るものであった。ここに成果を公表し，今後の当町古代史の解明および文化財の保護と活用に資することを期したい。

終わりに，本調査に対し格別のご援助とご協力いただいた島根県教育委員会文化課，島根県松江土木建築事務所，直接調査を担当していただいた石井悠氏，その他関係各位に対し深甚な謝意を表する次第である。

平成２年３月

島根町教育委員会

教育長　伊　達　　章

ＣⅡ号穴出土勾玉、切子玉
（左より 図119-8、9、10、11、12、13）

例　　言

1．本書は，島根町大芦，小具地区急傾斜地崩壊対策工事に伴い，島根町教育委員会が島根県松江土木建築事務所から委託を受けて実施した宮尾横穴群発掘調査の報告書である。

2．調査の組織は次のとおりである。

調査主体	島根町教育委員会		
事務局	〃	教育長	伊達　章
	〃	教育次長	余村　滋
	〃	主任	湯原　章
調査担当	松江市立第二中学校教諭		石井　悠
	松江教育事務所派遣社会教育主事		宍道正年
調査指導	島根県文化財保護審議会会長		山本　清
	安来市立第二中学校教諭		横山純夫
	島根県教育委員会文化課主事		鳥谷芳雄
調査協力	鹿島町教育委員会係長		曽田　稔
	〃	主事	赤沢秀則

3．発掘調査に関して(有)小谷工務店，大芦小学校と石川勝美，山崎武春，石川賢治，石川昌明の各氏から多大な援助を得た。記して謝意を表する次第である。

4．遺物の実測，写真撮影には石井と宍道があたり，特に土器の実測については島根大学々生である物部茂樹，間野大丞両氏と本町在住の宮本守人氏の協力を得た。

5．遺物の整理および図面の浄写は奥村美佐子，金津須賀子，田中恵各氏の協力を得た。

6．本書の執筆は石井，宍道，湯原があたり，編集は石井が宍道，湯原と協議してこれを行った。

7．表紙の題字は島根町教育委員会教育長　伊達章による。

目　　次

Ⅰ．遺跡のあらまし …… 1
調査に至る経緯，　遺跡の位置，　島根町内の主な遺跡
Ⅱ．調査のあらまし …… 4
調査の方法，　A区の調査，　B区の調査，　C区の調査
Ⅲ．まとめ …… 57

挿　図・表目次

挿　図

1　発掘前の遠景　1
2　大崎神社から　2
3　遺跡周辺の地形（空中写真）　2
4　遺跡の位置と周辺の地形　2
5　島根町内の遺跡分布図　3
6　測量風景　4
7　荒堀作業　4
8　遺構精査　4
9　遺構実測　4
10　地形測量図　5
11　A区の横穴配置図　6
12　AⅠ号穴実測図　7
13　AⅠ号穴　7
14　AⅡ号穴実測図　7
15　AⅡ号穴　7
16　出土遺物・玉砂利検出状況　8
17　出土遺物，玉砂利検出状況　8
18　AⅢ号穴実測図　9
19　AⅢ号穴転落土器の出土状況　10
20　AⅢ号穴玄室北西側　10
21　AⅢ号穴玄室南東側　10
22　AⅢ号穴玄室北東側　10
23　AⅢ号穴玄室玉砂利除去後　10
24　掘り上げた玉砂利　11
25　AⅢ号穴玉砂利堆積状況　11
26　AⅢ号穴奥壁天井部　11
27　AⅢ号穴奥壁基部　11
28　AⅢ号穴出土須恵器実測図　13
29　AⅢ号穴出土須恵器　14
30　AⅢ号穴出土遺物実測図　15
31　AⅢ号穴出土耳環　15
32　AⅣ号穴羨道部　16
33　AⅣ号穴閉塞石用石組　16
34　AⅣ号穴実測図　17
35　AⅣ号穴羨道部石組及び遺物出土状況　18
36　AⅣ号穴羨道部遺物出土状況　18
37　AⅣ号穴玄室　18
38　AⅣ号穴羨門部　18
39　AⅣ号穴羨門部から玄室をみる　18
40　AⅣ号穴出土須恵器実測図　19
41　AⅣ号穴出土遺物実測図　19
42　AⅣ号穴出土遺物　19
43　AⅤ号穴閉塞状況　20
44　AⅤ号穴羨道部　20
45　AⅤ号穴奥壁天井部　20
46　AⅤ号穴奥壁基部　20
47　AⅤ号穴実測図　21
48　AⅤ号穴玄室南西側　22
49　AⅤ号穴玄室南東側　22
50　AⅤ号穴玄室北西側　22
51　AⅤ号穴玄室北東側　22
52　AⅤ号穴玄室　22
53　AⅤ号穴出土須恵器実測図　24
54　AⅤ号穴出土須恵器　24
55　AⅤ号穴出土遺物実測図　25
56　AⅤ号穴出土遺物　25
57　AⅥ号穴実測図　25
58　AⅥ号穴　25

59　A Ⅶ号穴実測図　27
60　A Ⅶ号穴玄室　28
61　A Ⅶ号穴玄室　28
62　A Ⅶ号穴羨道部閉塞用石組　28
63　A Ⅶ号穴羨道部石組除去後　28
64　A Ⅶ号穴羨道部石組除去後　28
65　A Ⅶ号穴出土須恵器実測図　29
66　A Ⅶ号穴出土大刀実測図　29
67　A Ⅶ号穴出土遺物　29
68　A Ⅷ号穴実測図　30
69　A Ⅷ号穴東壁（北から）　30
70　A Ⅷ号穴東壁（南から）　30
71　A Ⅷ号穴土層堆積状況　30
72　A Ⅷ号穴とⅧ号穴間の石組実測図　31
73　石組遠景　31
74　石組近景　31
75　石組近景　31
76　石組下土壙　31
77　SK Ⅺ，Ⅹ，Ⅸ号穴断面　32
78　SK Ⅺ断面　32
79　A Ⅸ・Ⅹ号穴，SK Ⅺ断面実測図　32
80　SK Ⅺ出土須恵器実測図　33
81　A Ⅻ号穴　34
82　A Ⅻ号穴実測図　34
83　B Ⅰ号穴　35
84　B Ⅰ号穴玄室　35
85　B Ⅰ号穴実測図　36
86　B Ⅱ号穴実測図　37
87　B Ⅱ号穴　37
88　B Ⅲ号穴断面　37
89　C区調査風景　38
90　C Ⅰ号穴玄室遺物出土状況　39
91　C Ⅰ号穴玄室遺物出土状況　39
92　C Ⅰ号穴玄室遺物出土状況　39
93　C Ⅰ号穴玄室遺物出土状況　39
94　C Ⅰ号穴実測図　40
95　C Ⅰ号穴遺物出土部分図　41
96　C Ⅰ号穴玄室遺物出土状況　41
97　C Ⅰ号穴玄室遺物出土状況　41
98　C Ⅰ号穴玄室　42
99　C Ⅰ号穴玄室　42
100　C Ⅰ号穴玄室　42
101　C Ⅰ号穴玄室　42
102　C Ⅰ号穴玄室　42
103　C Ⅰ号穴出土須恵器実測図　43
104　C Ⅰ号穴出土須恵器　43
105　C Ⅰ号穴出土遺物実測図　44
106　C Ⅰ号穴出土遺物　44
107　C Ⅱ号穴玄室土層堆積状況　45
108　C Ⅱ号穴遺物出土状況　45
109　C Ⅱ号穴遺物出土状況　45
110　C Ⅱ号穴遺物出土状況　45
111　C Ⅱ号穴実測図　46
112　C Ⅱ号穴玄室遺物出土状況　47
113　C Ⅱ号穴大刀出土状況　47
114　C Ⅱ号穴大刀出土状況　47
115　C Ⅱ号穴耳環出土状況　47
116　C Ⅱ号穴切子玉出土状況　47
117　C Ⅱ号穴出土遺物須恵器実測図　49
118　C Ⅱ号穴出土須恵器　49
119　C Ⅱ号穴出土遺物実測図　50
120　C Ⅱ号穴出土遺物　51
121　C Ⅲ号穴実測図　52
122　C Ⅲ号穴　52
123　C Ⅳ号穴実測図　53
124　C Ⅳ号穴　53
125　C Ⅴ号穴　54
126　C Ⅴ号穴南側壁　54
127　C Ⅴ号穴玄室奥壁　54
128　C Ⅴ号穴実測図　55
129　C Ⅵ号穴　56
130　C Ⅵ号穴実測図　56
131　以前から出土していた須恵器実測図　57
132　宮尾横穴群配置図　58

表

1　A Ⅲ号穴出土須恵器観察表　12
2　A Ⅳ号穴出土須恵器観察表　16
3　A Ⅴ号穴出土須恵器観察表　23
4　A Ⅶ号穴出土須恵器観察表　26
5　SK Ⅺ出土須恵器観察表　33
6　C Ⅰ号穴出土須恵器観察表　41
7　C Ⅱ号穴出土須恵器観察表　48
8　C Ⅱ号穴出土切子玉の寸法　48
9　宮尾横穴群一覧　59
10－1　島根半島（島根町，鹿島町，美保関町）の横穴　60
10－2　島根半島（島根町，鹿島町，美保関町）の横穴　61

宮尾横穴群発掘調査報告書

Ⅰ．遺跡のあらまし

調査に至る経緯

宮尾横穴群は島根県八束郡島根町大字大芦の通称小具地区内に所在する。大芦小学校のある丘陵の南東側斜面麓部に位置し，昭和48年に島根県教育委員会の分布調査により確認された周知の遺跡である。

この小具地区の全域を取り囲む丘陵地は，昭和60年に島根県から「急傾斜地崩壊危険区域」として指定を受けた。そこで，昭和61年度から地区全体をＡ区，Ｂ区，Ｃ区に分け，３ヶ年計画によって対策工事が行われることになった。しかし，前述のように本横穴群がＢ区に存在することから，昭和61年４月25日，島根県教育委員会，島根県松江土木建築事務所，地元住民代表および当教育委員会の四者で事前協議の上，Ｂ区を含めた工事区域全体の埋蔵文化財分布調査を実施することになった。

その結果，Ａ区とＣ区については遺跡を埋蔵していないことが判明し，直ちに工事は着手された。一方，Ｂ区については，昭和61年５月12日，松江土木建築事務所から事前の発掘調査を依頼されたが，当教育委員会単独では調査体制がとれず，県教育委員会に援助と協力を求めた。その後，関係諸機関と幾度も協議を重ね，準備を整えて，今回の調査に至ることができた。

1．発掘前の遠景（北から）

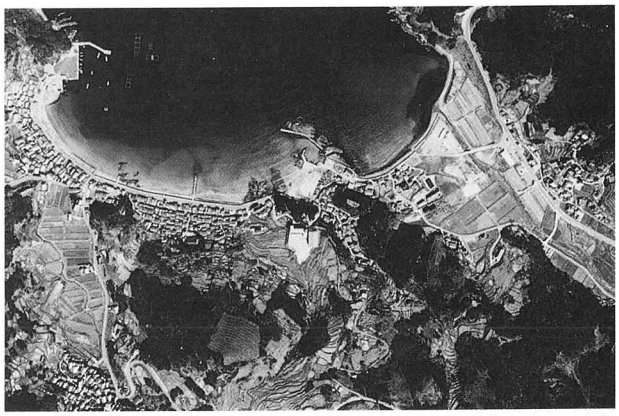
遺跡の位置

本横穴群の存在する島根町は，島根半島の北側，日本海に面した位置に当たる。

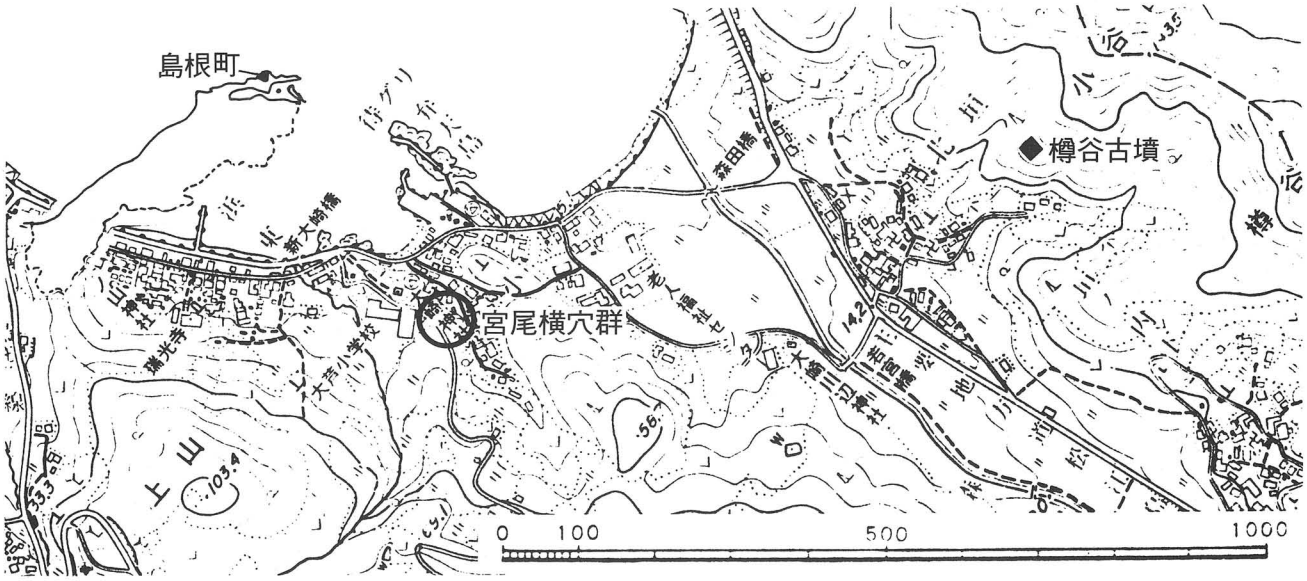
出雲国風土記記載の大埼濱（おほはし）（現在の大芦海岸）から南へ約100m入り込んだ狭い谷の西側斜面（標高約５～16m）に本横穴群が穿たれている。国指定名勝天然記念物潜戸（くけど）からは南西へ直線距離にして約2,500mの地点である。海岸のほぼ中央部に突き出る丘陵の裾部に位置し，海辺に密集する家並越しに日本海を見晴らす一等地である。地籍の上では，八束郡島根町大字大芦字小具2100番地とその他７ヶ所の番地にまたがるかなりの広さの急傾斜地をほぼ遺跡の範囲とする。なお，本横穴群の北側には，出雲国風土記記載の大埼社（おほはし）（現在の大崎神社），西側には島根町立大芦小学校が各々近接している。

また本横穴群から東へ小丘陵１つ越すと，主要地方道松江島根線沿いに，細長く比較的広範な水田が開けている。そして，その東側丘陵の中腹部には，あたかも水田地帯をはさんで本横穴群と対峙する形で，樽谷古墳が確認されている。築造時期も本横穴群と重なる可能性が高く，当代の地域史を窺う上で興味深い。

2．大崎神社から

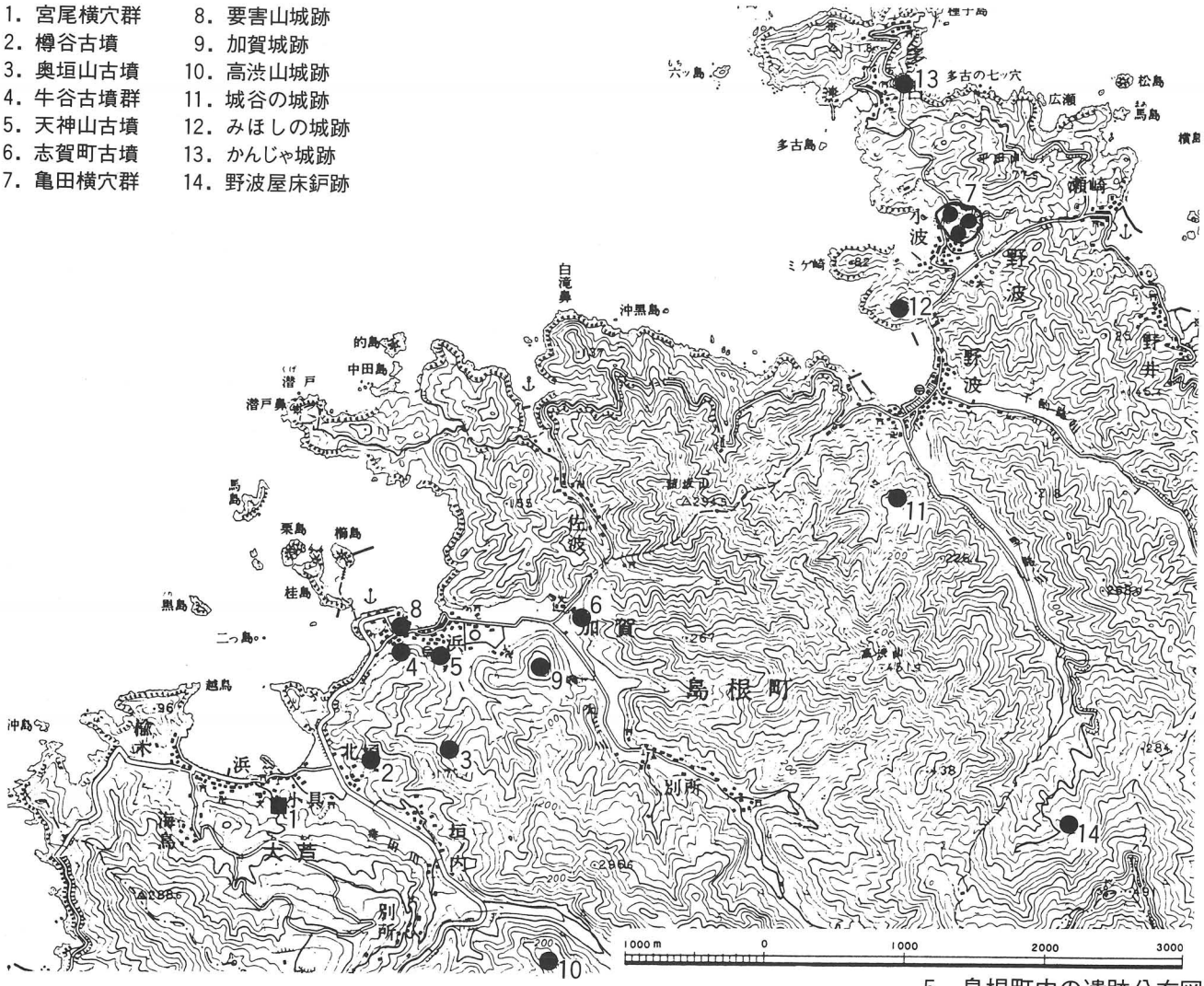


3．遺跡周辺の地形（空中写真）



4．遺跡の位置と周辺の地形

1．宮尾横穴群　　8．要害山城跡
2．樽谷古墳　　9．加賀城跡
3．奥垣山古墳　　10．高渋山城跡
4．牛谷古墳群　　11．城谷の城跡
5．天神山古墳　　12．みほしの城跡
6．志賀町古墳　　13．かんじゃ城跡
7．亀田横穴群　　14．野波屋床鈩跡



5．島根町内の遺跡分布図

島根町内の主な遺跡

現在までに町内の周知の遺跡は14ヶ所を数える。大芦，加賀，野波３地区各々に分布している。古墳が中心で，縄文・弥生時代遺跡は未だ発見されていない。以下，主要なものを略述する。

大芦地区には宮尾横穴群（図５－１）のほかに，箱式石棺を内部主体とする樽谷古墳(2)が知られている。築造時期は古墳時代後期（６～７世紀）と考えられる。

加賀地区には４基の古墳がある。後期の疑似石棺式石室を備える奥垣山古墳(3)，中期（５世紀）の長持形石棺か舟形石棺の特徴を模した箱式石棺２基を有する牛谷古墳(4)，同じく中期型箱式石棺２基の天神山古墳(5)そして山陰の須恵器編年第Ⅲ期（６世紀後半）の蓋坏が出土し，主体部が疑似石棺式石室の志賀町古墳(6)である。

野波地区では墳丘を有する古墳は未発見となっている。３つの支群から構成される亀田横穴群(7)が顕著である。今までに８穴の存在が確認されているが，実際には相当数の横穴が埋蔵されている可能性が高い。

中世戦国時代の尼子氏と毛利氏攻防に関係した城跡は町内に６ヶ所ある。加賀地区には要害山城跡(8)と加賀城跡(9)，大芦地区には高渋山城跡(10)そして野波地区には城谷の城跡，みほしの城跡，かんじゃ城跡が認められる。

なお野波地区には山陰海岸部で初めて発見された中世の野だたら遺構を持つ野波屋床鈩跡がある。標高約250ｍの丘陵中腹に位置し，急斜面を切り開いた約0.5㏊の扇形テラスに設けられている。

Ⅱ．調査のあらまし

調査の方法

本横穴群は，北～東を向いた高さ10mあまりの急峻な斜面で検出された。すでに，崖下や斜面中の平坦面で開口した横穴と遺物の出土が知られていた。[注1]

現地調査は，平成元年６月14日から開始し10月21日に至る間の実働33日をかけて行った。調査対象地の写真撮影や地形測量（縮尺1/100，50cmコンタ）を行い全体の地形を把握したうえで，便宜上Ａ～Ｃの３区に分けて発掘を行った。検出した横穴をＡⅠ号，ＡⅡ号穴のごとく呼んだ。

Ａ区は，北向きの斜面で大崎神社に近い側の斜面上部の平坦面（幅２～４ｍ）に設定した。発掘の進展にともない，予想以上の横穴を検出したので，途中で調査区の拡張を行った。この調査区では11穴（内１穴は不明，３穴は工事中発見）の存在を確認した。

Ｂ区は，Ａ区の崖下にあたり，すでに開口している横穴を中心とした部分に設定した。３穴（内１穴は工事中発見）の存在を確認した。

Ｃ区は，東向き斜面の崖下でＢ区の東側にあたる部分に設定した。以前，遺物が出土したと伝えられる地点で６穴（内１穴は工事中発見）の存在を確認した。

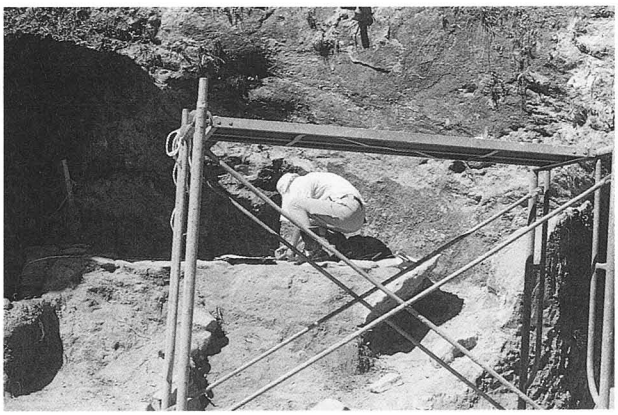
発掘は，荒掘りで横穴の存在を確認した場合，中軸線と思われる部分にアゼを残して土層を観察しながら進めることを原則とした。しかし，ＡⅤ号穴は作業の安全性や能率面を考慮してアゼを残さなかった。遺構や遺物の出土状況の実測は原則として１/20の縮尺で行った。実測の基準とした標高は工事用のものを使用した。

上記の工事中としたものは，調査終了後に調査対象区外から立会中に発見されたものである。

6．測量風景

7．荒掘作業

8．遺構精査



9．遺構実測

10．地形測量図

A区の調査

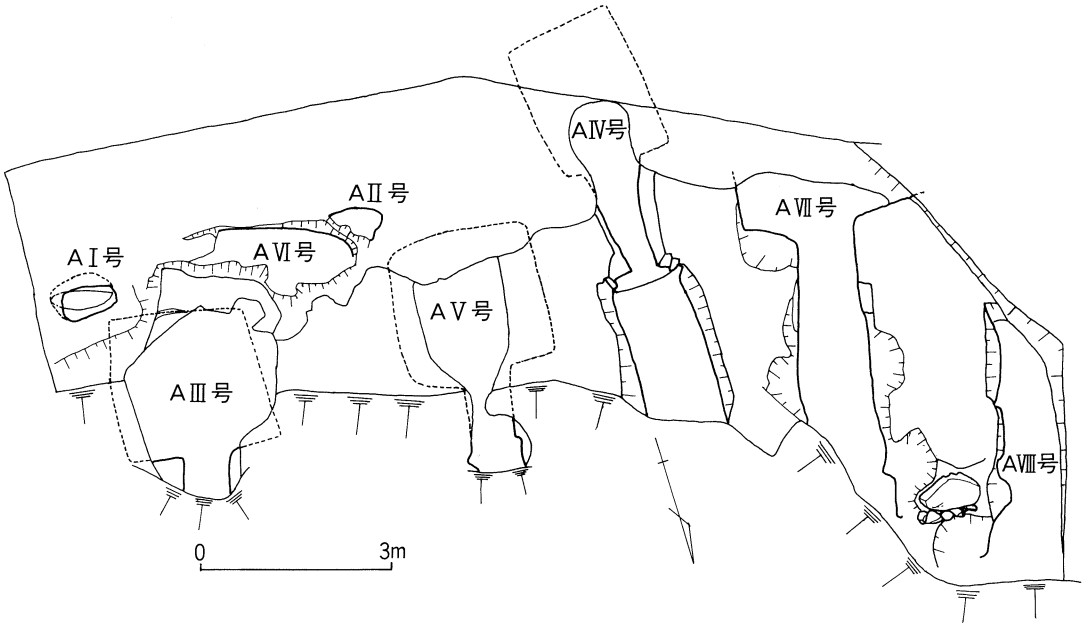
前述のようにA区は北向きの斜面に設定した。標高約12.5～13.5mの平坦面に南北に設定した長い調査区である。全体に固く締まった粘質土で掘るのに苦労したが，平均の深さ60cmを掘ると地山となり，天井の崩落した横穴の玄室や羨道部あるいは前庭部の輪郭が検出された。完全な形で残されているものはなかったが，大部分がかなり良好な形で検出された。

Ⅶ・Ⅷ号穴は，調査対象区域から外れる部分に広がっていたので，発掘は部分的なものになった。

Ⅰ・Ⅱ号穴は，その形態や規模から小児用（Ⅱ号穴は後述のようにⅥ号穴と一体のものとも考えられる）と思われるが，詳細は不明である。Ⅲ・Ⅴ号穴は前庭部が失われているが，羨道部と玄室がかなり良好に保存されている。玄室は方形プランをもつ横断面三角形の妻入りテント形のものである。２穴並んでほぼ同一レベルに穿たれている。Ⅳ号穴は長い前庭部，羨道部を有し，玄室は奥に向って長い長方形プランを有する。横断面三角形の妻入りテント形のものと推定される。Ⅶ号穴は，長い前庭部，羨道部を有することはⅣ号穴と同様であるが，玄室の形態については部分発掘であるため不明である。Ⅷ号穴は，前庭部と羨道部のみを発掘した。東側の壁と床面のみを検出したにとどまるので，詳細は不明である。Ⅳ・Ⅶ・Ⅷ号はほぼ同一レベルに並ぶ。

Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ号穴及び工事中発見のものを除く全ての横穴から何らかの遺物が出土している。比較的保存がよく床面は荒されていない。須恵器が多く，他に鉄製品，耳環，玉類がみられる。

工事中発見のものに，Ⅸ・Ⅹ・Ⅻ号穴及びSKⅪがある。Ⅸ～Ⅺの各遺構は頂部法面の掘削で断面が現われ，ほぼ同一レベルに並ぶ。Ⅻ号穴はＢⅠ号穴と同一レベルで，同一方向に開口する。

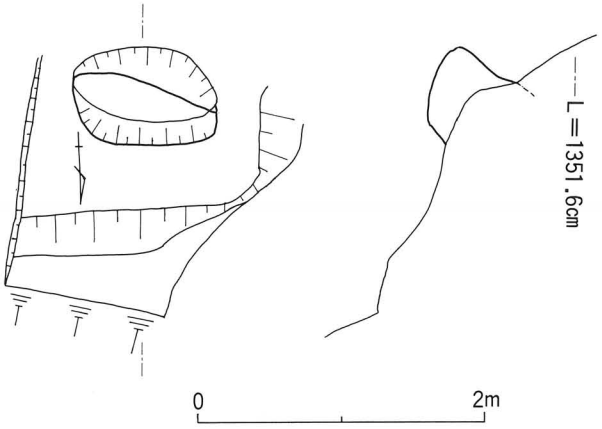


11．A区の横穴配置図（Ⅸ・Ⅹ・Ⅻ号穴，SKⅪを除く）

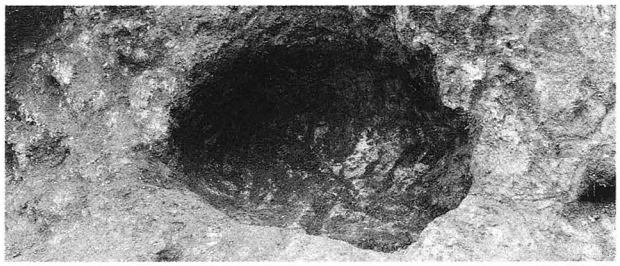
Ⅰ 号 穴

A区の崖裾部の地山に穿ったもので，床面の標高は約12.5mである。最大幅100cm，奥行き，70cm，床面から天井の最高部まので63cmを測る。長楕円形プランをもつ小穴である。床面は掘りくぼめられ開口部分より奥の中央部は低くなっている。閉塞石とか遺物は全く検出されなかった。

穿たれた時期について詳細は不明であるが，周辺の状況からA区内の各横穴とほぼ似かよった時期のものと考えられる。またこの小穴の性格については，推測の域を脱しきれないが，小児埋葬用のものと考えられる。



12．Ⅰ号穴実測図

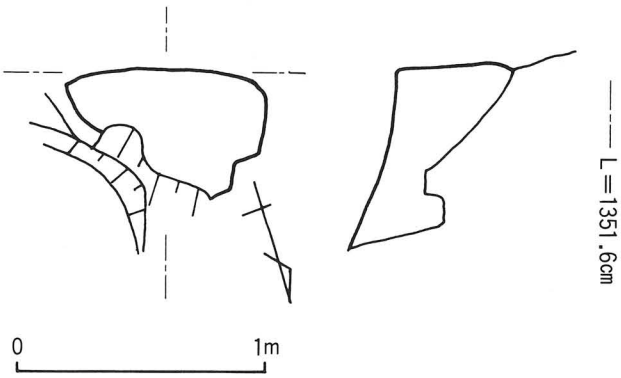


13．Ⅰ号穴

Ⅱ 号 穴

これもA区の崖裾部の地山に穿ったもので，床面の標高は約12.6mである。最大幅82cm，中心部の奥行き44cm，残存する奥壁の高さ46cmを測る。長楕円形プランをもっていたものが，Ⅵ号穴により一部削り取られたような形状を呈している。

閉塞石や遺物が検出されなかったため，穿たれた時期は不明であるが，Ⅰ号穴同様のものと考えられる。しかし，Ⅵ号穴との関連で考えてみた場合，この小穴が単独に穿たれたものであると仮定するならば，Ⅵ号穴より古いものと考えられることができる。（AⅥ号穴の項を参照）その場合，Ⅰ号穴同様小児埋葬用のものと考えることができる。



14．Ⅱ号穴実測図

15．Ⅱ号穴

Ⅲ　号　穴

位置と横穴群の形態

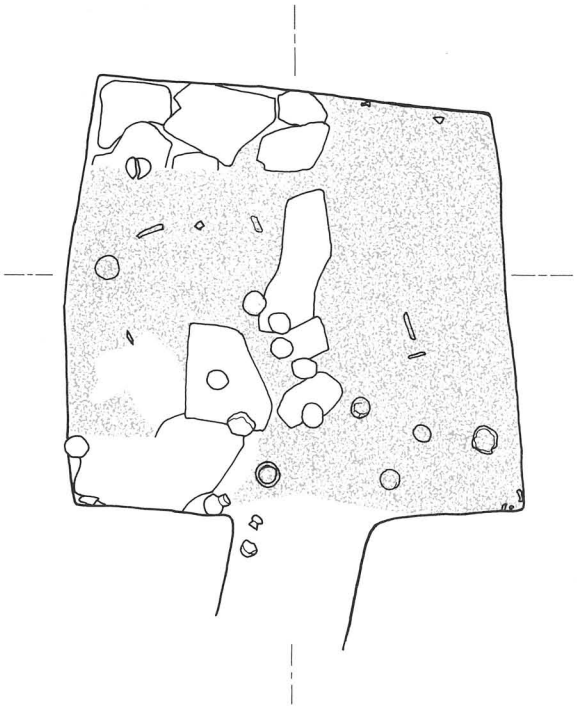
Ⅵ号穴が存在したとすれば，その下部に穿たれた横穴である。床面の標高は約9.8mである。

天井部は落盤のためほとんど失われているが，羨道の一部と玄室床面，奥壁は保存状態がよい。主軸に沿って残された全長は306cmを測る。羨道部は玄室のほぼ中央から主軸に対して約10°東に傾いた形で穿たれている。残された全長72cm，幅71cmを測り，床の横断面U字形を呈す。閉塞石とみられる石組の下部が残されていた。玄室は奥行234cm，幅234cmの方形に近いプランをもつ。奥壁の形状などから，横断三角形の妻入テント形（四注式系，三角形断面，妻入）[注2]の横穴と推定される。

遺物等の検出状況

玄室内は，板状石と玉砂利が敷きつめられた状態のところに須恵器，土師器片，刀子，鉄鏃，耳環が検出された。玉砂利は玄室内床面積の約3/4の範囲に及んだ。玉砂利を除去すると，室内の東側半分は板状石が，西側は約10cmの厚さで玉砂利が敷きつめられていた。玉砂利は，小さいもので径約２cm，大きいもので鶏卵大のものが主となり，コンテナ（内法34cm×54cm×15cm）２箱分に及ぶ量が使用されていた。玄室内の壁に沿って幅約10cm内外の溝が検出された。全周していないが，室内の排水には充分役立つものと考えられる。板状石はさまざまなものが用いられているが，奥壁側のもののいくらかは，石の形状から本来一枚石であったが，玄室内に運ぶために小さく割って敷いたものと推定できる。板状石の隙間から須恵器，耳環が検出された。追葬等の際にはまり込んだものであろうか。

玄室内の東壁ぎわ床面から約80cm上の部分で高坏と提瓶各１（図19，28－20・24）が検出されているが，天井の落盤後に流入したものと考えられる。平瓶については，その破片が玄室内奥壁床近くや玉砂利中から検出されている。床面の破片については流れ込みも考えられ，Ⅵ号穴のものとも推定できる。旧地権者の話によると，ちょうどⅢ号穴の上部にあたる部分に横穴が存在したという。（ＡⅥ号穴の項参照）

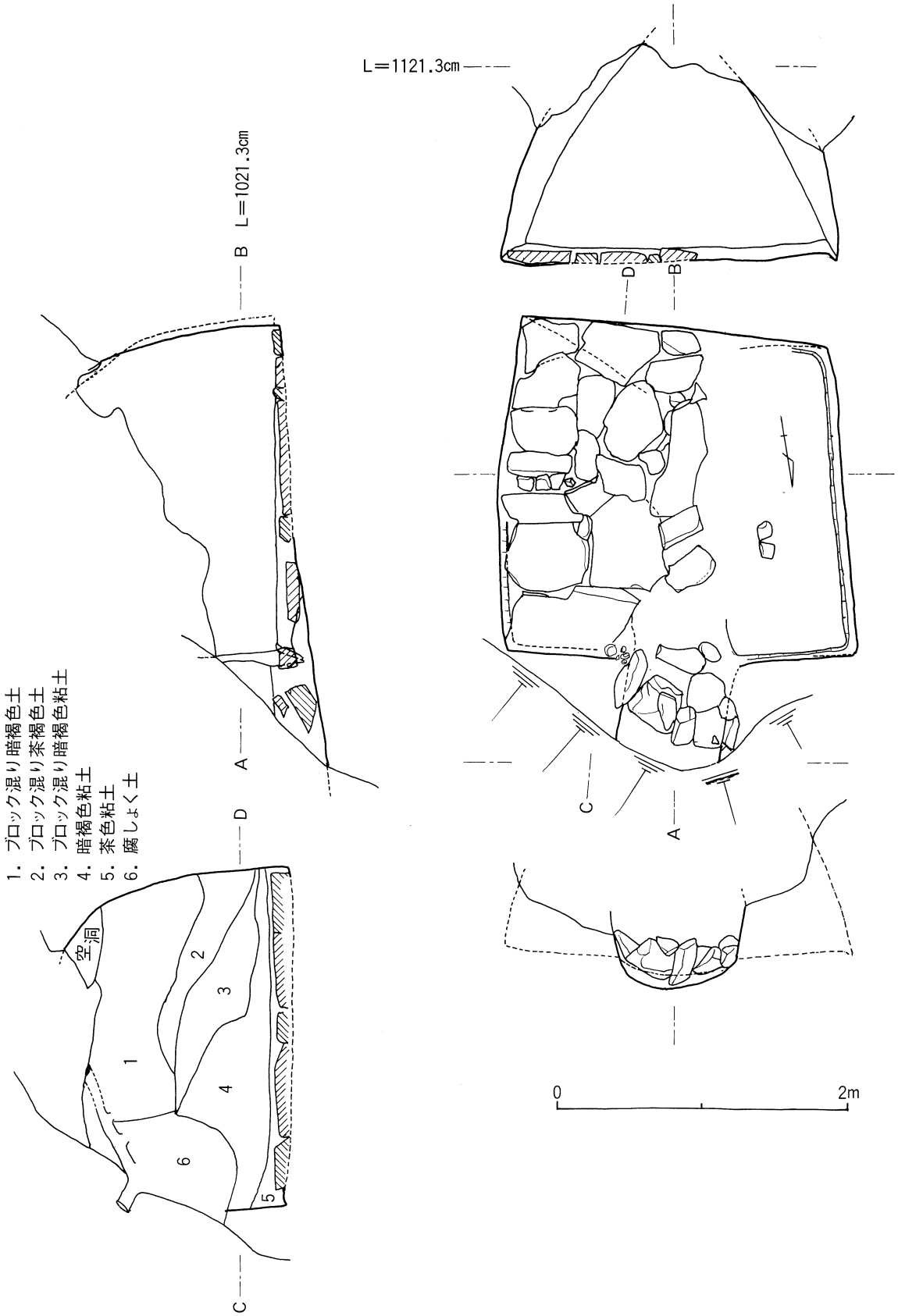


16．出土遺物・玉砂利検出状況
（スクリーントーンは玉砂利）

土層の堆積状況

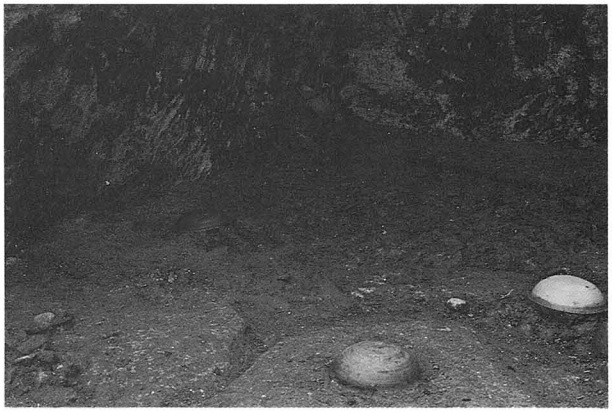
落盤した玄室の羨道部側天井部からの流入土が充満していた。前述の平瓶もこの時に転落したものと思われる。

17．出土遺物・玉砂利検出状況


1. ブロック混り暗褐色土
2. ブロック混り茶褐色土
3. ブロック混り暗褐色粘土
4. 暗褐色粘土
5. 茶色粘土
6. 腐しょく土
空洞
1
2
3
4
5
6
A
B
C
D
L=1021.3cm
L=1121.3cm
0
2m

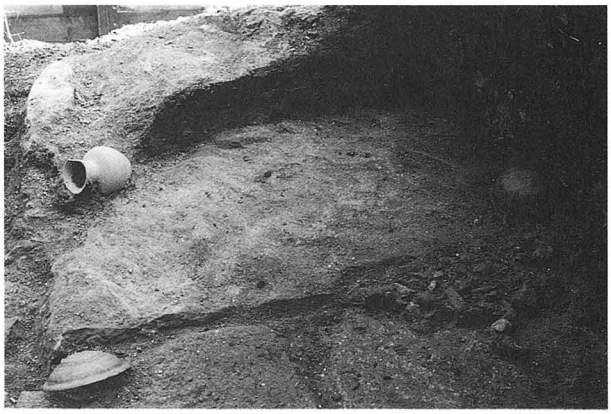
18. Ⅲ号穴実測図

19．Ⅲ号穴転落土器の出土状況



21．Ⅲ号穴玄室南東側

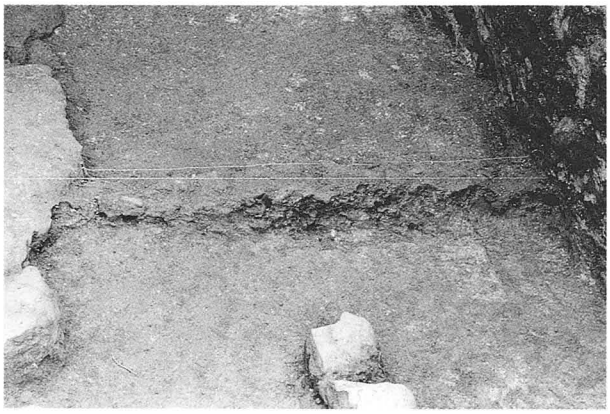
20．Ⅲ号穴玄室北西側



22．Ⅲ号穴玄室北東側

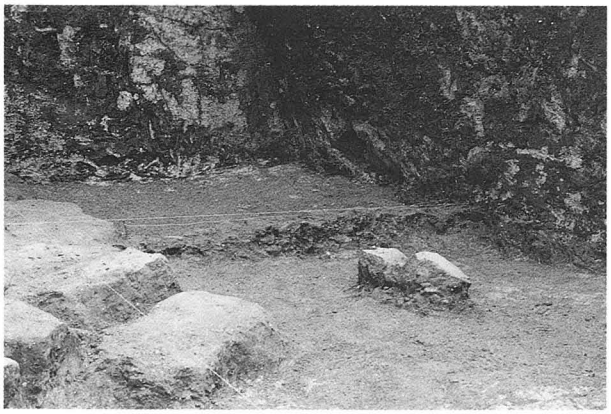
23．Ⅲ号穴玄室玉砂利除去後

24．掘り上げた玉砂利



25．Ⅲ号穴玉砂利堆積状況

26．Ⅲ号穴奥壁天井部



27．Ⅲ号穴奥壁基部

出土遺物

須恵器　坏蓋，坏身，高坏，小型壺，平瓶，瓹など本横穴群中で最も多くの須恵器が出土した。それぞれの特徴等については表１のとおりである。これらの土器のうち，坏蓋，坏身，瓹には山陰の須恵器編年[注3]Ⅲ期に属するものが含まれるが，他はⅣ期に属するものと考えられる。（図28－１～25）

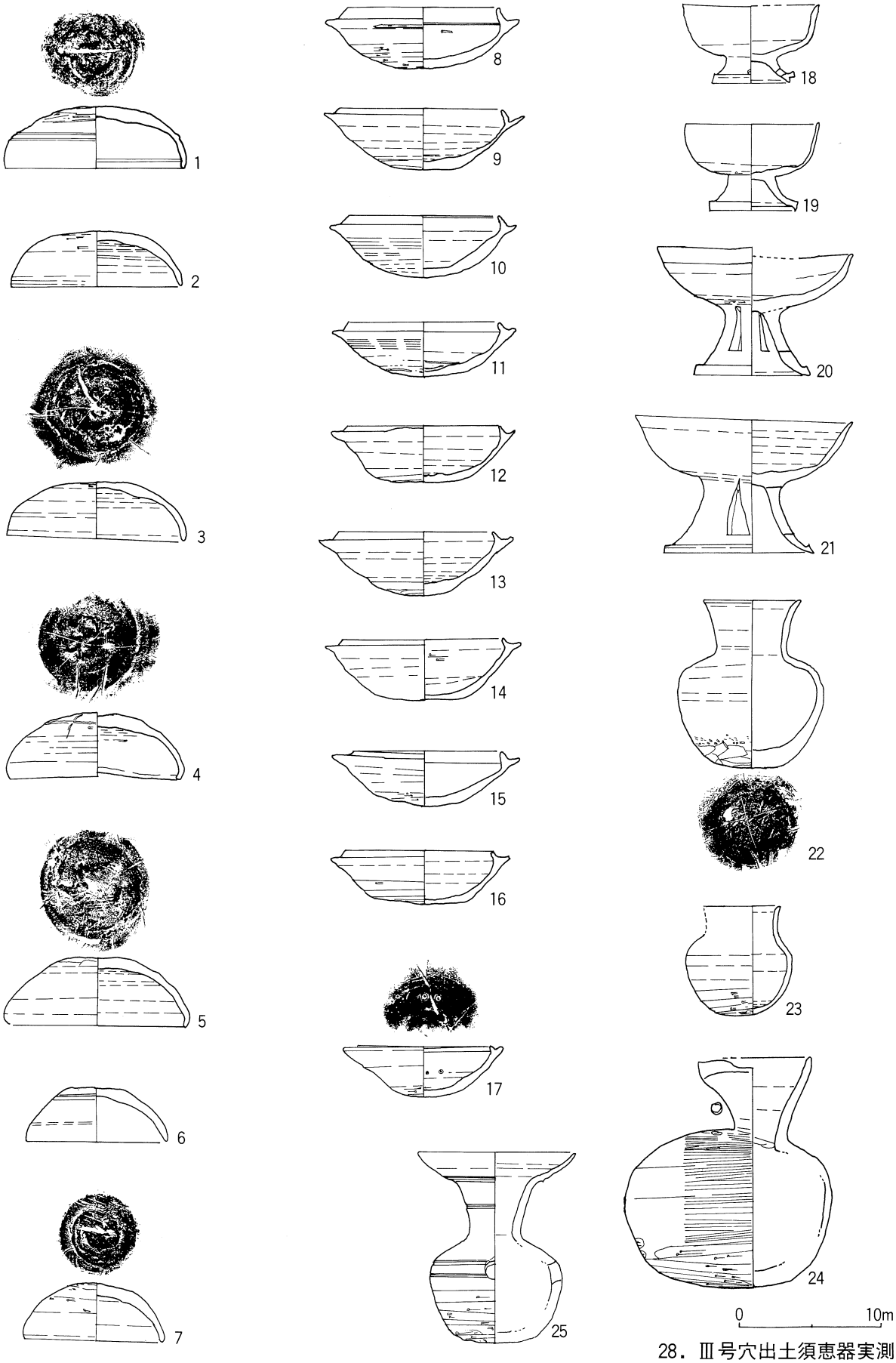
土師器　うす手のもので小破片であるため判然としないが，坏の破片と推定される。

鉄器　刀子４，鉄鏃１が出土した。（図30－１～５）１は両関の刀子で，茎と鋒は判然としない。刃部中程から折れ，残された部分は9.3cmを測る。２は両関の刀子で，鋒の部分から茎にかけて木質が残るが，鋒は不明である。切先を少し欠くが，全長13.1cmと推定される。３は両関の刀子で，茎に木質が残る。刃部及び茎の一部を失い，残された長さは7.9cmを測る。４は無関の刀子で，木質が若干付着している。全長13.6cmを測る。５は細根式の鉄鏃でかえりのないタイプである。

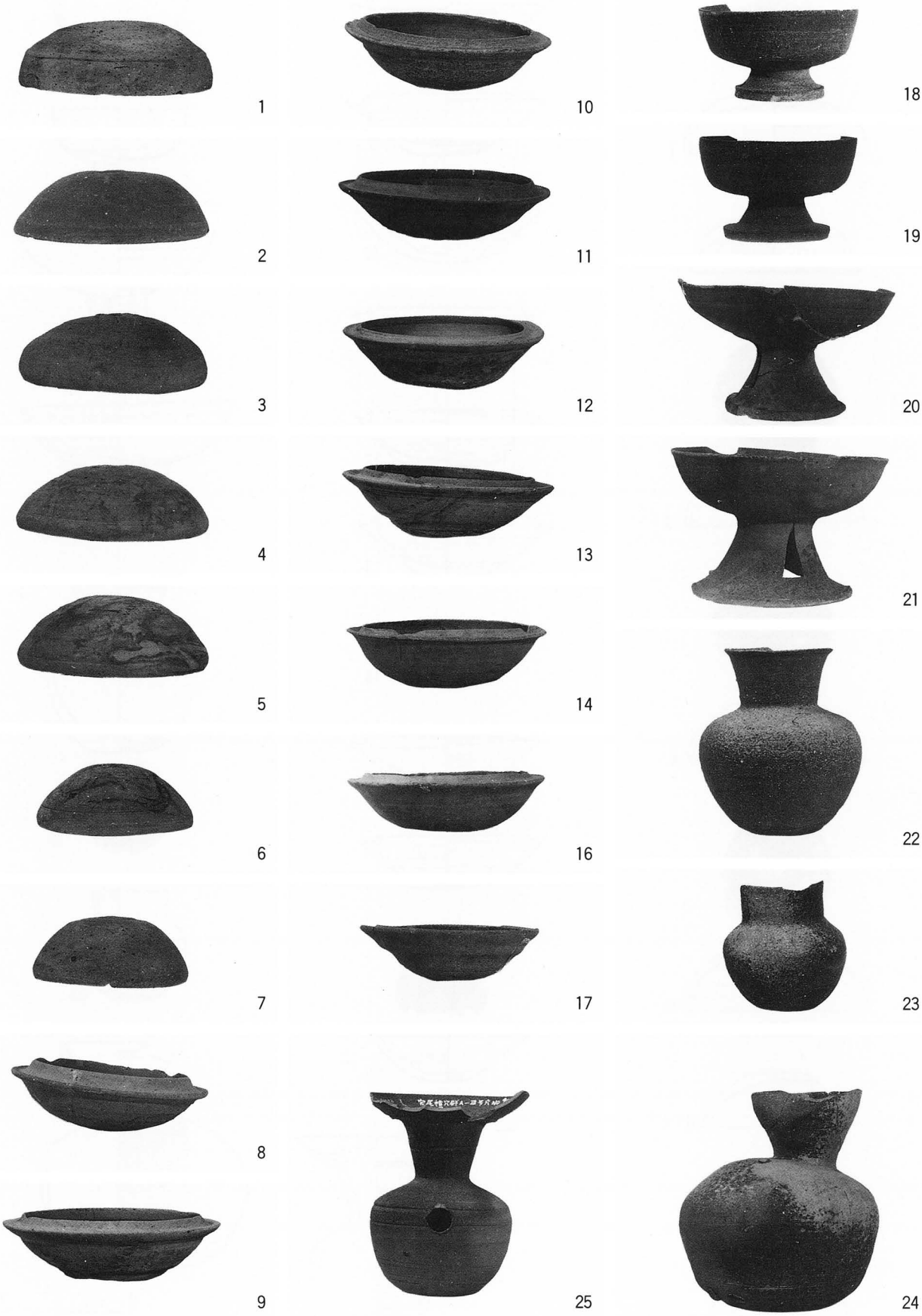
耳環　３個出土している。（図30－６～８）６は比較的保存のよい金環で，長径2.2cm，短径2.0cm，太さ0.4～0.5cmを測る。７と８は質が悪く金環か銀環か不明である。それぞれ長径2.2cm，短径2.1cm，太さ0.4～0.6cmを測る。

表１　Ⅲ号穴出土須恵器観察表

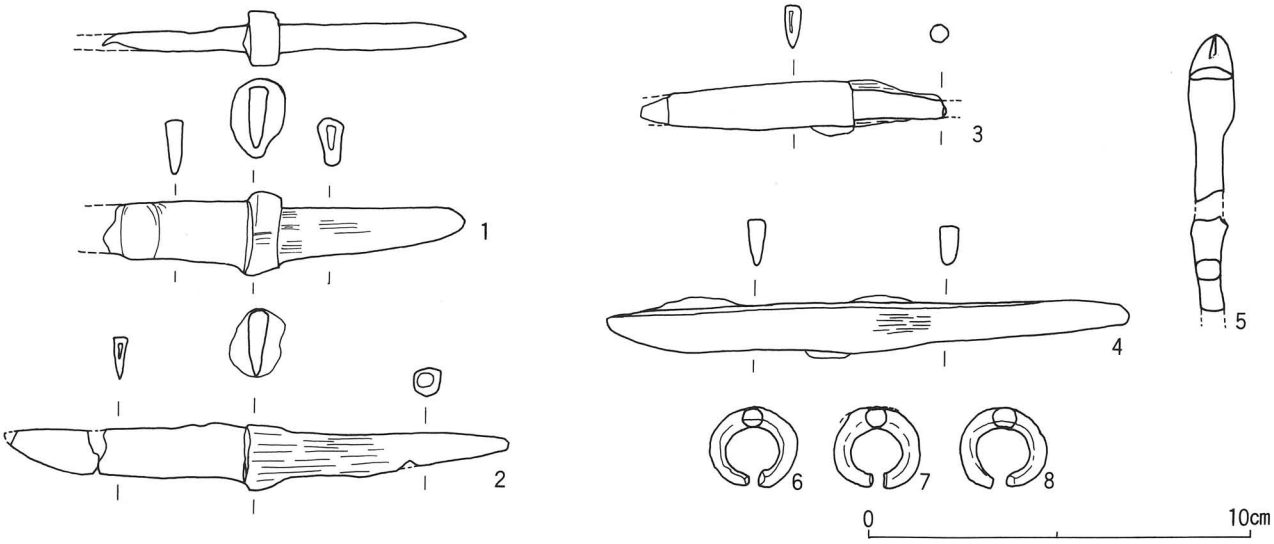
番号	器種	寸法（cm） 口径	胴径	底径	器高	胎土	焼成	色調	備考
1	坏蓋	12.7			4.3	細砂を多く含む	良好	灰色	肩部に２条の沈線を施し凸帯をつくる。頂部にヘラ記号。 内面口縁端に１条の沈線がある。 外面－天井部ヘラケズリ，下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ，下部回転ナデ
2	〃	12.1			4.0	〃	〃	暗灰色	口縁付近に１条の浅い凹線が1/4周する。 外面－天井部ヘラケズリ，下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ，下部回転ナデ
3	〃	12.2			3.0	細砂を含む	〃	灰白色	頂部にヘラ記号。 外面－天井部ヘラケズリ，下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ，下部回転ナデ
4	〃	11.8			4.5	細砂を多く含む 大粒の砂もある	〃	灰色	頂部にヘラ記号。口縁部端が内傾している。 外面－天井部ヘラケズリ，下部回転ナデ 内面－回転ナデ
5	〃	12.4			4.7	細砂を多く含む	〃	暗灰色 灰色	頂部にヘラ記号。口縁部端が内傾している。 外面－天井部ヘラケズリ，下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ，下部回転ナデ
6	〃	9.7			3.8	細砂を多く含む 大粒の砂もある	〃	灰白色	内面－天井部ヘラケズリ，下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ，下部回転ナデ
7	〃	9.7			4.0	細砂を含む	〃	灰色	頂部にヘラ記号。 外面－天井部ヘラケズリ，下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ，下部回転ナデ
8	坏身	10.7	（受部） 13.7		4.3	細砂を多く含む	〃	〃	内面口縁の屈曲部に１条の沈線がある。 外面－上部回転ナデ，下部ヘラケズリ 内面－上部回転ナデ，底部静止ナデ
9	〃	11.6	（〃） 14.1		4.3	細砂を含む	〃	灰白色	外面－上部回転ナデ，下部ヘラケズリ 内面－上部回転ナデ，底部静止ナデ
10	〃	10.6	（〃） 13.1		4.3	大粒の砂を含む	〃	暗灰色 灰色	外面－上部回転ナデ，下部ヘラケズリ 内面－上部回転ナデ，底部静止ナデ
11	〃	10.5	（〃） 13.0		3.9	石英を含む	〃	黒灰色	内面口縁の屈曲部に明瞭な線が入る。 外面－上部回転ナデ，底部ヘラ切り痕 内面－上部回転ナデ，底部静止ナデ
12	〃	10.7	（〃） 13.1		3.8	細砂を多く含む	〃	暗灰色 灰色	外面－上部回転ナデ，下部ヘラケズリ 内面－上部回転ナデ，底部静止ナデ
13	〃	9.9	（〃） 13.7		4.5	細砂を含む	〃	灰白色 灰色	外面－上部回転ナデ，下部ヘラケズリ 内面－上部回転ナデ，底部静止ナデ
14	〃	11.4	（〃） 13.8		4.3	〃	〃	灰色	底部にかすかな×状のヘラ記号 外面－上部回転ナデ，底部ヘラ切り痕 内面－上部回転ナデ，底部静止ナデ
15	〃	10.6	（〃） 13.1		2.9	細砂を含む	〃	灰色 淡灰色	内面口縁の屈曲部に明瞭な線が入る。 外面－上部回転ナデ，下部ヘラケズリ 内面－上部回転ナデ，底部静止ナデ
16	〃	10.4	（〃） 12.6		4.8	細砂を多く含む	〃	灰白色	外面－上部回転ナデ，下部ヘラケズリ 内面－上部回転ナデ，底部静止ナデ
17	〃	9.3	（〃） 11.4		3.5	細砂を含む	〃	黒灰色	内面に径2.5㎜の円文２，長径２㎜のだ円文１がある。 外面－上部回転ナデ，下部ヘラケズリ 内面－上部回転ナデ，底部静止ナデ
18	高坏	9.6		（脚） 5.0	5.4	細砂を多く含む	〃	〃	脚部に径５㎜の円形すかし１がある。 全面－回転ナデ
19	〃	9.4		（〃） 6.1	6.1	〃	〃	〃	外面－坏下部ヘラケズリ，他は回転ナデ 内面－回転ナデ
20	〃	13.9		（〃） 8.3	9.0	細砂を含む 大粒の砂もある	〃	〃	坏部は大きく広がる。脚部に台形すかし２がある。 全面－回転ナデ
21	〃	15.3		（〃） 10.6	9.4	密	〃	〃	坏部は大きく広がる。脚部に三角形すかし２がある。 全面－回転ナデ
22	小型壺	6.8	10.4		11.8	細砂を多く含む 大粒の砂もある	〃	〃	底面にヘラ記号がある。 外面－底部ヘラケズリ，他は回転ナデ 内面－底部近くまで回転ナデ
23	〃	5.4	7.5		7.6	細砂を多く含む	〃	〃	外面－胴部より上回転ナデ，下部ヘラケズリ，底部ヘラ切り痕 内面－回転ナデ，底部静止ナデ
24	平瓶	8.0	16.1		16.0	砂粒を含む	〃	淡灰色 全面に自然釉	胴部上面に把手の退化したはりつけ浮文２がある。 外面－口縁～頸部回転ナデ，胴部カキ目，底部ヘラケズリ 内面－回転ナデ，底部不明
25	瓶	11.1	9.3		13.9	細砂を多く含む	〃	暗灰色 灰色	口縁下端と頸部に各１条，胴部に２条の沈線が入る。 外面－口縁～胴部上半部回転ナデ，下部ヘラケズリ 内面－回転ナデ，底部不明



28．Ⅲ号穴出土須恵器実測図



29．Ⅲ号穴出土須恵器



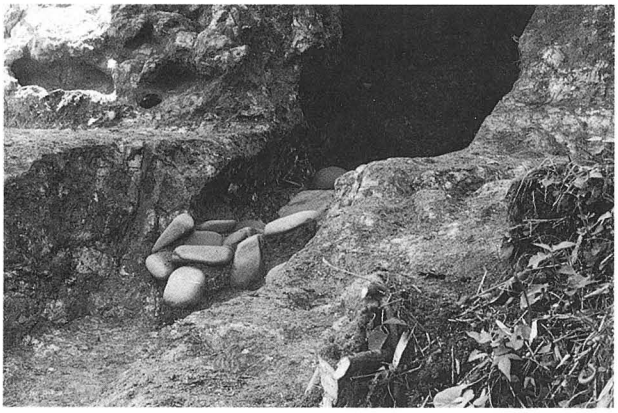
30．Ⅲ号穴出土遺物実測図

31．Ⅲ号穴出土耳環

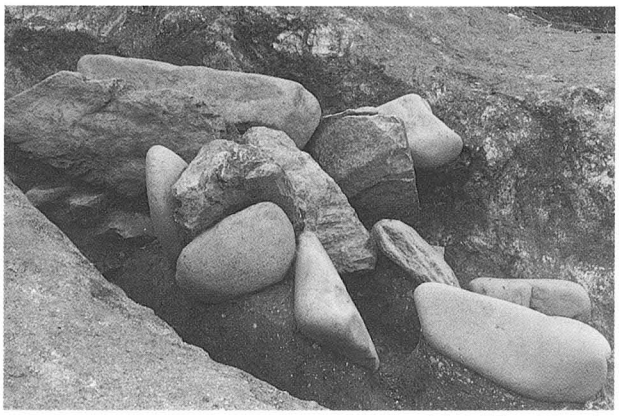
Ⅳ 号 穴

位置と横穴の形態

調査区の中央よりやや西に寄った部分で検出された。床面の標高は約11.5mである。玄室の内部は後世の利用のためか再加工されており，玄室および羨道部の天井は失われている。しかし，再加工面から下の部分は良好な保存状態を保っている。横穴の全長は主軸に沿って6.7mと本横穴群のうちで最も長いものである。前庭部は長さ234cm，幅110cmを測る。羨門部より一段低くなっているが，床は平坦である。羨道部は204cmと長いもので，羨門部に閉塞石用のくり込みを設けている。幅は羨門で34cm，玄門で93cmを測り，奥に進むにつれて広くなっている。底部はU字形にくぼんでおり，側壁も湾曲していることから，羨道は横断面楕円形をしていたものと考えられる。羨門から奥の部分にかけて，閉塞石の石組が検出された。羨門付近下部の石組は，検出状況から遺体埋葬時のものと思われるが，羨道中程の閉塞石はかなり古い時点で動かされたとも推定できる。玄室は奥行き232cm幅186cmを測る長方形プランをもつ。壁に沿って排水溝が設けられているが，全周していない。また玄室床面に人頭大の河原石が検出されたが，配列等に規則性はみられない。後世の再加工のため判然としないが，玄室内の東西両壁の傾斜などから，横断面三角形の妻入テント形と推定できる。



32．Ⅳ号穴羨道部



33．Ⅳ号穴閉塞用石組

土層の堆積状況

横穴内部には流入土が充満していた。いつかの時点に開口あるいは天井部の崩落があったらしく，玄室床面付近に斜めに堆積する土層がみられる。その後，前庭から羨道部にかけて黄色ブロック入土層の上面が平坦にならされている。この層から上面の玄室内壁および天井は再加工された部分があり，下の面は元の状況を比較的よく残している。

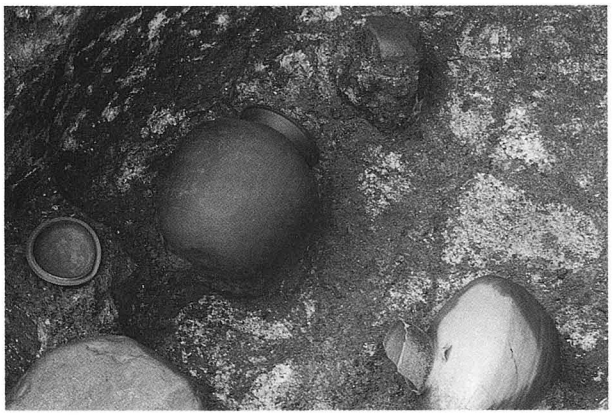
表２　Ⅳ号穴出土須恵器観察表

番号	器種	寸法（cm）				胎土	焼成	色調	備考
		口径	胴径	底径	器高				
1	坏蓋	11.4			4.1	細砂を多く含む 大粒の砂もある	良好	黄灰色	内面天井部にヘラ記号。 外面－天井部静止ナデ，下部回転ナデ 内面－回転ナデ
2	坏身	10.2	(受部) 12.5		3.7	細砂を含む	〃	暗灰色	口縁端の断面はシャープである。 外面－上部回転ナデ，下部ヘラ切り後静止ナテ 内面－上部回転ナデ，底部静止ナデ
3	甕	16.7	28.5		29.0	砂粒を含む	〃	暗灰色	外面－口縁部回転ナデ，胴部平行タタキ後水平方向のカキ目 内面－口縁部回転ナデ，下部同心円状のタタキ
4	平瓶	9.7	28.4		27.4	細砂を含む	〃	灰色 黒灰色	肩部に把手２がある。 外面－口縁～頸部回転ナデ，下部格子状のタタキ。 内面－回転ナデ，同心円状のタタキ

1. 黄褐色粘土(地山ブロック入)
2. 地山ブロック
3. 茶褐色粘土(地山ブロック入)
4. 赤褐色粘土層(地山ブロック入)
5. 暗茶褐色粘土
6. 明赤褐色土(微細ブロック入)
7. 明赤褐色土(地山ブロック入)
8. 明赤褐色粘土
9. 黄色ブロック入土
10. 9のやや黒ずんだ土
11. ブロック入赤褐色土
12. ブロック入赤褐色粘土
13. 微細ブロック入赤色粘土
空間
A
B
L=1258.9cm
0
2m

34. Ⅳ号穴実測図

35．Ⅳ号穴羨道部石組及び遺物出土状況

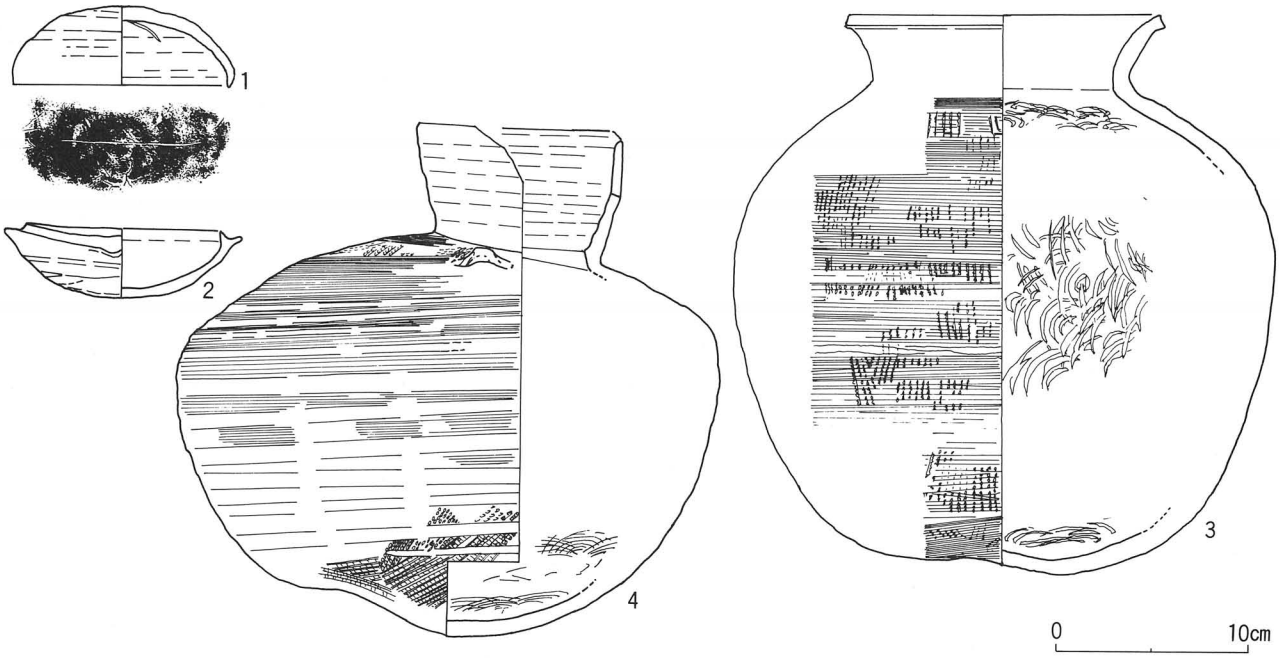


36．Ⅳ号穴羨道部遺物出土状況

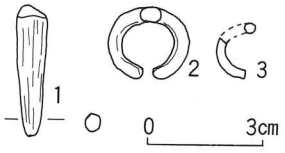
38．Ⅳ号穴羨門部

37．Ⅳ号穴玄室

39．Ⅳ号穴羨門部から玄室をみる



40. Ⅳ号穴出土須恵器実測図



41. Ⅳ号穴出土遺物実測図

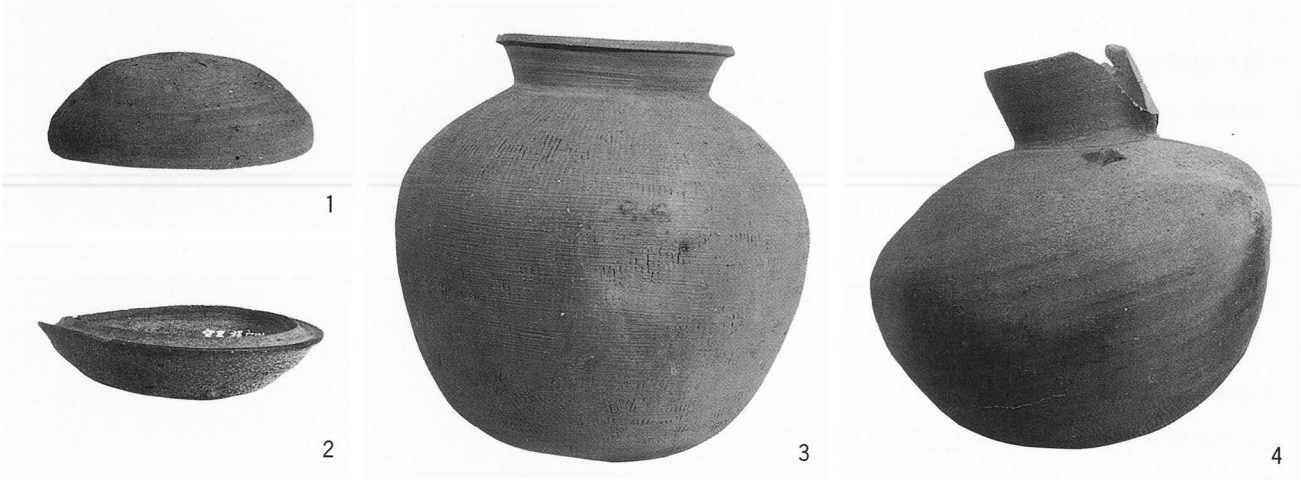
玄室内で須恵器甕片，鉄鏃，金環，羨道部で坏，中形の甕，大形の平瓶が検出された。甕と平瓶は羨道部玄門付近の両側壁部に置かれていた。

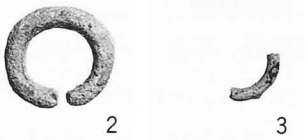
出土遺物

須恵器　器形のわかるものは４個ある。それぞれの特徴については表２のとおりである。坏蓋，坏身は山陰の須恵器編年Ⅳ期のものである。（図40－１～４）

鉄器　鉄鏃の茎部分と推定されるものが１点出土した。（図41－１）長さ3.5cmを測り，木質が若干付着している。

耳環　２個出土した。（図41－２・３）２は金環である。長径2.1cm，短径1.9cm，太さ0.3～0.5cmを測る。３は金環の破片であるが，太さが0.3cmの細いものである。いずれも金の部分がかすかに残る程度である。





42. Ⅳ号穴出土遺物

Ⅴ 号 穴

位置と横穴の形態

Ⅲ号穴とⅣ号穴の中間に位置し，床面の標高約10.3mで，Ⅲ号穴とほぼ同一レベルに穿たれている。天井部は落盤のため失われているが，本横群中で最も保存の良いものである。全長は主軸に沿って392cmを測る。前庭部に相当する部分はごくわずかで，主軸に沿って24cmの長さを残すのみである。前庭部は存在しなかったか，あるいは崖くずれ等によって失われたのであろう。羨道部は長さ128cm，幅70cmを測る。河原石によって閉塞された状態で検出された。玄室のほぼ中央から主軸に対して約10°東に傾いた形で穿たれ，羨道の横断面は鶏卵形を呈している。羨門の閉塞石用くり込み基部には浅い掘り込みが存在する。玄室は方形プランで奥行240cm，幅232cm，奥壁部の高さ184cmを測る。奥壁はやや湾曲しながら立ちあがっている。横断面三角形の妻入テント形の横穴である。床面には，側壁に沿った部分と奥壁付近から主軸に沿った部分に排水溝が掘られ，玄門付近でまとめられている。

土層の堆積状況

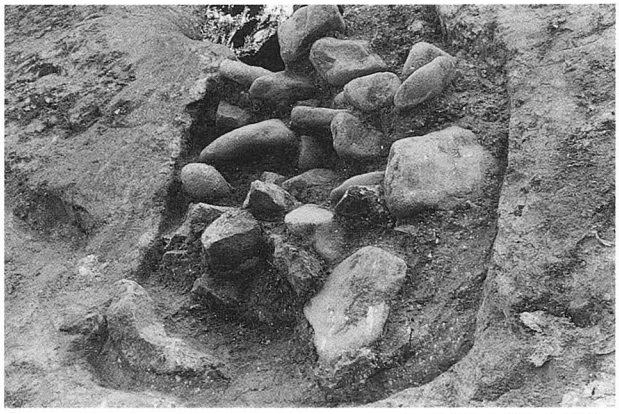
この横穴は玄室天井部が落盤していたため，大部分が地山のブロックを含む落盤土で充満していた。床面近くに明褐色粘土が認められ，その上部に羨道部の閉塞石付近から暗黒褐色土が斜めに堆積していた。いつかの時点で玄門付近が崩落し，しばらくしてから天井部の落盤があったものと思われる。

遺物等の検出状況

玄室内に河原石が点在し，出土遺物には須恵器，刀子，耳環，勾玉がある。

出土遺物

須恵器　坏蓋，坏身，高坏，壺，提瓶，平瓶，瑕が出土している。それぞれの特徴については表３のとおりである。坏蓋には山陰の須恵器編年Ⅲ期末に属するものも含

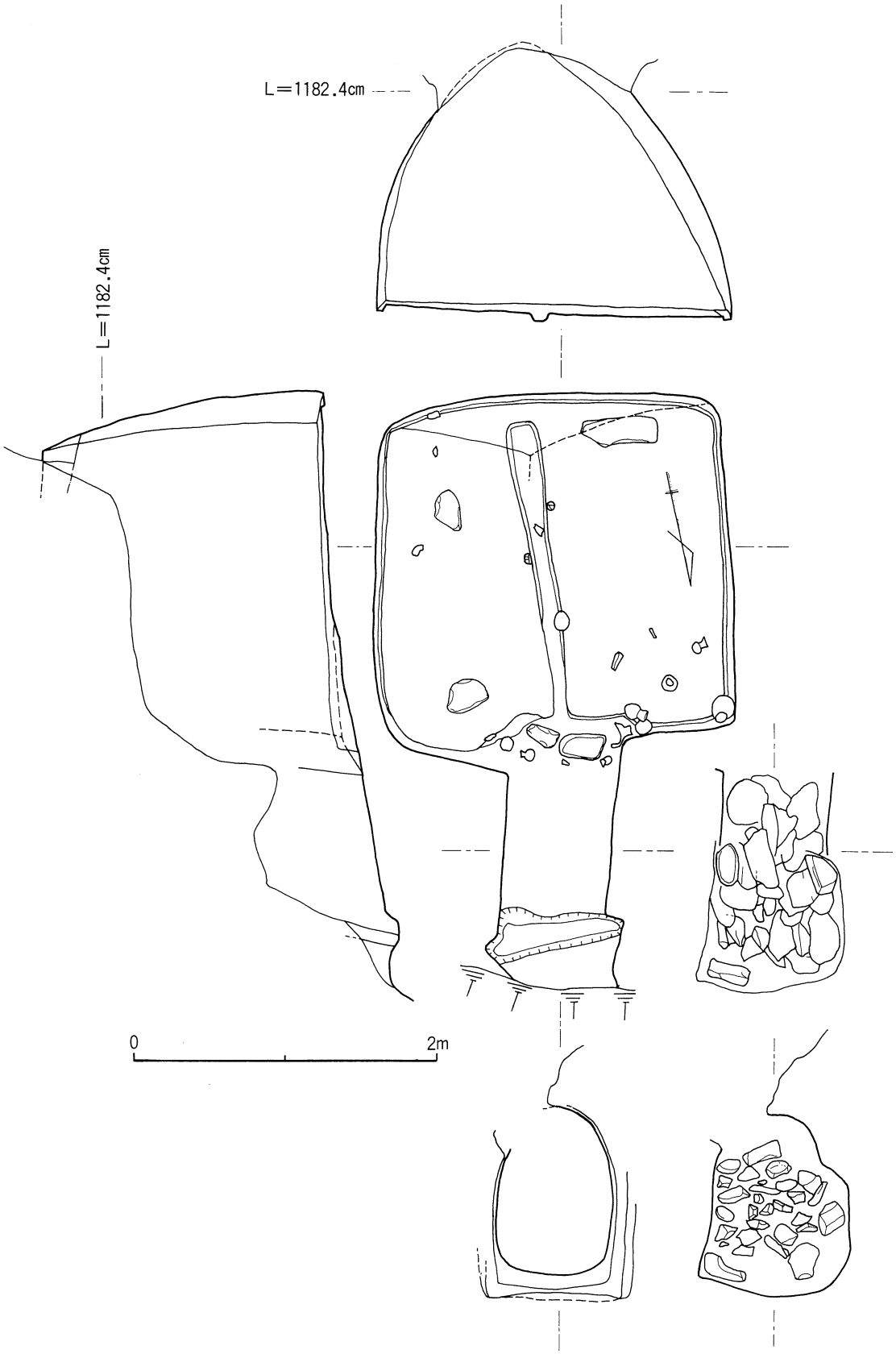


43．Ⅴ号穴閉塞状況

44．Ⅴ号穴羨道部

45．Ⅴ号穴奥壁天井部

46．Ⅴ号穴奥壁基部



47．Ⅴ号穴実測図

48．Ⅴ号穴玄室南西側

50．Ⅴ号穴玄室北西側

49．Ⅴ号穴玄室南東側

51．Ⅴ号穴玄室北東側

52．Ⅴ号穴玄室

まれるが，他の坏蓋，坏身，高坏，瓹などはⅣ期の特徴を示している。（図53－１～13）

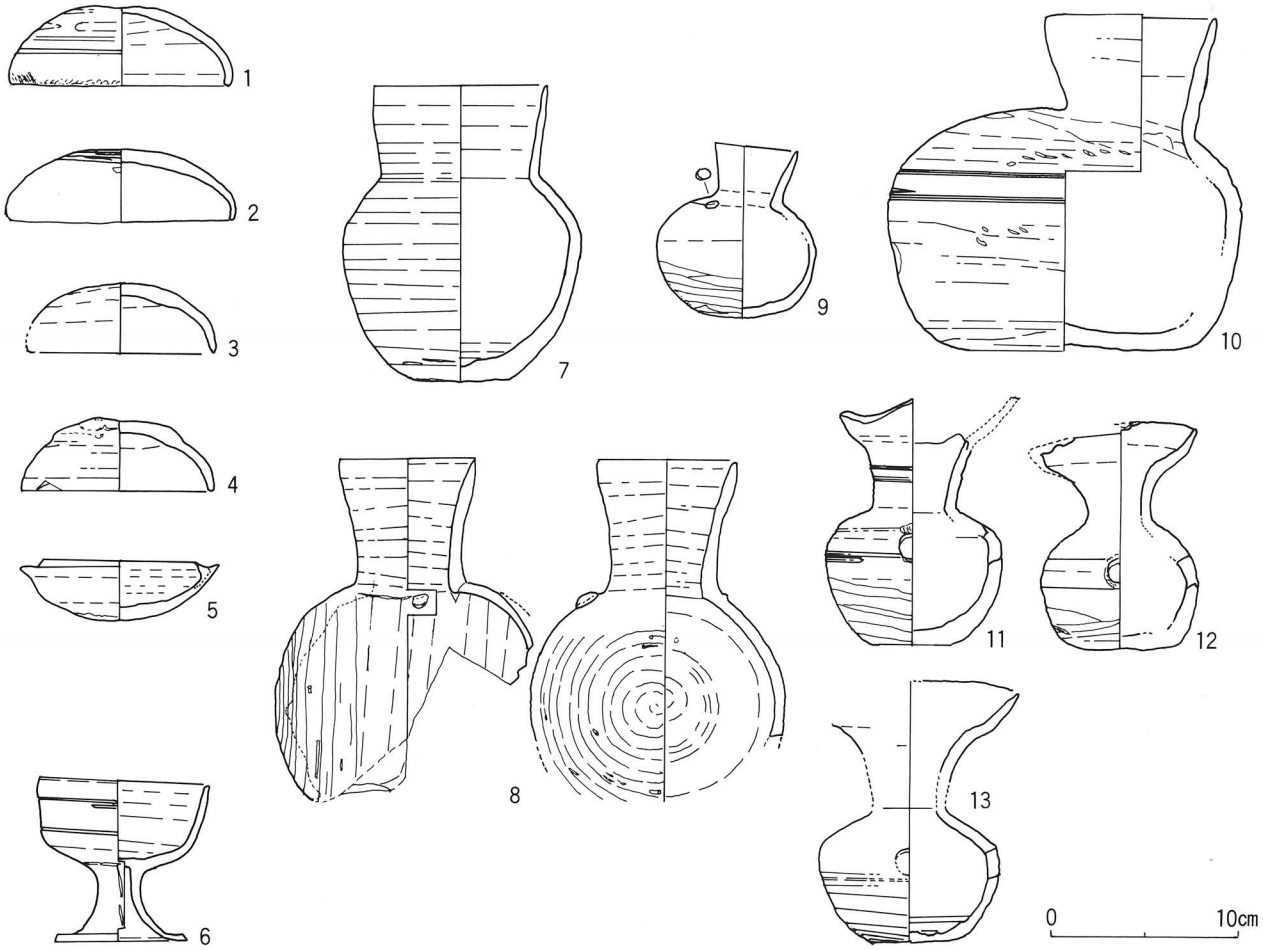
刀子　刃部から茎にかけて次第に細くなる，ややあいまいな両関タイプのもので，茎に木質と鹿角（？）とも考えられる白いものが若干付着している。刀と茎の一部が失われ，長さ7.5cmを測る。（図55－１）

耳環　５個出土している。（図55－２～６）２はかなりいたんだ金環である。長径2.3cm，短径2.2cm，太さ0.5～0.7cmを測る。３はかなりいたんだ銀環である。長径2.3cm，短径2.1cm，太さ0.3～0.4cmを測る。４はきわめて保存が悪く金環か銀環か不明である。推定長径2.3cm，短径2.1cm，太さ0.4～0.6cmを測る。５はきわめて保存が悪い金環である。推定長径2.9cm，推定短径2.7cm，太さ0.6～0.7cmを測る。６はきわめて保存が悪く金環か銀環か不明である。推定長径3.1cm，推定短径2.7cm，太さ0.5～0.9cmを測る。

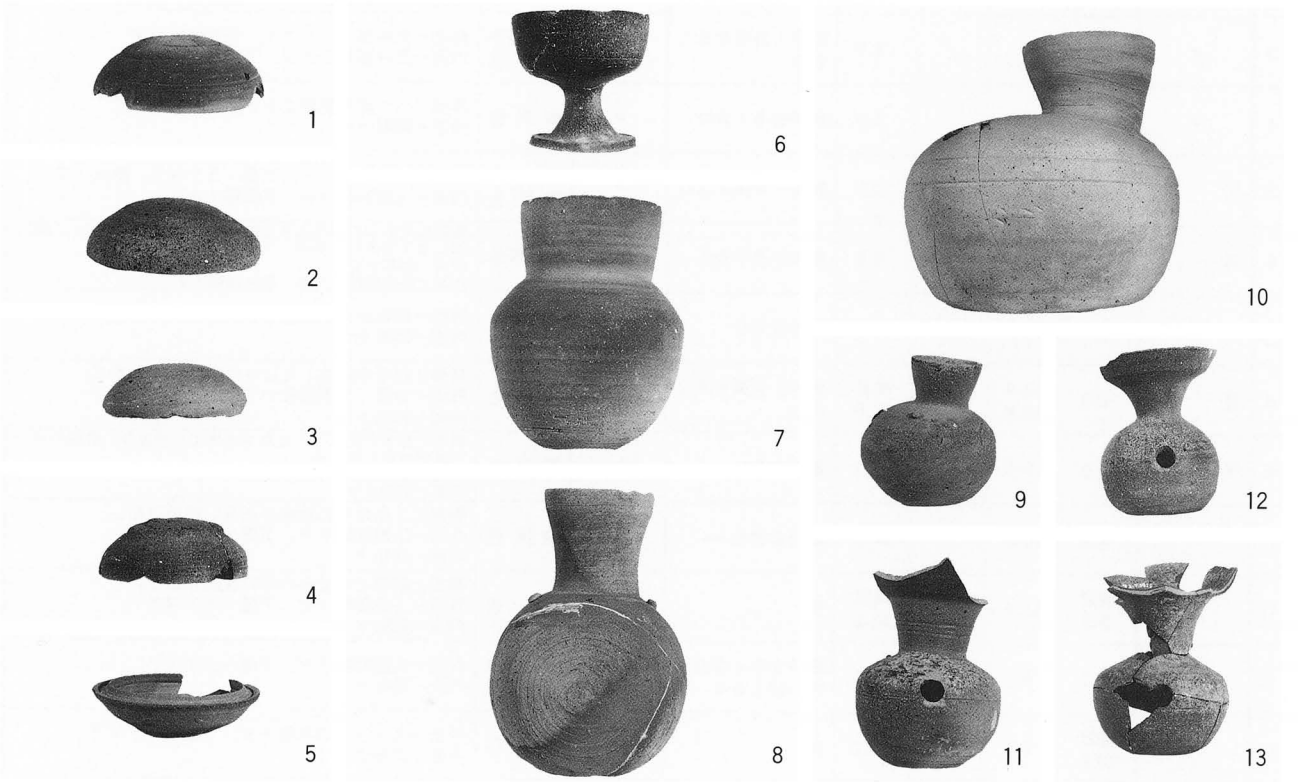
勾玉　水晶製のもので，長さ2.6cm，厚さ0.7cmを測る。穿孔は片面から行っている。（図55－７）

表３　Ⅴ号穴出土須恵器観察表

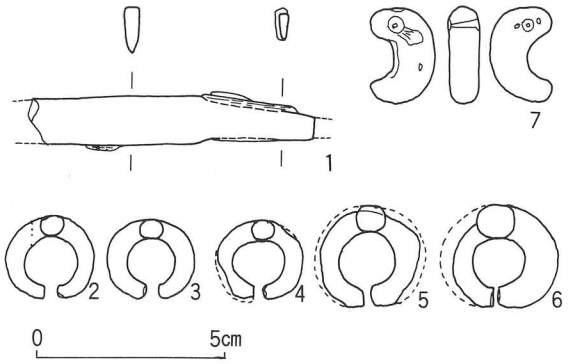
番号	器種	寸法（cm）				胎土	焼成	色調	備考
		口径	胴径	底径	器高				
1	坏蓋	11.5			4.1	細砂を多く含む	良好	黒灰色 灰色	肩部に１条の沈線がある。口縁部端はわずかに内傾する。 外面－天井部ヘラケズリ，下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ，下部回転ナデ
2	〃	11.9			3.8	〃	〃	暗灰色	口縁部はわずかに内傾する。 外面－天井部ヘラケズリ，下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ，下部回転ナデ
3	〃	9.8			3.7	細砂・石英を多く含む	〃	淡灰褐色 灰色	外面－天井部ヘラケズリ，下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ，下部回転ナデ
4	〃	10.0			3.9	細砂を多く含む	〃	暗灰色	外面－ヘラ切り後静止ナデ，下部回転ナデ 内面－回転ナデ
5	坏身	8.0	（受部） 10.5		3.2	細砂，石英を含む	〃	灰色 淡灰色	外面－上部回転ナデ，下部ヘラケズリ，静止ナデ 内面－上部回転ナデ，下部静止ナデ
6	高坏	9.0		（脚） 7.0	8.6	細砂を若干含む	〃	濃青灰色	脚部にすかしの切り込み２があるが貫通してしない。脚内面に上下方向に３本のヘラ記号がある。 外面－回転ナデ 内面－坏底部静止ナデ，他は回転ナデ
7	壺	9.1	12.7		15.6	細砂を含む	〃	青灰色	外面－回転ナデ，底部ヘラケズリ 内面－回転ナデ
8	提瓶	7.3	13.4 13.8		推定 19.0	細砂，石英を多く含む	〃	淡灰色	肩部に把手の退化したはりつけ浮文２がある。 外面－口縁～頸部回転ナデ，胴部ヘラケズリ 内面－回転ナデ
9	平瓶	3.9	8.5		9.1	細砂を含む	〃	暗灰色	肩部に把手の退化したはりつけ浮文１がある。黒色のガラス質が付着している。 外面－上部回転ナデ，下部ヘラケズリ 内面－回転ナデ
10	〃	9.2	18.6		17.8	砂粒を含む	〃	白灰色	胴部に２条の平行沈線がある。把手はない。 外面－上部回転ナデ，下部ヘラケズリ 内面－回転ナデ
11	瓹	推定 9.7	11.4		推定 13.2	密	〃	灰色	頸部と胴部に各２条の平行沈線がある。 外面－上部回転ナデ，下部ヘラケズリ 内面－回転ナデ
12	〃	8.2	8.7		11.5	細砂を多く含む大粒の砂もある	〃	暗灰色 灰色	外面－上部回転ナデ，下部ヘラケズリ 内面－回転ナデ
13	〃	推定 10.5	9.5		13.7	密	〃	暗灰色	外面－孔より上部回転ナデ，下部ヘラケズリ 内面－回転ナデ



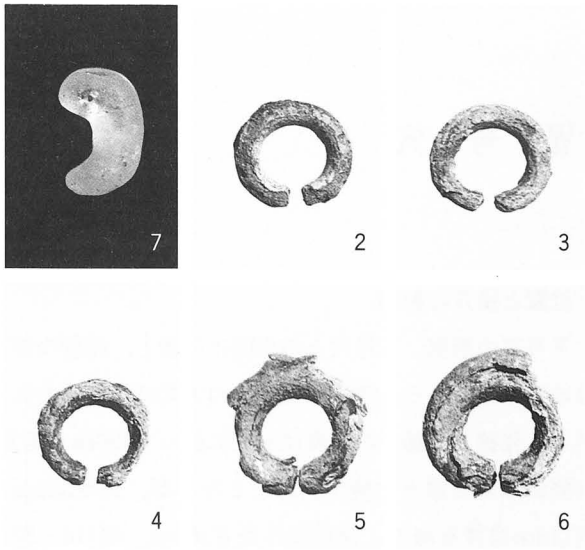
53．Ⅴ号穴出土須恵器実測図



54．Ⅴ号穴出土須恵器



55．Ⅴ号穴出土遺物実測図

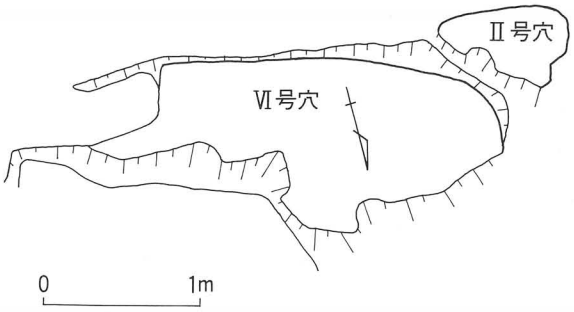


56．Ⅴ号穴出土遺物

Ⅵ 号 穴

Ⅲ号穴の上面にあたり，床面の標高は約12.5mである。横穴かどうか不明であるが，奥壁にあたる部分に人為的な加工の跡がみられる。旧地権者の話などから，島根町誌に紹介されたNo.1の横穴とも考えられるが，不明である。横穴であるとすれば，前述のⅡ号穴はⅥ号穴の壁にさらに掘込まれた棚状のものと言えよう。逆に横穴でないとすれば，Ⅱ号穴を穿った後に何らかの理由で奥壁にあたる部分を加工したものと考えられる。

出土遺物は検出されなかったが，Ⅲ号穴の項で記した高坏や平瓶（図28－20・24）はⅥ号穴から転落した可能性がある。また，正確な出土地点は不明であるが，島根町誌には山陰の須恵器編年Ⅲ期に属する瓿が紹介されている。前述のNo.1の横穴出とも考えられる。



57．Ⅵ号穴実測図

58．Ⅵ号穴

Ⅶ 号 穴

位置と横穴の形態

Ⅳ号穴の西側，Ⅷ号穴との中間に位置し，床面の標高は約11.4mである。羨道部と玄室の天井は既に失われている。発掘した部分の全長は主軸に沿って496cmを測る。前庭部は羨道部との境が判然としないが，長さ259cm，幅116cm前後を測る。羨道部は長さ168cm，幅118～87cmを測り，羨門あたりから奥にかけて閉塞石の石組が検出された。Ⅳ号穴と同様に，この石組は上半分は失われていた。前述のように玄室は調査対象区内の一部のみを発掘した。調査壙の壁にあらわれた東壁の断面から，横断面三角形の妻入テント形と推定できる。前庭部から玄室にかけて，床面は断面U字形にくぼんでいる点が他の横穴と異なっている。

土層の堆積状況

調査対象部分の羨道から玄室にかけては，かなり早い時点で落盤したらしい。土層は巨視的にみた場合，水平に堆積していると言ってよいであろう。

遺物の検出状況

羨道部と玄室で須恵器，玄室で大刀が検出された。

出土遺物

須恵器　坏蓋，坏身が出土した。それぞれの特徴は表4のとおりである。玄室内西側床面から出土した坏蓋は山陰の須恵器編年Ⅲ期末～Ⅳ期と考えられるが，他の遺物はⅣ期に属する。羨道部出土の輪状つまみをもつ蓋と玄室内出土の高台付坏は一対のものであろう。（図65－1～5）

大刀　かなり銹化の進んだものである。発掘区域内で検出した部分のみを採取したので，全体は不明である。刃幅3cm前後の直刀で，採取した部分の全長は切先から34.4cmを測る。刀身のみで，把頭および鞘金具等は検出されなかった。（図66）

表4　Ⅶ号穴出土須恵器観察表

番号	器種	寸法（cm）				胎土	焼成	色調	備考
		口径	胴径	底径	器高				
1	坏蓋	13.2			4.3	細砂を多く含む大粒の砂もある	良好	淡灰色	肩部に1条の沈線がある。内面口縁付近に1条の沈線がある。 外面－天井部ヘラケズリ，下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ，下部回転ナデ
2	〃	10.3			4.0	砂粒を含む	〃	淡黄灰色	頂部にヘラ記号 外面－天井ヘラケズリ後静止ナデ，下部回転ナデ 内面－回転ナデ
3	〃	15.7			3.2	細砂を多く含む	〃	灰色	輪状つまみをもち，縁端部内面はかえりがつく。内面天井部にヘラ記号。 外面－つまみ部と縁端部が回転ナデ，中間部はヘラケズリ後回転ナデ 内面－天井静止ナデ，下部回転ナデ
4	坏身	14.5		8.1	4.7	〃	〃	〃	高台がつく。坏部内面にヘラ記号。 外面－回転ナデ 内面－回転ナデ
5	甕					〃	〃	黒灰色 暗灰色	頸部破片，平行する沈線文の間にクシ描き波状文を施す。 外面－回転ナデ 内面－回転ナデ

1. 暗褐色粘質土
2. 赤褐色粘質土
3. 地山ブロック
4. 地山ブロック入黄褐色粘質土
5. ブロック入赤褐色粘質土
6. ブロック入暗茶褐色土
7. 茶褐色土(微細ブロック入)
8. 暗茶褐色粘質土
9. 明赤褐色土
L=1239.8cm
L=1239.8cm
L=1239.8cm
L=1239.8cm
0
2m

59. Ⅶ号穴実測図

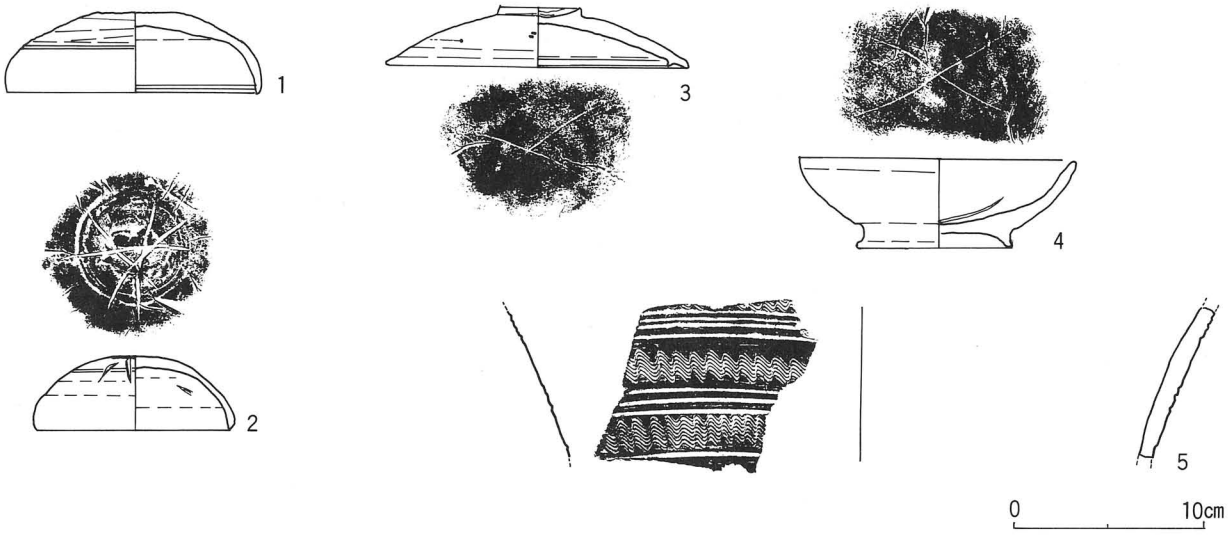
60．Ⅶ号穴玄室

61．Ⅶ号穴玄室

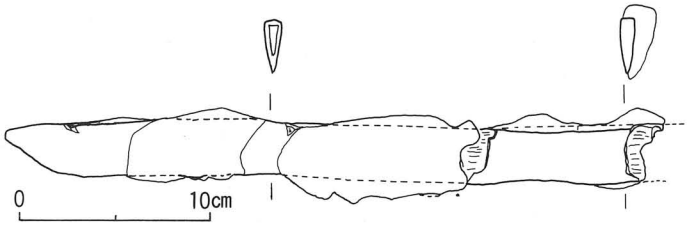
63．Ⅶ号穴羨道部石組除去後

62．Ⅶ号穴羨道部閉塞用石組

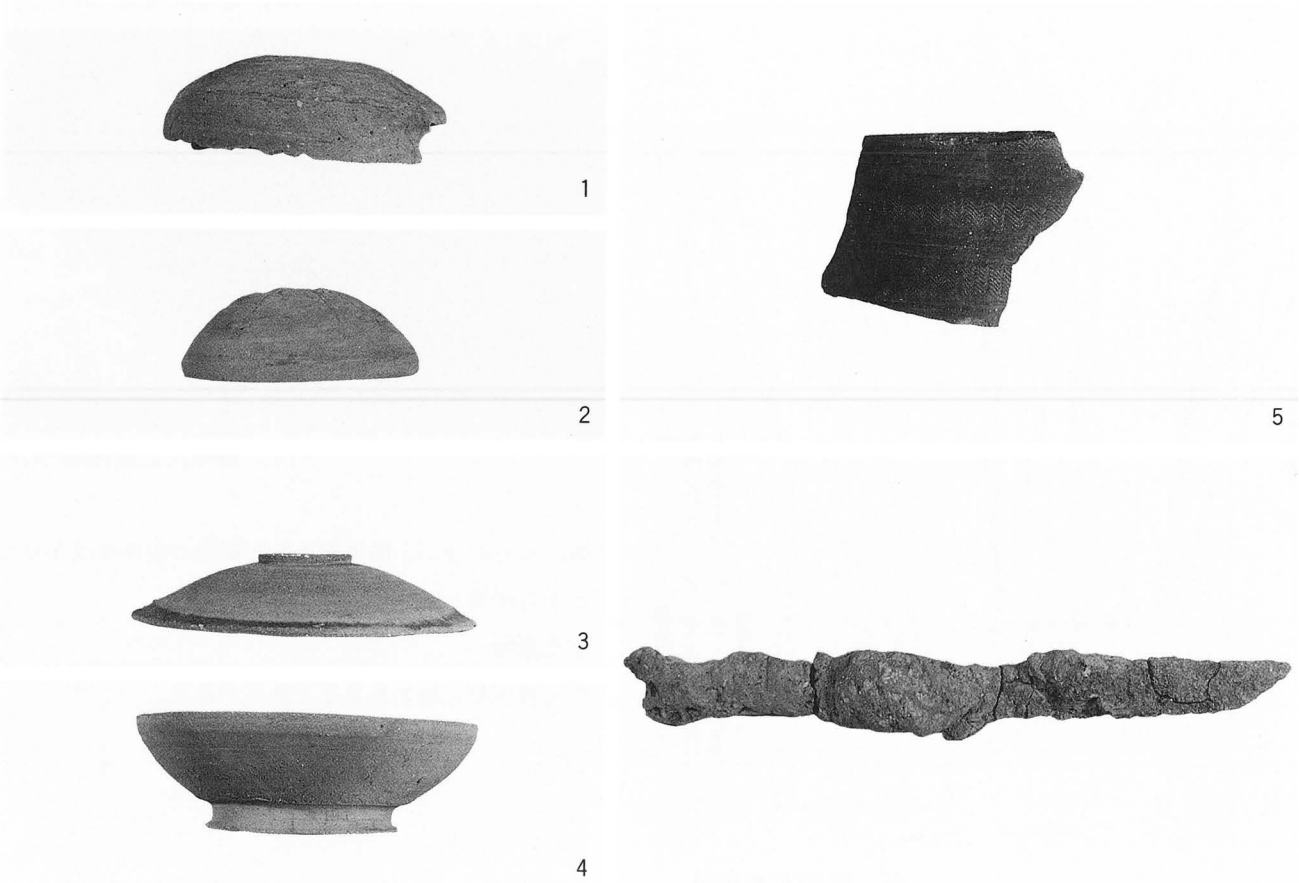
64．Ⅶ号穴羨道部石組除去後



65．Ⅶ号穴出土須恵器実測図



66．Ⅶ号穴出土大刀実測図



67．Ⅶ号穴出土遺物

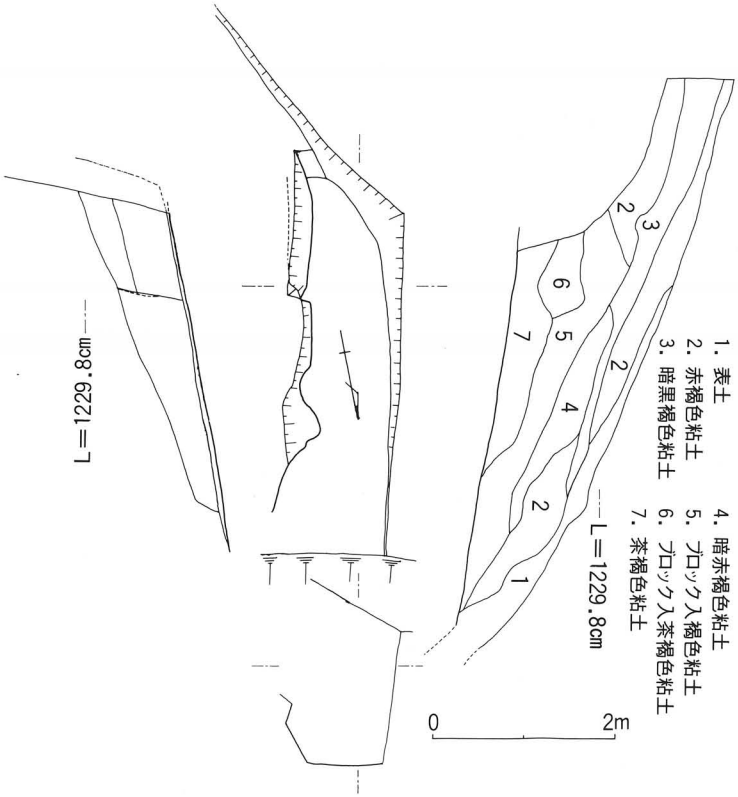
Ⅷ 号 穴

位置と横穴の形態

Ⅶ号穴の西側に位置する。床面の標高は約11.3mである。調査区の西端ぎりぎりに存在しており，前庭部から羨道部に至る部分の東壁および床面のみを発掘した。発掘した部分の全長は主軸に沿って420cmを測る。前庭部端から約280cmのあたりで東壁に変化がみられる。東壁と対称的な西壁を推定すると，前庭部より幅が広くなるという点で他の横穴と異なるが，羨道部かと思われる。主軸に沿って約140cmの長さを検出した。床面は特に変化はないが，約10°のゆるやかな傾斜をもつ。閉塞石は検出されなかった。

土層の堆積状況

何層かに分けられるが，自然的な堆積を示し特に乱れた層はみられない。羨道部とした部分の天井部はかなり早くから崩落していたのであろうか。



68. Ⅷ号穴実測図

69. Ⅷ号穴東壁(北から)

70. Ⅷ号穴東壁(南から)

71. Ⅷ号穴土層堆積状況

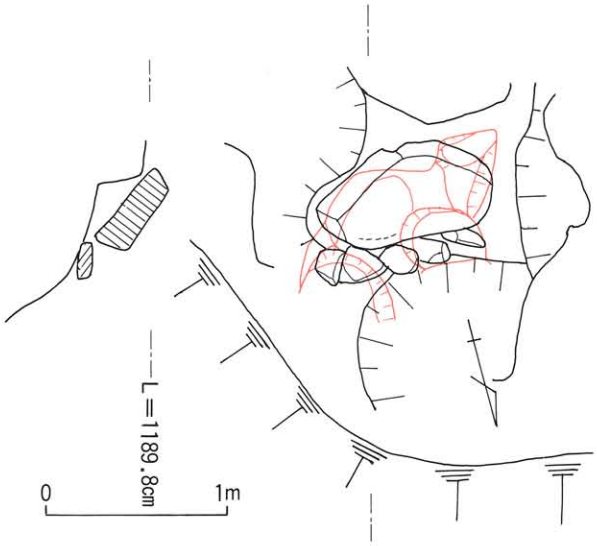
出土遺物

須恵器甕片と思われる小片数点がある。

石 組 遺 構

Ⅶ号穴とⅧ号穴の間の部分に位置する。平坦面の北端にあたる部分に置かれ，当初は横穴の閉塞石かと考えられたが，単独のものであった。長径100cm，短径50cm，厚さ約20cmの扁平な割石１と人頭大の割石５が据えられていた。扁平割石は，傾斜した状態で検出されたが，あたかも墓前祭の祭壇のような石組である。

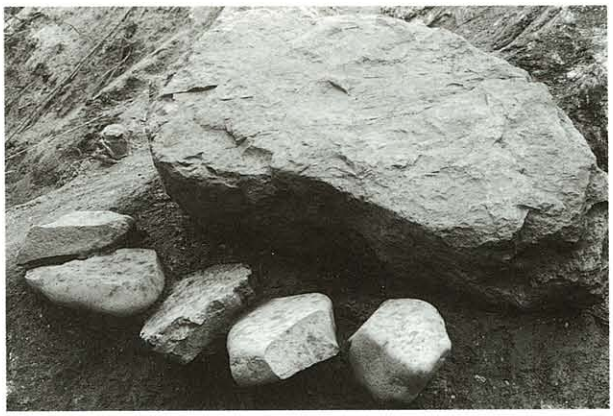
石組の下は，径50cm内外の浅い土壙４が検出された。遺物は検出されず，墓前祭の行われた痕跡も不明であった。



72．Ⅶ号穴とⅧ号穴の間の石組実測図

73．石組遠景

74．石組近景



75．石組近景

76．石組下土壙

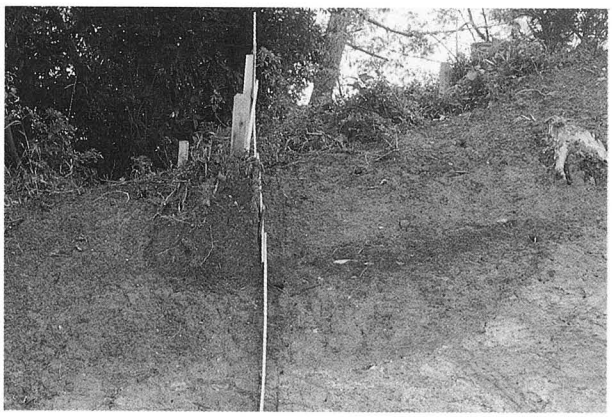
Ⅸ・Ⅹ号穴，SKⅪ

A区頂部の法面掘削工事で検出されたもので，ほぼ同一レベルに並んで存在している。（図79）いずれも法面に断面があらわれている。調査は実測，写真撮影，遺物採取を行ったのみである。

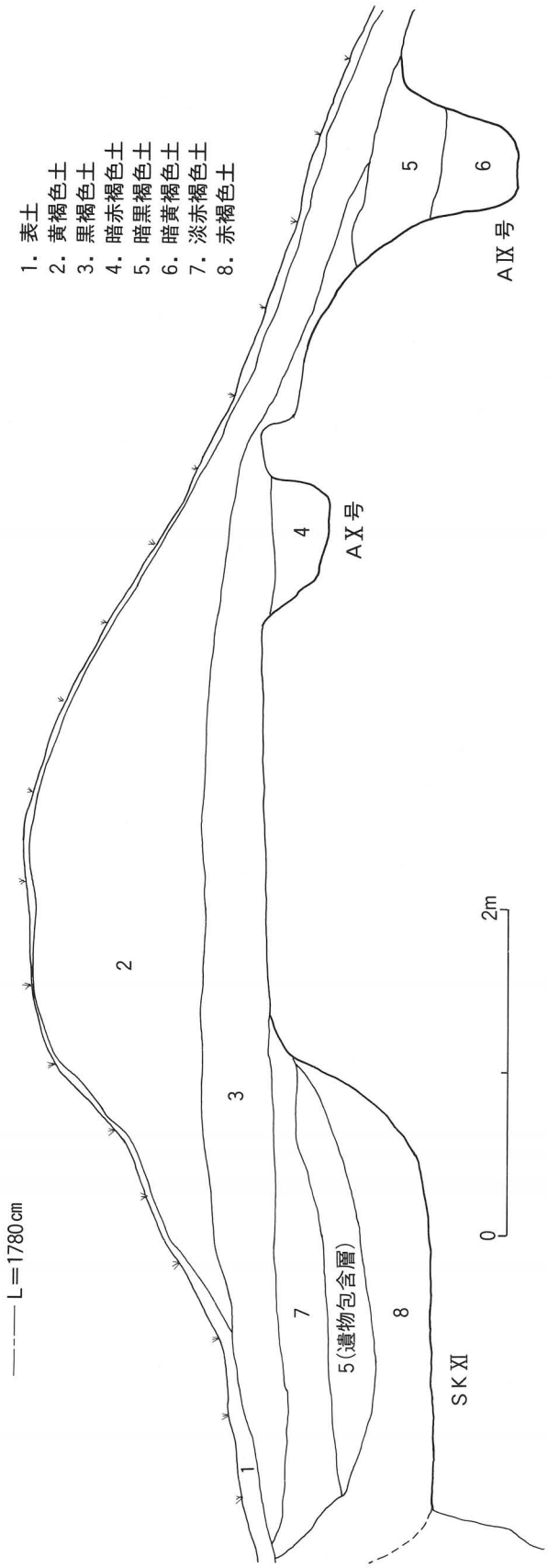
Ⅸ号穴

Ⅵ号穴の東側上部にあたる。床面の標高は約14.8mである。法面にあらわれた断面は，上端の残存幅約160cm，床面幅約40cm，中央部の深さ約90cmを測る。前庭あるいは羨道にあたると思われるが不明である。他の横穴の前庭部と比べると幅がせまく，羨道部とするには断面の形状に不自然な点がある。横穴意外の土壙とか溝状遺構である可能性も強い。断面に出土遺物はなかった。

77．SKⅪ，Ⅹ・Ⅸ号穴断面



78．SKⅪ断面



79．Ⅸ・Ⅹ号穴，SKⅪ断面実測図

Ⅹ号穴

Ⅸ号穴の東側に位置し，本横穴群では最も高い地点に存在する。床面の標高は約15.9mである。断面の上端幅約90cm，床面幅約50cm，深さ約40cmを測る。Ⅸ号穴と同様，横穴とするには断面の形状から不自然な点もあり，土壙，溝状遺構の可能性もある。断面に出土遺物はなかった。

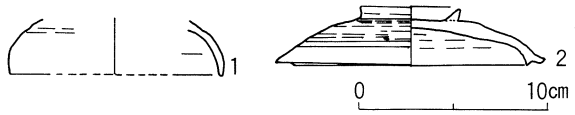
SKⅪ

Ⅹ号穴の東側に位置する。底面の標高は約15.3mである。東側は検出されていないので，正確な数値は不明であるが，上端幅約360cm，底面幅約220cm，深さ約90cmを測る。検出された遺構の幅から横穴の玄室とも考えられるが，断面の形状や遺物包含層から土壙と判断した。

土壙内第2層の暗黒褐色土に須恵器片が包含されている。底面には遺物が見あたらない。須恵器は坏および甕の破片で，坏蓋は山陰の須恵器編年Ⅳ期に属する。（図80－1・2）

表5　SKⅪ出土須恵器観察表

番号	器種	寸法（cm）				胎土	焼成	色調	備考
		口径	胴径	底径	器高				
1	坏蓋	推定 11.2			推定 3.0	細砂を含む	良好	灰色	外面－回転ナデ 内面－回転ナデ
2	〃	14.3			3.1	〃	〃	黄暗褐色 灰色	輪状つまみをもち，縁端部内面はかえりがつく。 外面－天井部ヘラケズリ後回転ナデ，下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ，下部回転ナデ



80．SKⅪ出土須恵器実測図

Ⅻ　号　穴

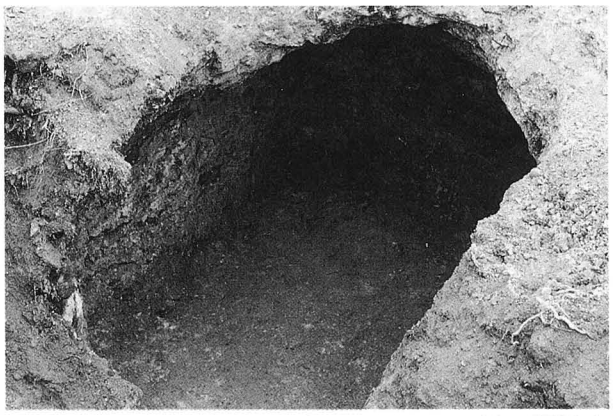
BI号穴の西約10mのところに存在する。床面の標高は約5.2mで，BI号穴とともに本横穴群中で最も低い位置に穿たれている。島根町誌に紹介された横穴である。

この横穴の実在を知ったのは，調査中のことであり，当該部分は土捨て場となっていたころであった。旧地権者によると，最近まで使用していたが，土を入れてコンクリートでかためてしまったとのことであった。

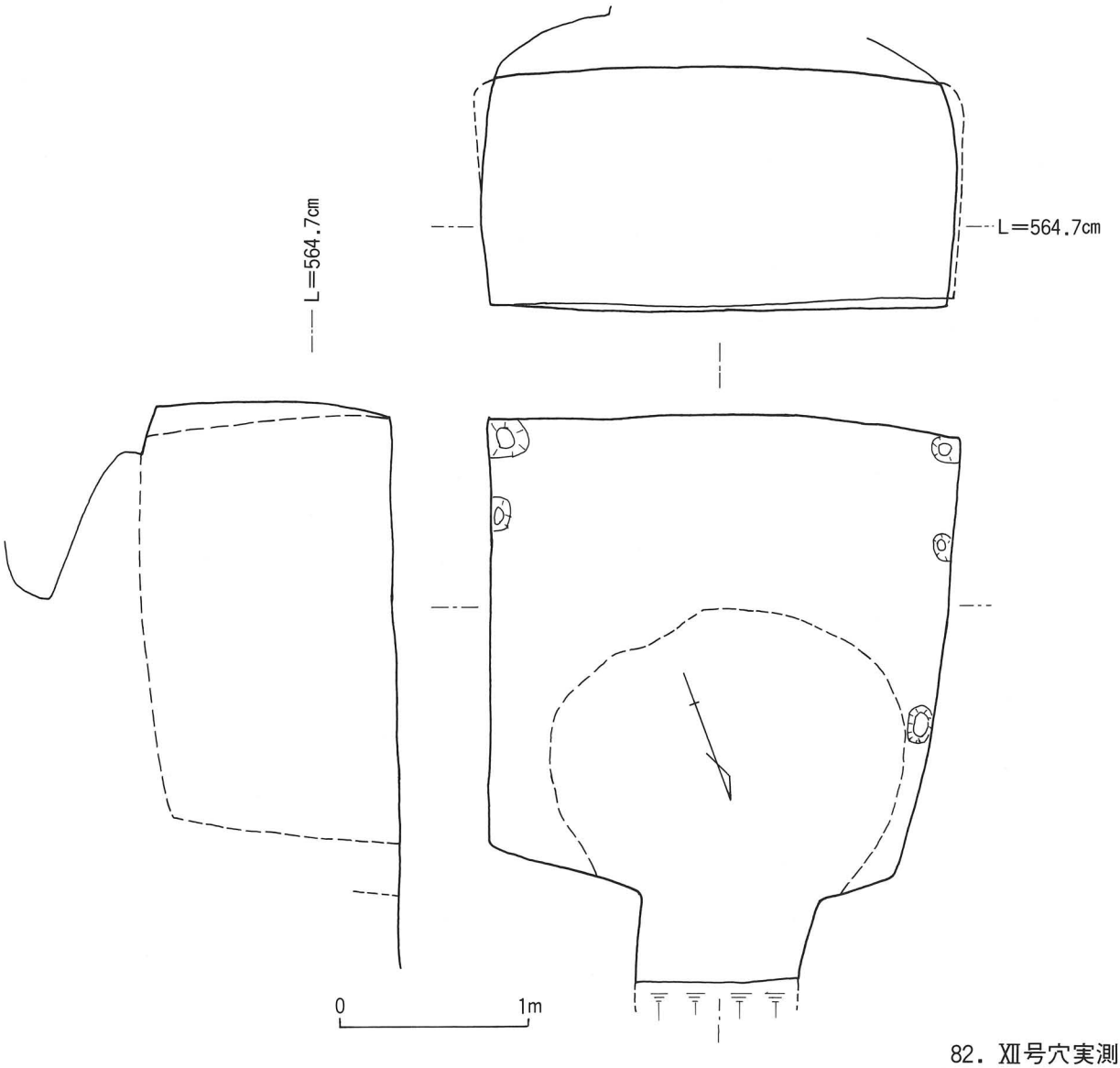
工事立会で検出された横穴は，かなりいたんでおり天井部も崩落したりしている。調査の結果，主軸方向に沿って全長約300cmの方形プランをもつ妻入り丸天井のタイプであると推定された。羨道部はかろうじて床面に残された痕跡から幅80～90cmのものであることが判明した。

玄室は長さ約250cm，幅214～246cmを測り，羨門側が狭くなっている。

再加工して利用されたらしく，羨道部の幅が広げられている。床面は平坦であるが，側壁に沿って径20cm内外の浅いピットが検出されている。このピットも後世のものである可能性が強い。内部の床面直上からビニール袋等現代の遺物が検出され，旧地権者の言のとおりごく最近まで使用されていたものであった。この横穴に伴う遺物はなかった。島根町誌にも記されていない。



81．XII号穴



82．XII号穴実測図

B区の調査

A区の崖下で既に開口していた1号穴のあたりをB区と称した。平面図でみると，A区の横穴群から東に6～8m離れた位置となる。

Ⅰ号穴は，調査直前まで物置として利用されていた。玄室は羨道部との境界がはっきりしない細長いものである。CⅤ号穴とともに異質のタイプで，後世の加工による変形とも考えられる。

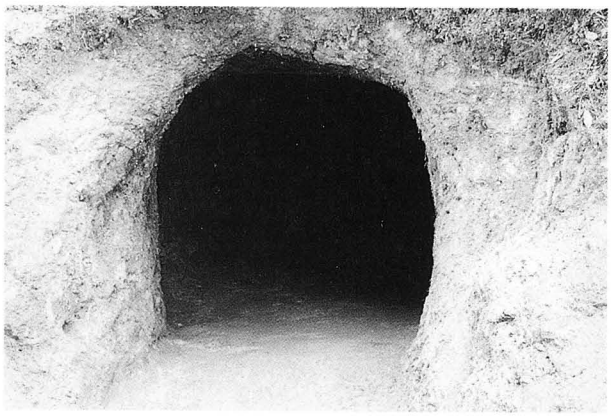
Ⅱ号穴は，崖くずれか掘削のため大部分が失われ，玄室の奥壁のみが残されていた。方形プランを有するものと推定される。

Ⅲ号穴は，法面工事中に発見されたもので残念ながら奥壁と思われる部分がわずかに残っていた。位置を記録したのにとどまり発掘を実施していない。

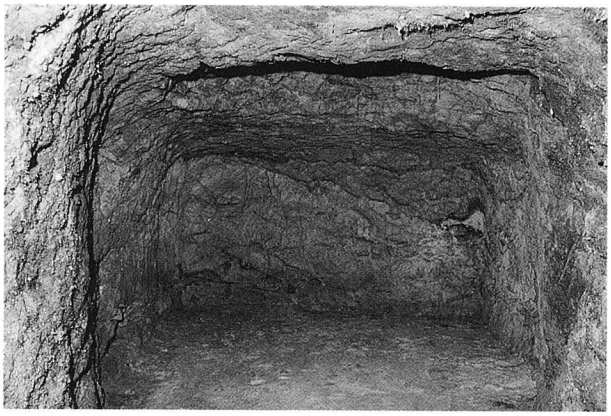
Ⅰ 号 穴

前述のように，既に開口していた横穴で島根町誌に紹介されたNo.4の横穴にあたるものと考えられる。床面の標高は約5.6mでAⅫ号穴とほぼ同一レベルに穿たれている。横穴の前面に接する形で民家が建てられ，調査直前まで物置として利用されていた。

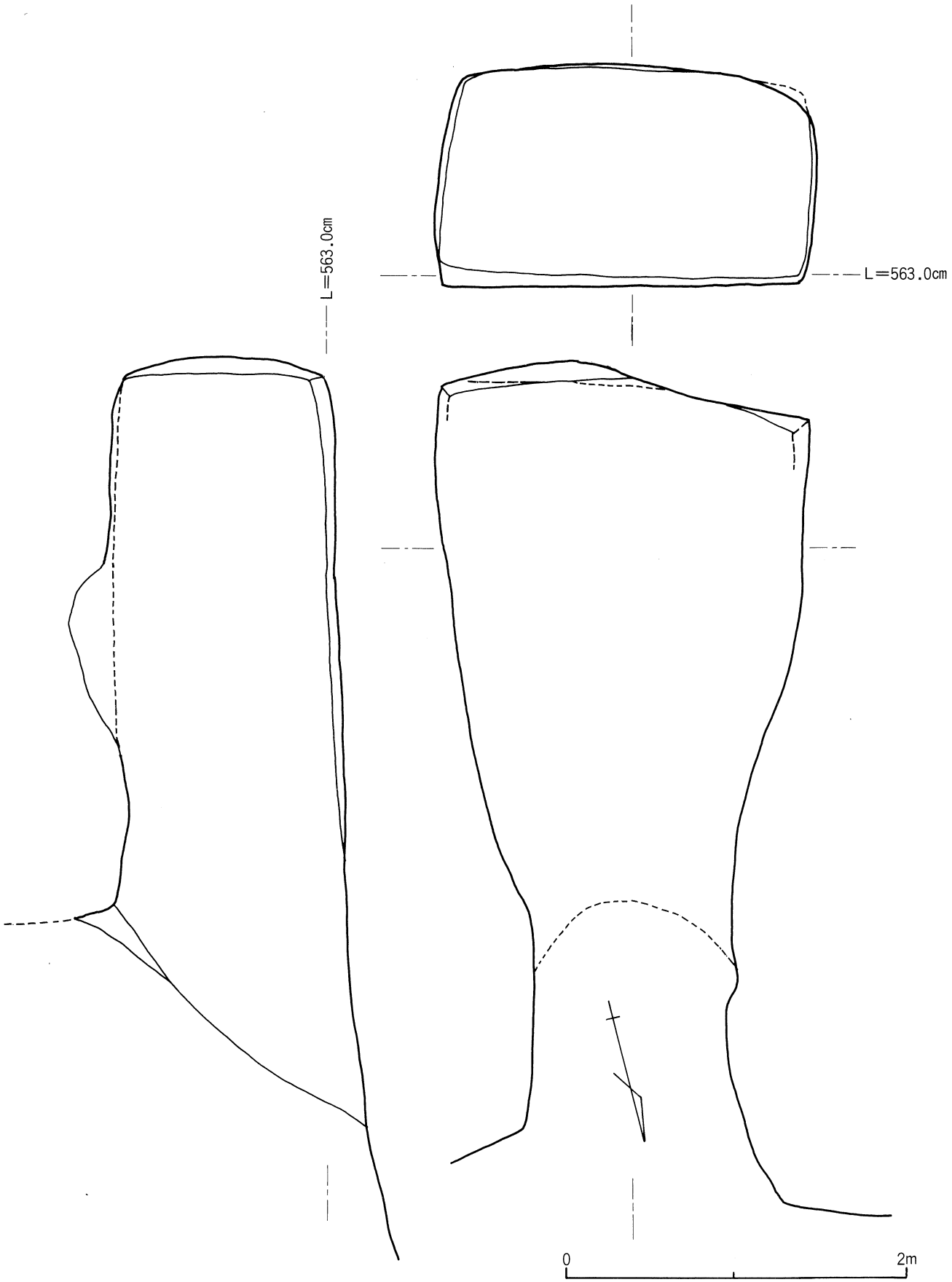
横穴の全長は，主軸に沿って462cmを測る。羨道部は玄室との境があいまいであるが，長さ154cm，幅111～128cmを測る。羨道と思われる部分の天井は失われている。玄室は長さ308cm，奥壁部の幅220cm，高さ130cmを測る。奥壁および東西両側壁は床面に対して，ほぼ垂直に立ちあがり，平天井をもつ。床面に溝はない。物置として利用するにあたって，再加工されたようであり，天井および側壁には加工痕が残っていた。特に天井部は，奥壁より手前1mのあたりから大きく崩落しているため，元の状況はわからない。本横穴群のどの横穴と比べても異質のタイプのものと言えよう。この横穴に伴う遺物については不明である。



83．Ⅰ号穴



84．Ⅰ号穴玄室



85. Ⅰ号穴実測図

Ⅱ 号 穴

Ⅰ号穴の東側に位置する。平面的には隣接するが，床面の標高は約7.1mで，Ⅰ号穴より約1.5m高い位置に存在する。玄室の奥壁部がわずかに残されているのみで，全容を推し測ることはできないが，方形～長方形プランを有すると思われる。崖くずれか，掘削によってほとんどが失われている。奥壁の幅は198cmを測り，奥壁の東側隅から東壁に沿ってL字状の浅い排水溝が認められた。また床面には浅い掘り込みが検出されたが後世のものと考えられる。

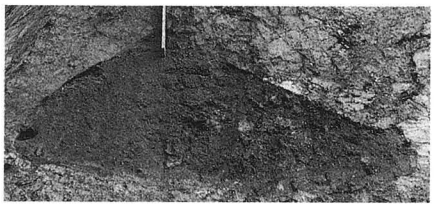
奥壁のさらに奥に一段高く平面半円形を呈する掘り込みが存在し，若干の円礫が検出された。この掘り込みが横穴に伴うものかどうか不明であるが，伴うものとすれば棚状遺構とでも言うべきであろう。

この部分の土層は，天井が早くから落盤したらしく，半円形の掘り込み部から玄室床面にかけて斜めに堆積している。

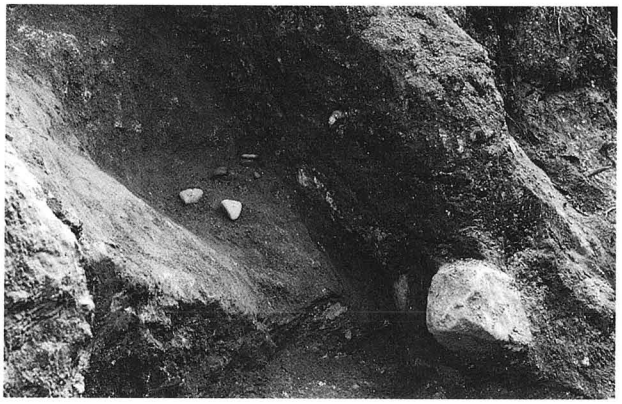
Ⅲ 号 穴

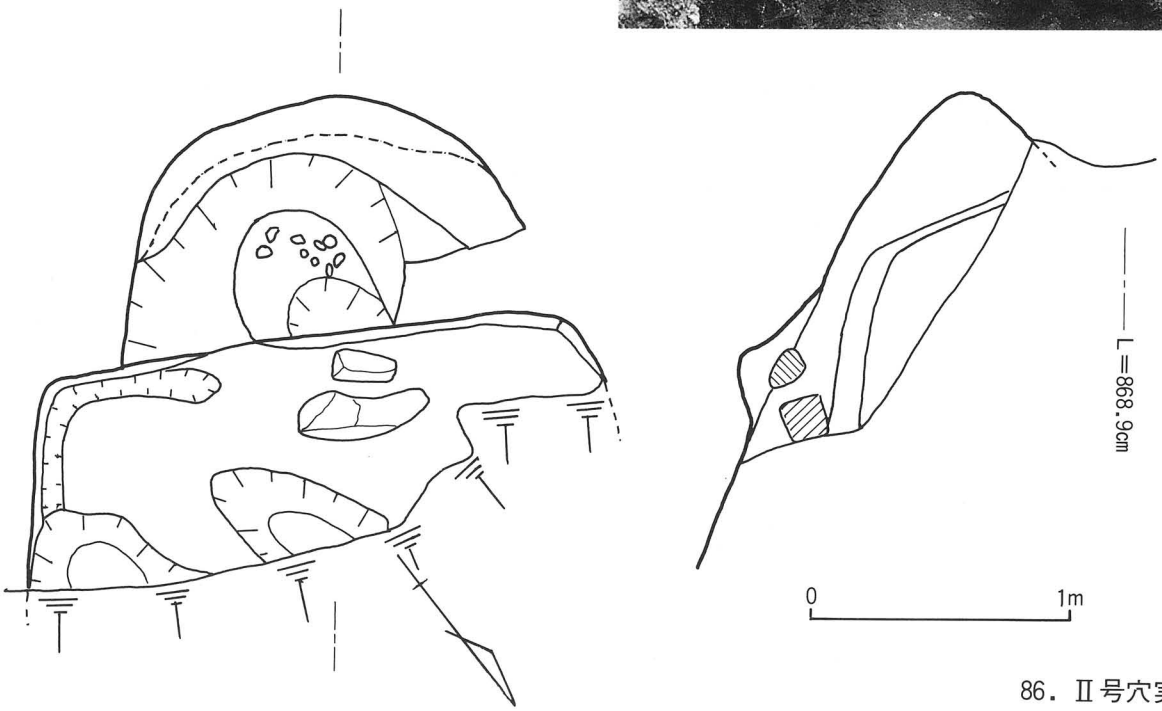
工事中に発見された横穴で，残念ながらほとんど削りとられ，法面に三角形の断面があらわれた。奥壁部分がかろうじて残されたようである。床面の標高は約10mで，Ⅱ号穴より約5.3m高い位置に存在している。

88．Ⅲ号穴断面



87．Ⅱ号穴





86．Ⅱ号穴実測図

C区の調査

A・B区の東側にあたる小群をC区と称した。東向きに切り立つ崖の下で遺物が出土したとのことであった。島根町誌で紹介されいてる5号穴のあたりと考えられる。このあたりは，山が大きく削り取られており，特に崖下の部分では各横穴とも玄室の一部がかろうじて残されているという状況であった。

Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ号穴はやや歪みをもつ方形ないし台形プランを有するものと推定されるが，壁や天井について詳細は不明である。しかし，Ⅰ・Ⅱ号穴とも床面の保存状態は良好で出土遺物にも目をみはるものがあった。

Ⅲ号穴はその規模と形態から小児用と考えられるが，検出された位置を考えると若干の疑問も残る。

Ⅴ号穴は以前から開口していたもので，平天井平入という本横穴群中で最も特異なタイプである。

Ⅵ号穴はⅠ・Ⅱ号穴の床面より約4m高い位置で，工事中に発見されたものである。検出された断面は羨道部らしく，閉塞石と考えられる石が検出された。

89．C区調査風景

Ⅰ 号 穴

位置と横穴の形態

大きく崩れた崖の下に存在する。床面の標高は約8.7mである。検出された遺構は玄室の一部で，玄室の半分以上と羨道部等は既に失われている。

床面は平行四辺形状を呈し，南壁基部に沿った東西の一辺は248cm，残された南北の幅は80～150cmを測る。やや歪みのある方形プランというべきであろうか。北壁と東壁が残されていないため，羨道部がどの方向にあったか不明である。東壁にあたる部分の基部に存在する排水溝，周囲の地形等から東向きに開口していたとも考えられる。

遺物等の検出状況

床面には，径20cm前後の扁平な自然石が敷きつめられていた。敷石をはずすと，西壁基部と東壁基部にあたる部分で排水溝が検出された。出土遺物には，須恵器，刀子，耳環，勾玉がある。なお，奥壁近くの隅に敷石のない部分があり，そこから歯（？）と思われるものと木質の遺物を検出した。（図95）

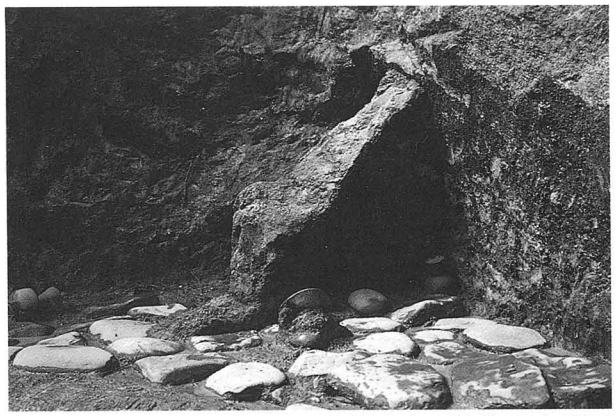
土層の堆積状況

天井部は既に落盤しているが，玄室内には地山ブロック混りの土が堆積していた。

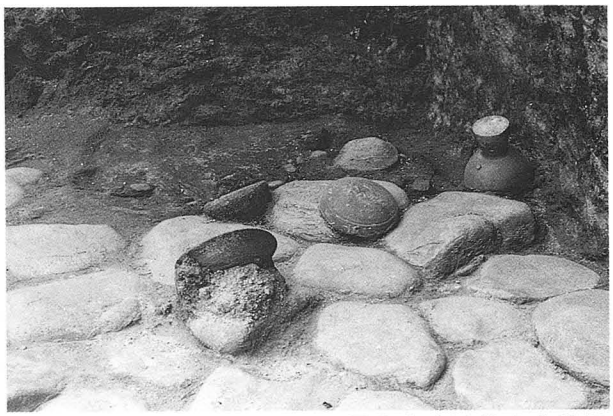
出土遺物

須恵器　坏蓋，坏身，台付長頸壷，提瓶，瓿が出土している。それぞれの特徴は表6のとおりである。坏蓋，坏身のうちには，山陰の須恵器編年Ⅲ期に属するものも含まれるが，Ⅳ期のものが中心となっている。（図103－1～12）

鉄器　小片でかなり銹化の進んだ刀子である。（図105－1）



90．Ⅰ号穴玄室遺物出土状況

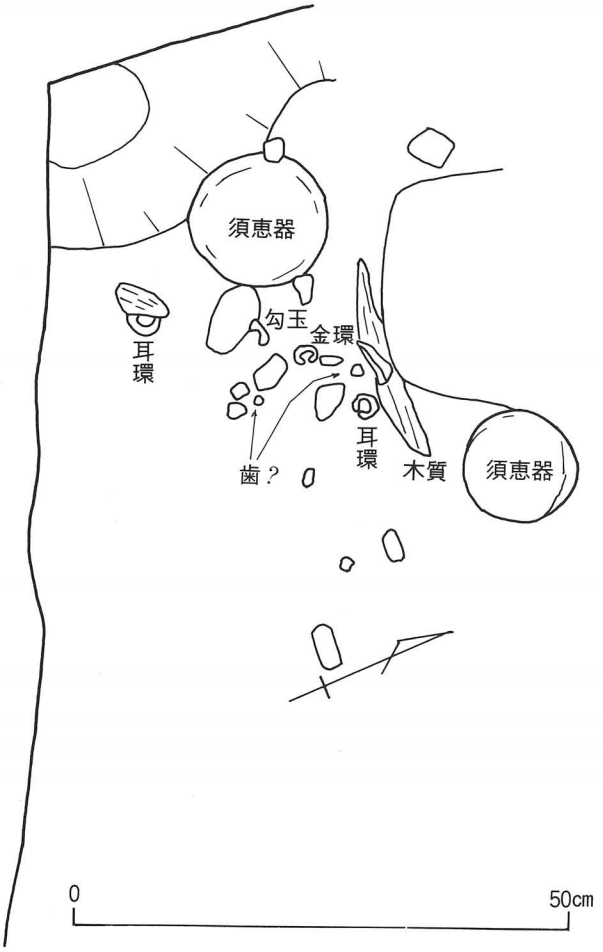


91．Ⅰ号穴玄室遺物出土状況

92．Ⅰ号穴玄室遺物出土状況

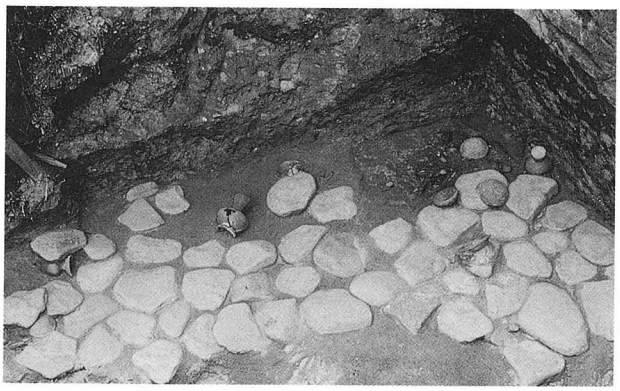
93．Ⅰ号穴玄室遺物出土状況

94．Ⅰ号穴実測図



95．Ⅰ号穴遺物出土状況部分図

96．Ⅰ号穴玄室遺物出土状況



97．Ⅰ号穴玄室遺物出土状況

表６　Ⅰ号穴出土須恵器観察表

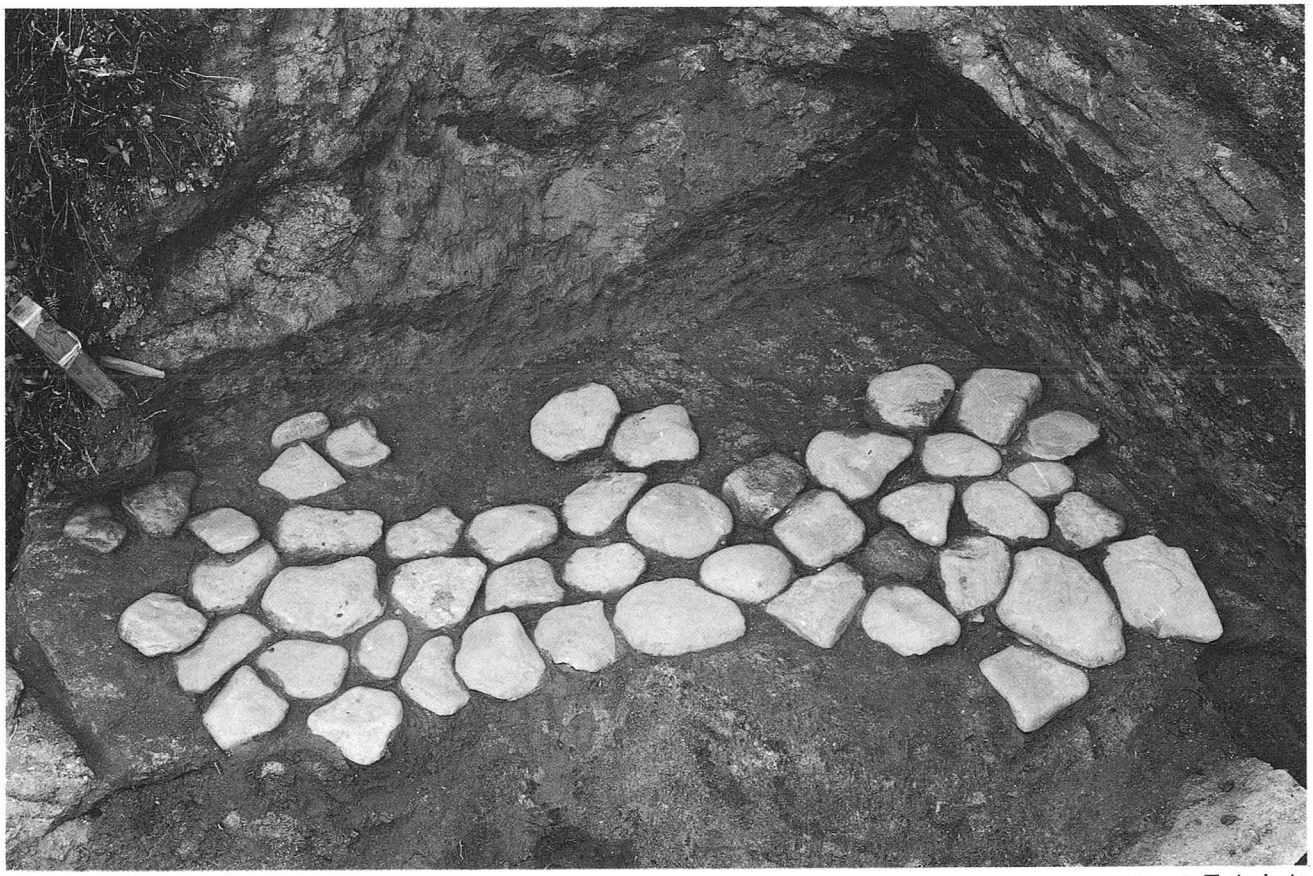
番号	器種	寸法（cm） 口径	胴径	底径	器高	胎土	焼成	色調	備考
1	坏蓋	13.0			2.9	細砂を含む	良好	暗灰色	肩部に２条の沈線を施し凸帯をつくる。頂部にヘラ記号 外面－天井部ヘラ切り後回転ナデ，下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ，下部回転ナデ
2	〃	12.7			2.8	細砂を多く含む	〃	灰白色 黒灰色	肩部に１条の沈線がある。外面－天井部ヘラケズリ，下部回転ナデ 内面－回転ナデ
3	〃	11.2			4.4	細砂を多く含む 大粒の砂もある	〃	黒灰色 灰色	口縁部は若干内傾気味である。外面－天井部ヘラケズリ，下部回転ナデ 内面－回転ナデ
4	〃	推定 20.7				大粒の砂を含む	〃	暗灰色 灰色	破片，縁端部内面はかえりがつく。 外面－回転ナデ，内面－回転ナデ
5	坏身	11.8	（受部） 14.7		4.0	細砂を多く含む	〃	灰色 黒灰色	外面－上部回転ナデ，下部ヘラケズリ 内面－上部回転ナデ，底部静止ナデ
6	〃	10.7	（〃） 13.4		4.2	密	〃	暗灰色	外面－上部回転ナデ，下部ヘラケズリ 内面－上部回転ナデ，底部静止ナデ
7	〃	9.9	（〃） 12.3		3.9	細砂を含む 大粒の砂もある	〃	灰色	外面－上部回転ナデ，下部ヘラ切り後静止ナデ 内面－回転ナデ
8	〃	12.6		7.3	5.2	密	〃	〃	高台がつく。 外面－回転ナデ 内面－回転ナデ
9	台付長頸壺	8.3	14.3	9.4	18.7	細砂を多く含む	〃	灰白色	台部に小さい長方形のすかし２がある。外面－口縁～胴上半部・台部回転ナデ，下半部ヘラケズリ 内面－口縁～頸部回転ナデ
10	提瓶	6.5	10.0 12.0		16.6	大粒の砂を含む	〃	暗灰色	肩部に把手の退化したはりつけ浮文２がある。 外面－口縁～肩部回転ナデ，胴部らせん状カキ目 内面－口縁～頸部回転ナデ
11	瓿	10.0	9.1		13.0	細砂を多く含む	〃	灰白色	口縁部に１条，胴部に２条の沈線がある。 外面－口縁～胴部回転ナデ，下部ヘラケズリ 内面－口縁～頸部回転ナデ
12	〃	9.4	7.6	4.8	7.5	密	〃	灰色	胴部に１条の沈線がある。底部に高台がつく。 外面－回転ナデ 内面－回転ナデ

98．Ⅰ号穴玄室

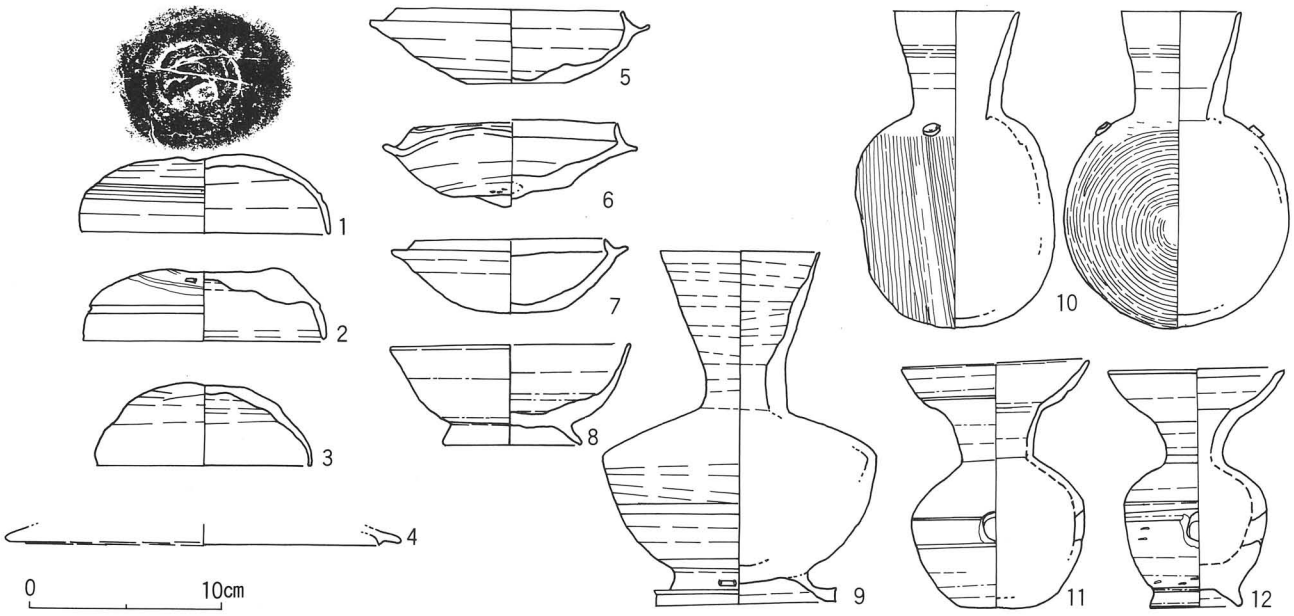
100．Ⅰ号穴玄室

99．Ⅰ号穴玄室

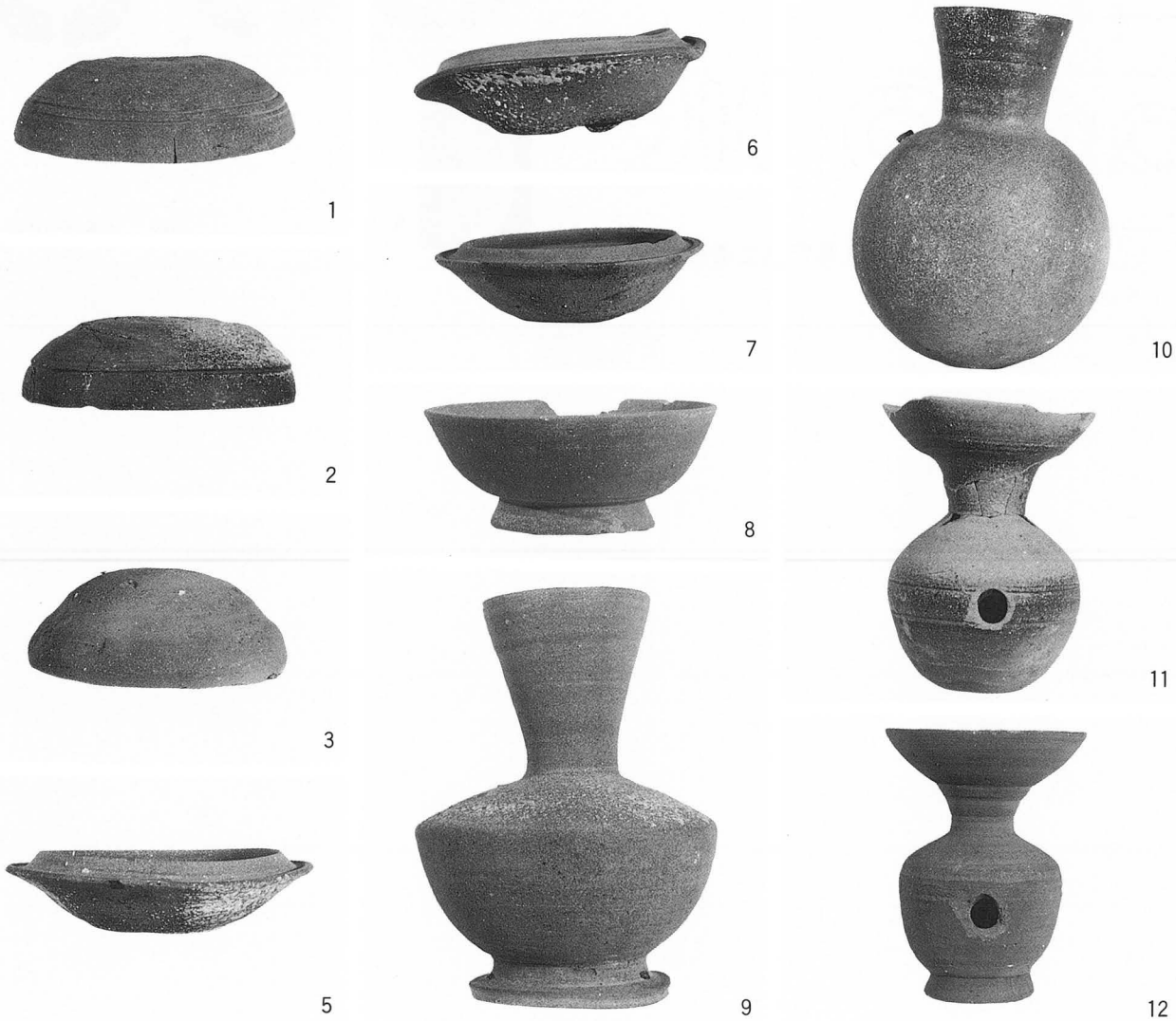
101．Ⅰ号穴玄室



102．Ⅰ号穴玄室



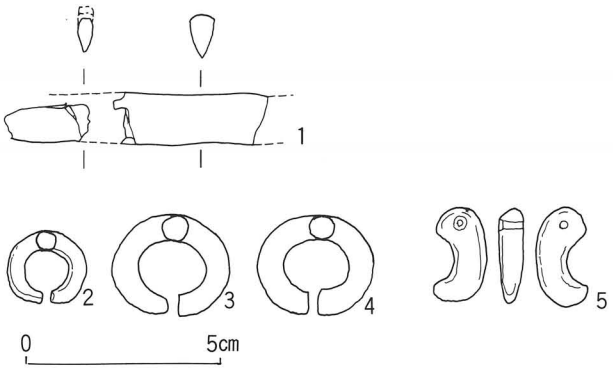
103．Ⅰ号穴出土須恵器実測図



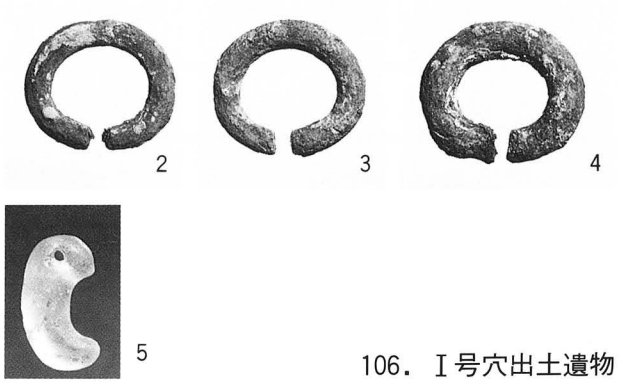
104．Ⅰ号穴出土須恵器

耳環　3個出土している。（図105－2～4）2は金がわずかに残る金環である。長径2.0cm，短径1.8cm，太さ0.3～0.5cmを測る。3は金環か銀環か不明である。長径3.0cm，短径2.6cm，太さ0.4～0.7cmを測る。4はかなり傷んでおり，金環か銀環が不明である。長径3.0cm，短径2.6cm，太さ0.5～0.6cmを測る。

勾玉　水晶製の勾玉が1個出土している。長さ2.5cm，厚さ0.4～0.6cmを測る。（図105－5）



105．Ⅰ号穴出土遺物実測図



106．Ⅰ号穴出土遺物

Ⅱ 号 穴

位置と横穴の形態

Ｃ区の北端に位置する。崖面に床の断面がみられたことから横穴の存在が判明した。床面の標高は約8.5mである。玄室床面の半分が残され，北北東の方向に開口していたと推定される。中心部の残された長さは145cm，奥壁基部の幅は205cmを測り，両側壁は奥壁に対して鈍角に開く台形状のプランをもつ。奥壁はやや内傾しながら，両側壁は湾曲して立ちあがり，やや胴ぶくれのするタイプである。天井は崩落しているため不明である。壁の基部には排水溝がめぐらされている。

遺物等の検出状況

床面の南側には径５cm前後の玉砂利が敷かれ，玉砂利の縁辺には人頭大以上の扁平な石が検出された。出土遺物には，須恵器，大刀，刀子，鉄鏃，鉄斧，耳環，勾玉，切子玉がある。大刀のうち１口は残欠で，短頸壷の下に折れてくの字状になっていた。追葬時に移動させたのか，落盤によるのかは不明である。

土層の堆積状況

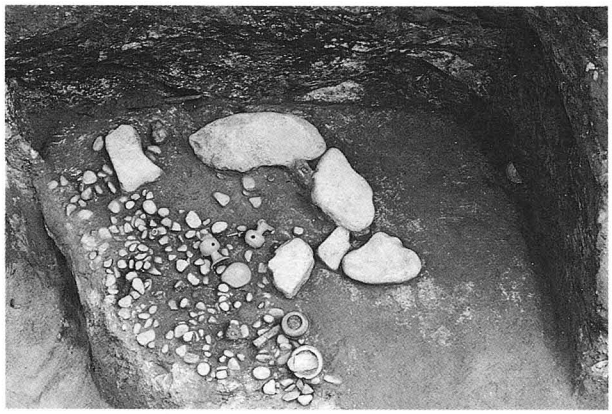
天井が落盤しているため，地山ブロック混りの粘土が床面から約80cm堆積していた。この部分は，奥壁の残存している高さに相当し，固く締まった土層であった。

出土遺物

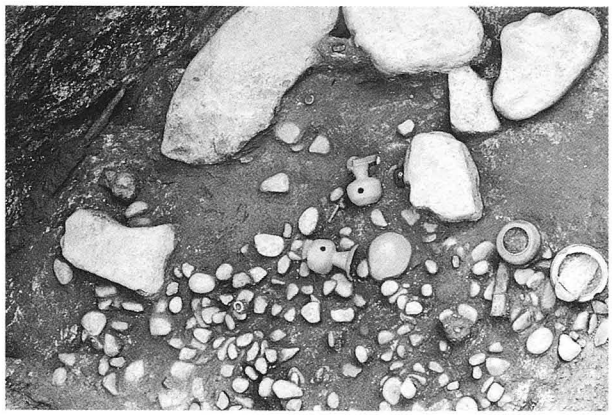
須恵器　坏蓋，坏身，高坏，短頸壷，瑕が出土している。それぞれの特徴については表７のとおりである。山陰の須恵器編年Ⅲ期，Ⅳ期に属する。坏蓋，坏身，高坏はⅢ期のものが多い。(図117－１～14)

大刀　２口出土しいている。(図119－1・2) 1は全長58cm，刃幅2.8cm前後の直刀である。片関のものであるが，銹化が著しく目釘等は不明である。刀身のみで把頭，鞘金具等は検出されなかった。２は前述のとおり折れてくの字状になっていた大刀の残欠である。残った全長25.5cm，刃幅2.7cm前後を測る直刀である。刀身に木質が付

107．Ⅱ号穴玄室土層堆積状況



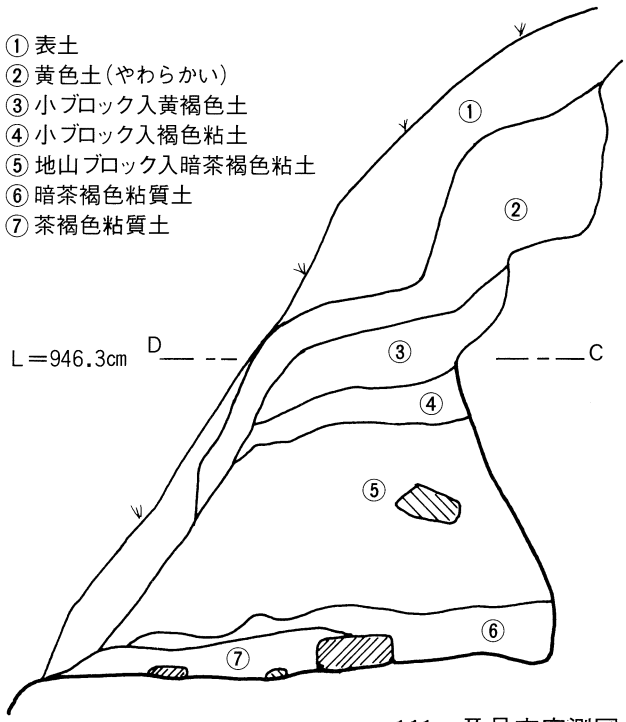
108．Ⅱ号穴玄室遺物出土状況



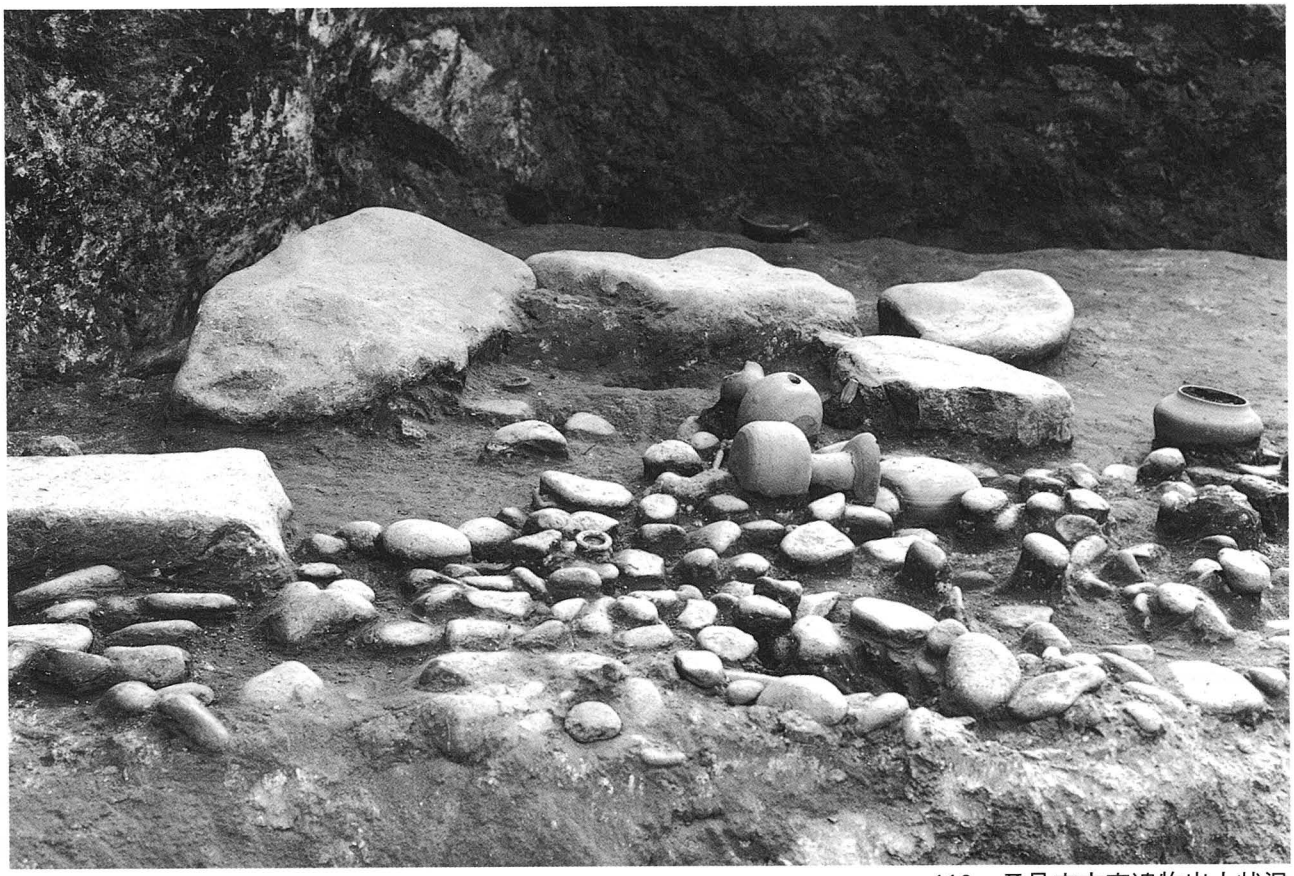
109．Ⅱ号穴玄室遺物出土状況

110．Ⅱ号穴玄室遺物出土状況

L=946.3cm
A
C
A
B
L=946.3cm
B
D
0
1m


① 表土
② 黄色土(やわらかい)
③ 小ブロック入黄褐色土
④ 小ブロック入褐色粘土
⑤ 地山ブロック入暗茶褐色粘土
⑥ 暗茶褐色粘質土
⑦ 茶褐色粘質土
L=946.3cm
D
C
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦

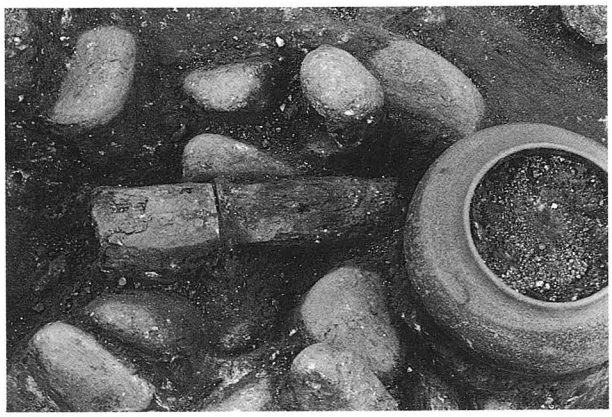
111. Ⅱ号穴実測図



112．Ⅱ号穴玄室遺物出土状況

113．Ⅱ号穴大刀出土状況

115．Ⅱ号穴耳環出土状況



114．Ⅱ号穴大刀出土状況

116．Ⅱ号穴切子玉出土状況

着し，部分的に銅板を巻いた鞘の部分が残されている。また，幅0.3cm，厚さ0.2cmの断面かまぼこ形の銅製リングが銅板に接して巻かれている。責金具か足金具であろう。銅板には部分的に金が残り，金銅装の立派な大刀であったと思われる。

鉄器　大刀以外に刀子，鉄鏃，鉄斧が出土した。(図119－3～5)3は刀子の残片で，残された全長5.1cmを測る。茎の部分は次第に細くなるややあいまいな片関タイプである。木質が付着している。4は細根式の鉄鏃である。鏃の部分が折れているため詳細は不明であるが，かえりのつくタイプと考えられる。茎の部分に木質が付着している。5は刃幅4.3cm，長さ9.9cmを測る鉄斧である。銹化が著しく詳細は不明であるが，柄を装着する部分がうすいように思われる。

耳環　2個出土した（図119－6・7）6は金環か銀環か不明である。長径3.0cm，短径2.5cm，太さ0.3～0.5を測る。7も金環か銀環か不明である。長径2.9cm，短径2.5cm，太さ0.4～0.5cmを測る。

玉類　メノウ製の勾玉と水晶製の切子玉が出土した。(図119－8～13)8の勾玉は長さ2.8cm，厚さ0.3～0.6cmを測る。穿孔は片面から行っている。9～13の切子玉はいずれも同一方向から穿孔している。各玉の寸法は表8のとおりである。

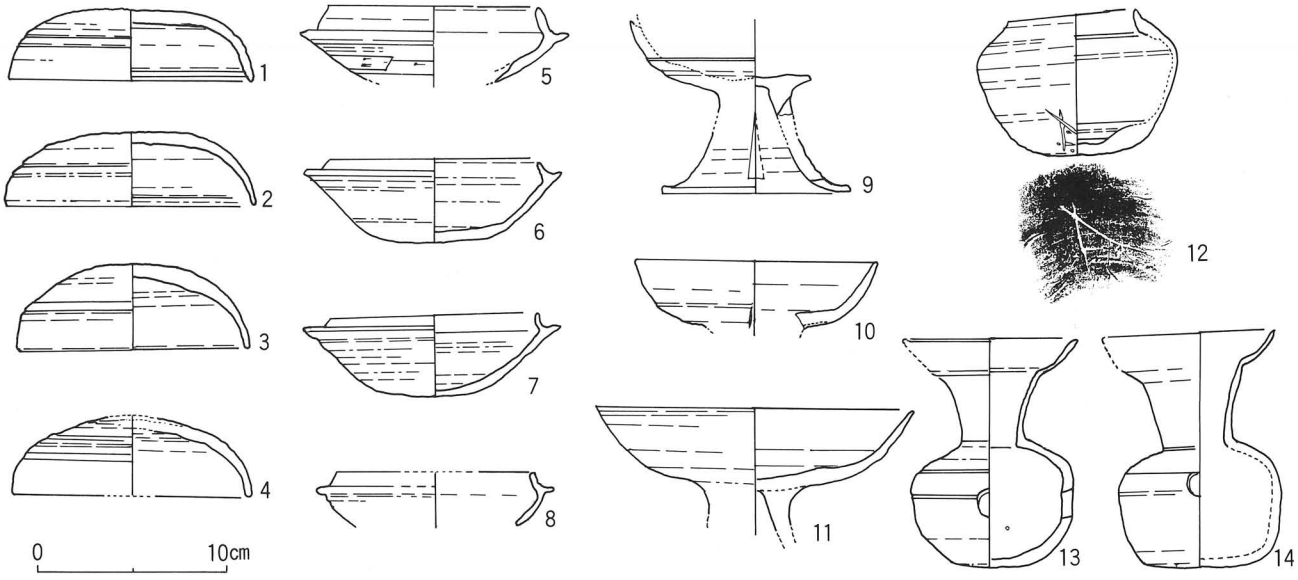
表8　Ⅱ号穴出土切子玉の寸法

（単位：cm）

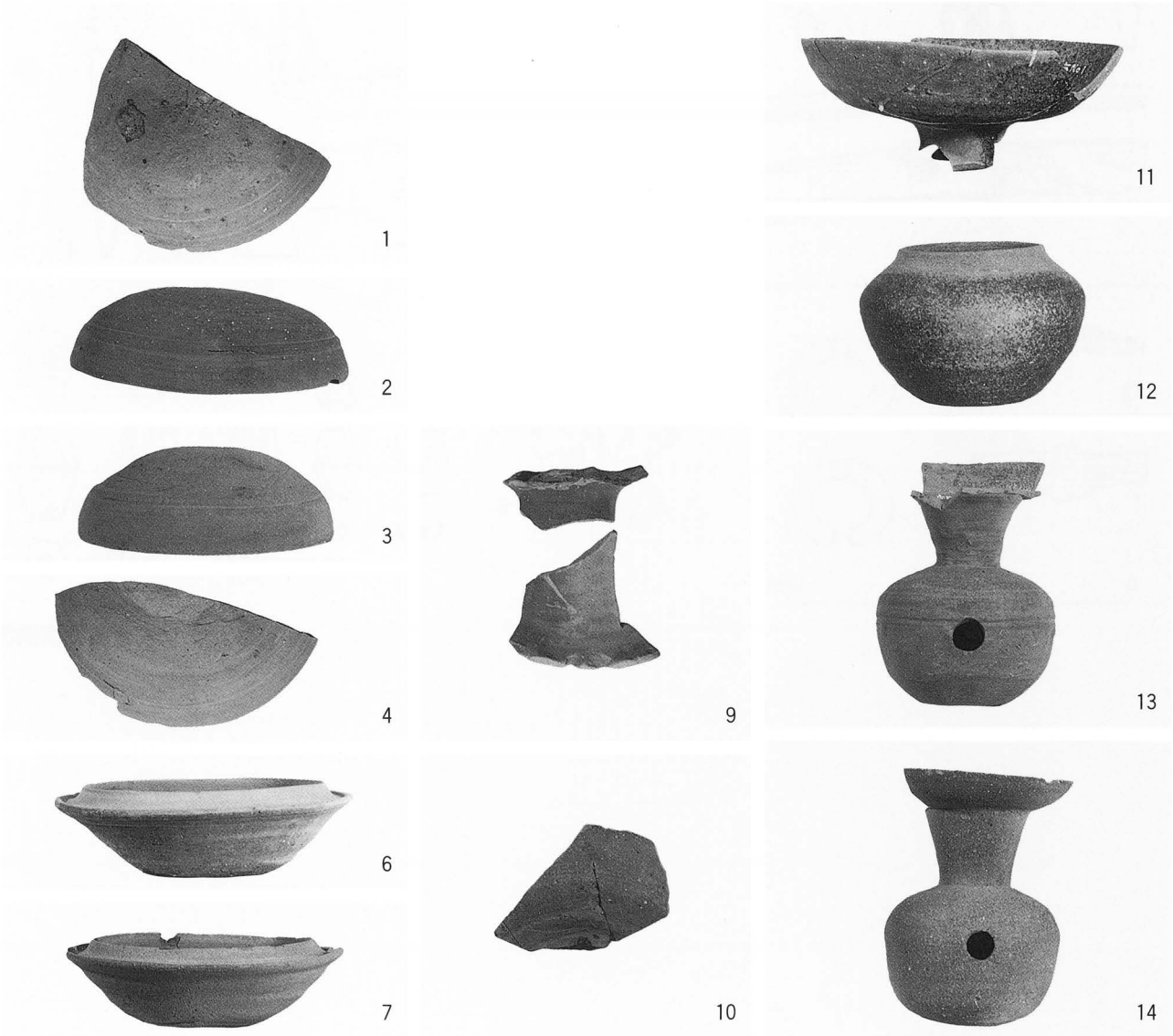
番号	長さ（中心で）	最大径（平行する面の間）	孔の径	
			大	小
9	1.8	1.1	0.2	0.1
10	2.0	1.2	0.2	0.1
11	2.9	1.4	0.3	0.1
12	2.9	1.6	0.2	0.15
13	3.0	1.8	0.4	0.15

表7　Ⅱ号穴出土須恵器観察表

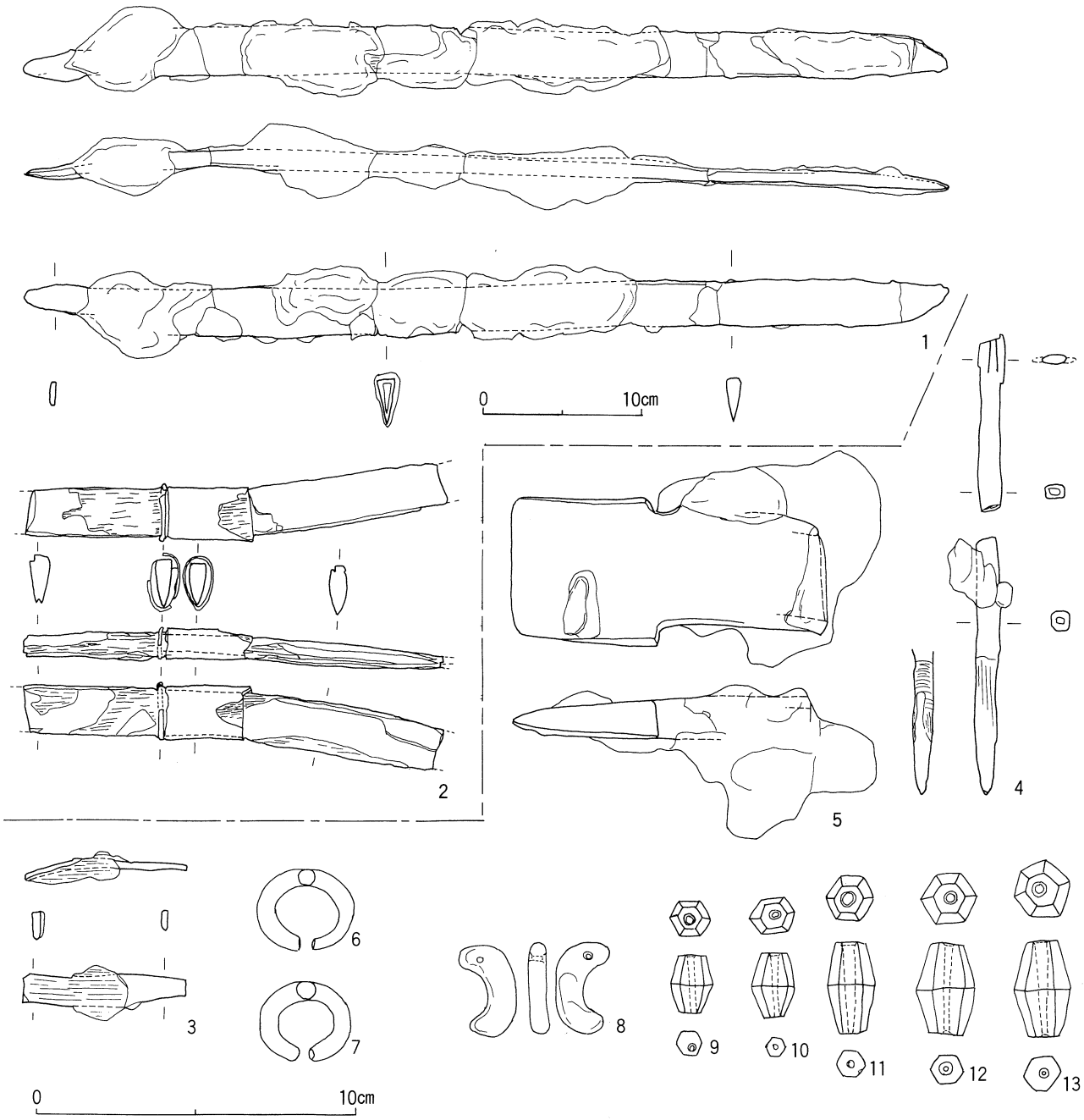
番号	器種	寸法（cm）				胎土	焼成	色調	備考
		口径	胴径	底径	器高				
1	坏蓋	推定12.6			推定3.7	砂粒・石英を含む	良好	灰色	砂片。肩部に2条の沈線，内面口縁付近に1条の凹線がある。 外面－天井部静止ナデ，下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ，下部回転ナデ
2	〃	13.1			4.0	砂粒を多く含む	〃	〃	肩部に2条の沈線，内面口縁付近に1条の凹線がある。 外面－天井部ヘラケズリ，下部回転ナデ 内面－回転ナデ
3	〃	12.2			4.5	密	〃	〃	肩部に1条の沈線と段状のアクセントがある。 外面－天井部静止ナデ，下部回転ナデ 外面－回転ナデ
4	〃	推定12.2			推定4.3	砂粒・石英を含む	〃	〃	破片。肩部にナデによる凹線状のくぼみがある。 外面－天井部ヘラケズリ，下部回転ナデ 内面－回転ナデ
5	坏身	推定11.0	(受部)推定14.2		推定4.7	細砂を含む	〃	黒灰色	破片。 外面－上部回転ナデ，下部ヘラケズリ 内面－回転ナデ
6	〃	11.1	(〃)13.7		4.4	〃	〃	灰色	外面－上部回転ナデ，下部静止ナデ 内面－回転ナデ
7	〃	10.9	(〃)13.4		4.2	密	〃	〃	外面－上部回転ナデ，下部静止ナデ 内面－回転ナデ
8	〃	推定10.3	(〃)推定12.6		推定3.8	細砂を含む	〃	暗灰色	破片。受部下面のつけ根に1条の沈線がある。 外面－回転ナデ 内面－回転ナデ
9	高坏			(脚)9.9		細砂を含む 大粒の砂もある	〃	灰色	破片。坏部外面の屈曲部に1条の沈線がある。脚部に三角形すかし2がある。 外面－回転ナデ 内面－回転ナデ
10	〃	12.8				〃	〃	〃 自然釉がかかる	破片。坏部外面の屈曲部に1条の沈線がある。坏部下面に，すかしを入れるためと思われるヘラの痕跡がある。 外面－上部回転ナデ，脚と接合部回転ナデと静止ナデ 内面－上部回転ナデ，坏底部静止ナデ
11	〃	16.8				砂粒を含む	〃	灰色	坏部は大きくひろがる。 外面－上部と脚部回転ナデ，坏部下面ヘラケズリ 内面－回転ナデ
12	短頸壺	6.7	10.6		12.2	細砂を含む	〃	黒灰色	胴部下半にヘラ記号。 外面－上部回転ナデ，下部ヘラケズリ 内面－回転ナデ
13	瓶	9.3	8.5		12.2	密	〃	灰色	口縁部下端に1条，肩部に2条沈線がある。 外面－胴部より上回転ナデ，底部ヘラケズリ 内面－上部回転ナデ
14	〃	推定9.0	8.7		12.4	〃	〃	〃	口縁部下端に1条の浅い沈線，胴部に2条のかすかな沈線らしき痕跡がある。 外面－胴部より上回転ナデ，底部ヘラケズリ 内面－上部回転ナデ



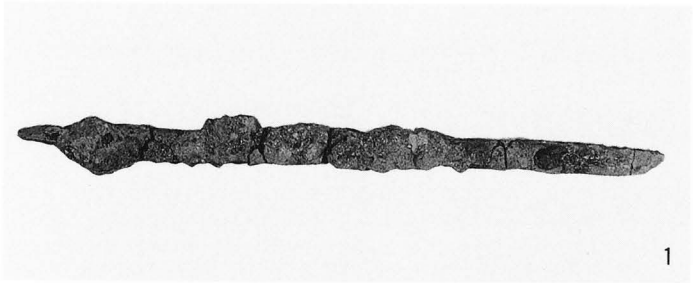
117．Ⅱ号穴出土須恵器実測図

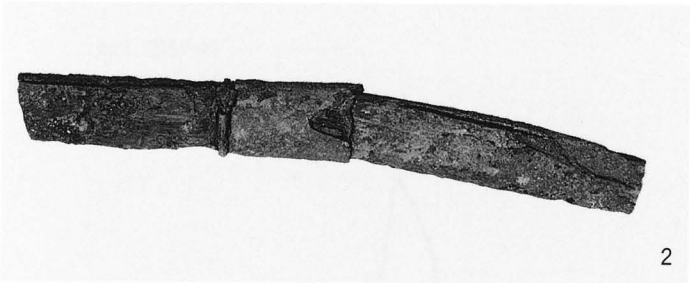


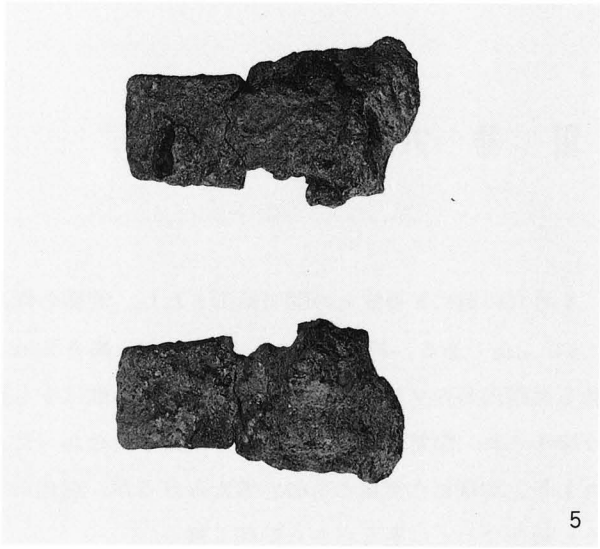
118．Ⅱ号穴出土須恵器

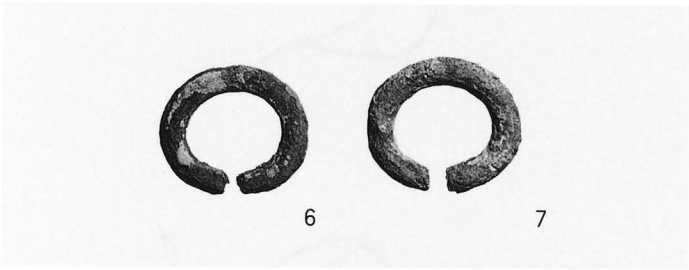


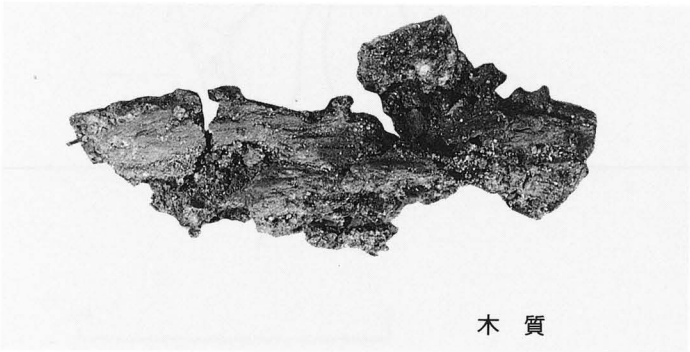
119．Ⅱ号穴出土遺物実測図

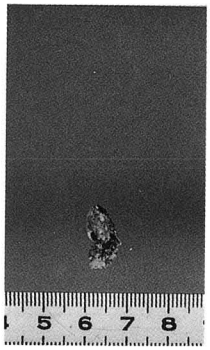










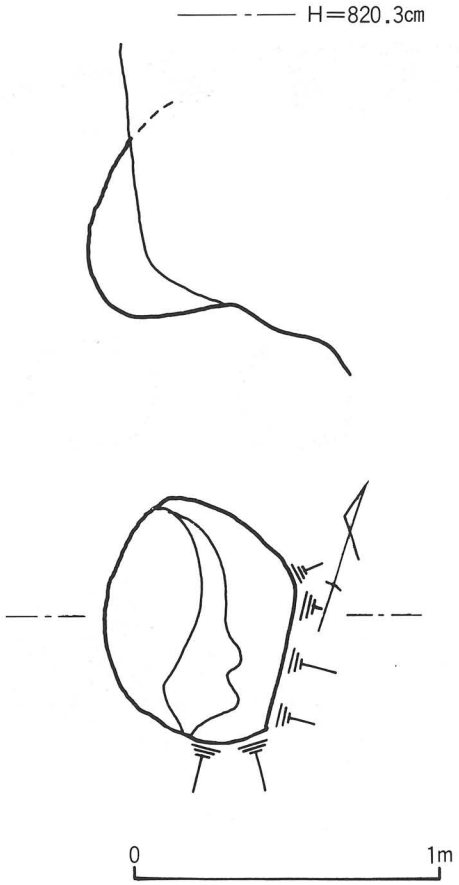


◀歯？

120．Ⅱ号穴出土遺物

Ⅲ 号 穴

Ⅱ号穴の南にⅣ号穴との間で検出された。床面の標高は約7.2mである。最大幅80cm，奥行42cm，高さ58cmを測る長楕円形のプランをもつ小穴である。床面は少し掘り窪められ，閉塞石とか遺物は全く検出されなかった。ＡⅠ号と同様に小児用のものと考えられるが，前述のように検出された位置などから疑問も残る。



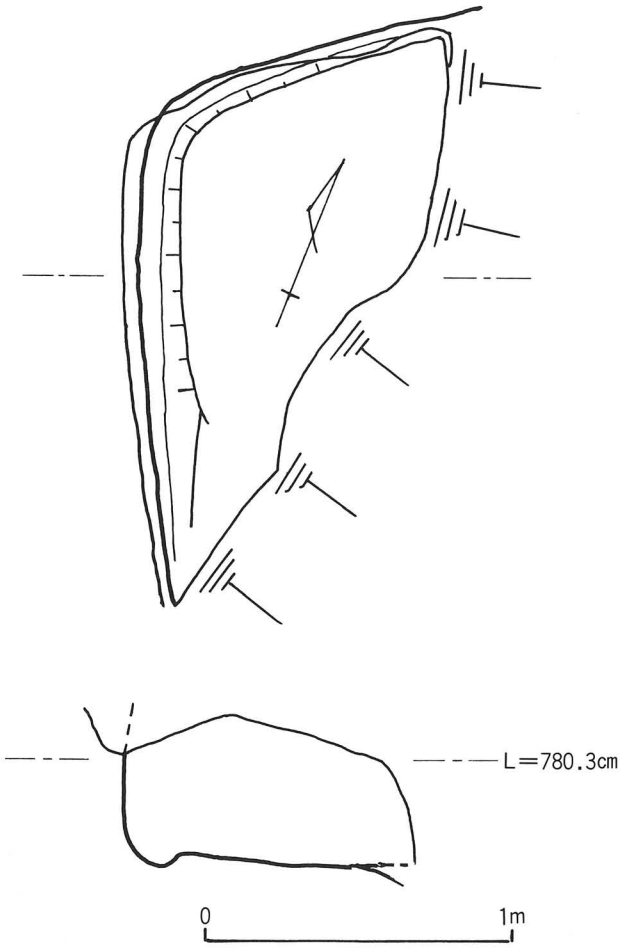
121．Ⅲ号穴実測図

122．Ⅲ号穴

Ⅳ 号 穴

Ⅲ号穴の南に位置する。床面の標高は，約7.3mである。東向きに開口する横穴と考えられる。玄室の一部がかろうじて残されていた。奥壁と推定される部分の幅約160cm，北側壁の長さ100cm，残された壁の高さ30～50cmを測る。奥壁に対して北側壁は鈍角に開く。幅10～20cmの浅い排水溝が壁沿いに検出された。

堆積していた土は，後世の流入土で遺物等は全く検出されなかった。以前開口した時に持ち去られたのであろうか。



123．Ⅳ号穴実測図

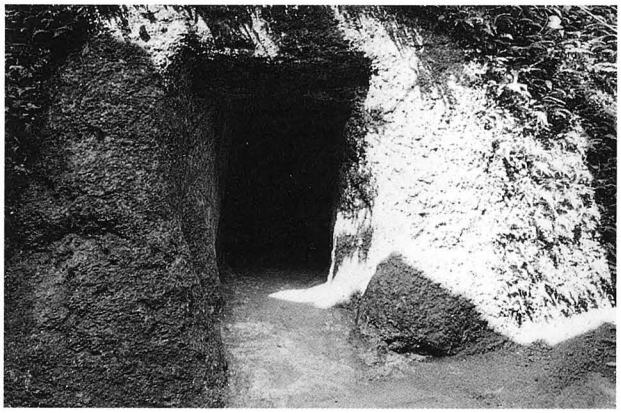
124．Ⅳ号穴

Ⅴ 号 穴

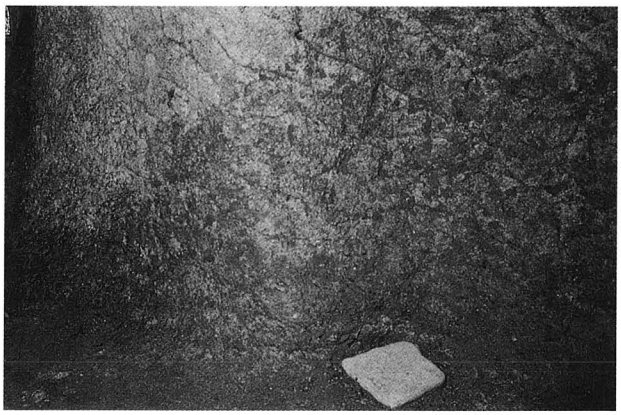
ＣⅠ号穴から約８ｍ南に寄った部分に位置する。ほぼ垂直に削り取られた崖の裾部に開口する。かっては蚕の飼育室として利用していたという。床面の標高は約7.5ｍである。主軸に沿って全長272cmを測る。羨道部は長さ146cm，幅60cm前後，高さ100cm前後を測る。両側壁に削り込んだ部分があり，浅いピット状のものが認められるが，これは蚕飼育の際に扉をつけるために加工したとのことである。玄室は奥行126cm，最大幅206cm，奥壁の高さ100cmを測り，羨道方向に対して直角方向に長いタイプである。床面の壁際に浅いピット３が穿たれ，ピットと対称的な位置に扁平な石が置かれていた。どのピットにも石が置かれ棺台として利用されたと推定もできるが，不明である。天井部はほとんど崩落しているため，詳細は不明であるが，平天井平入のタイプである。

出土遺物については，何ら言い伝えもない。

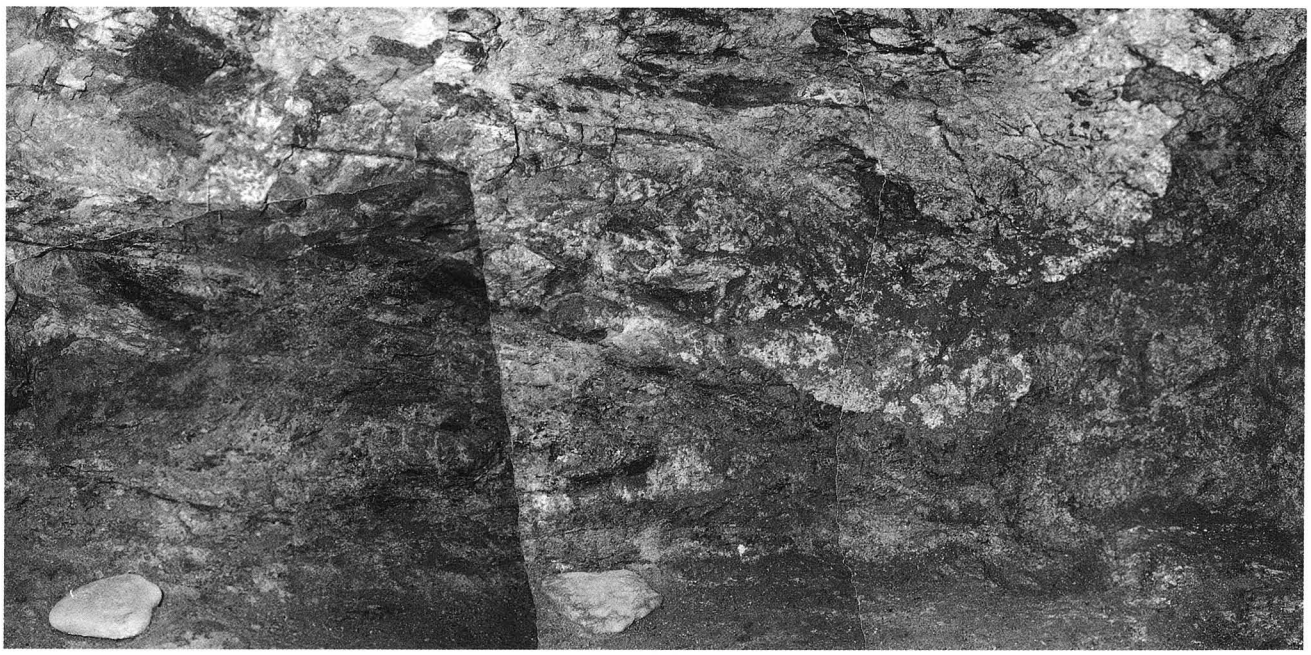
本横群中で最も特異なタイプである。周囲の地形などを考慮すると，後世のもの，または再加工とも考えられる。今後の検討を要する。



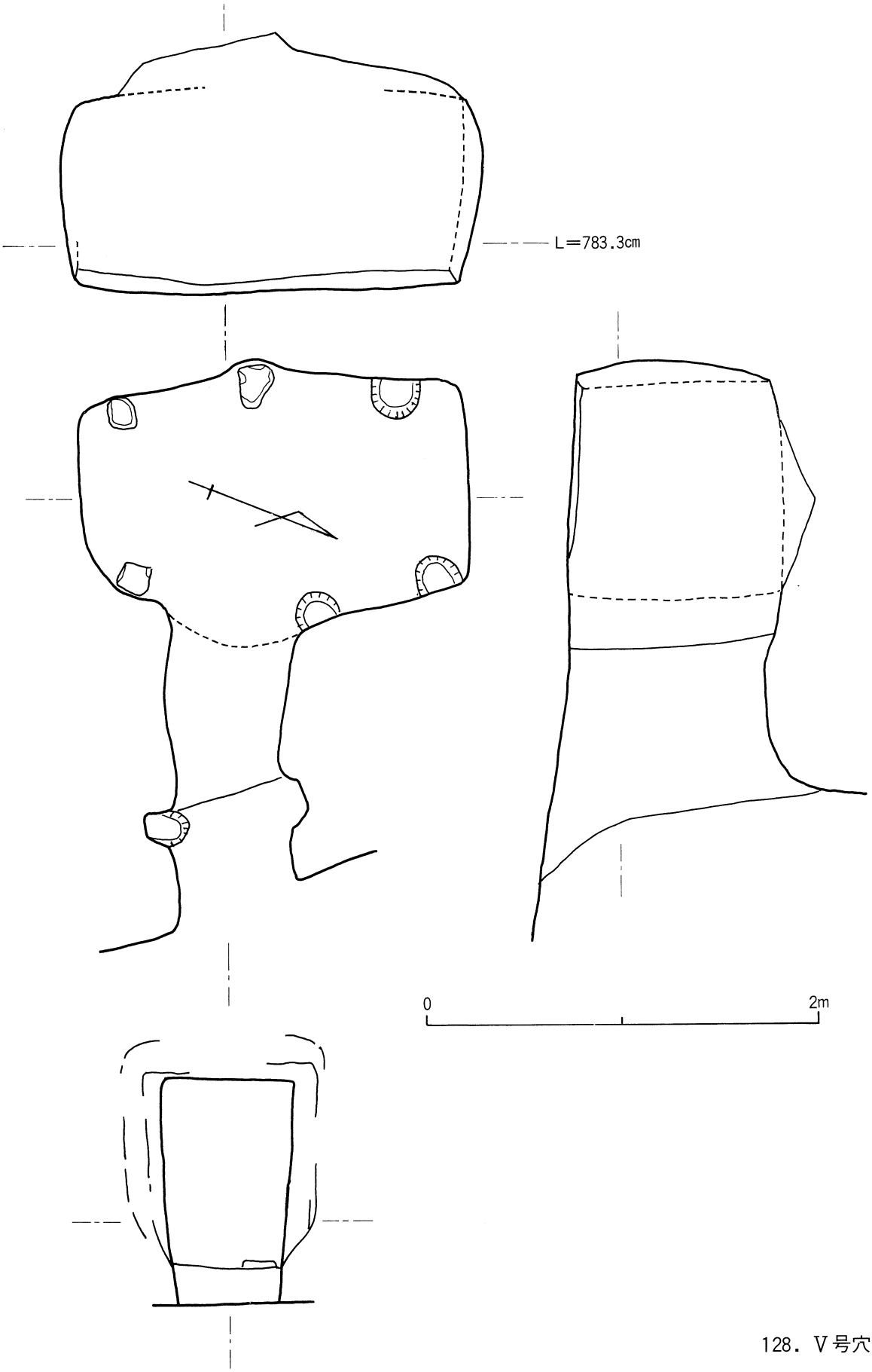
125．Ⅴ号穴



126．Ⅴ号穴南側壁



127．Ⅴ号穴玄室奥壁

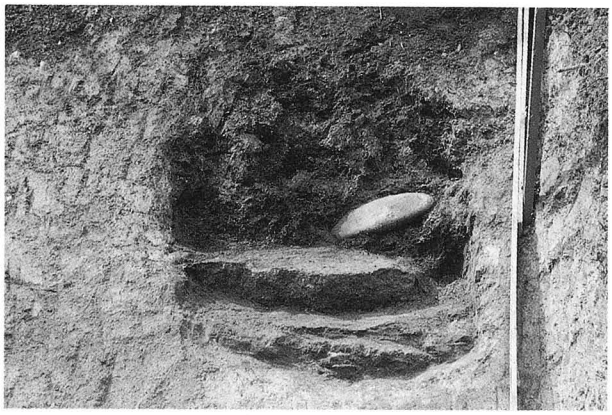


128．Ⅴ号穴実測図

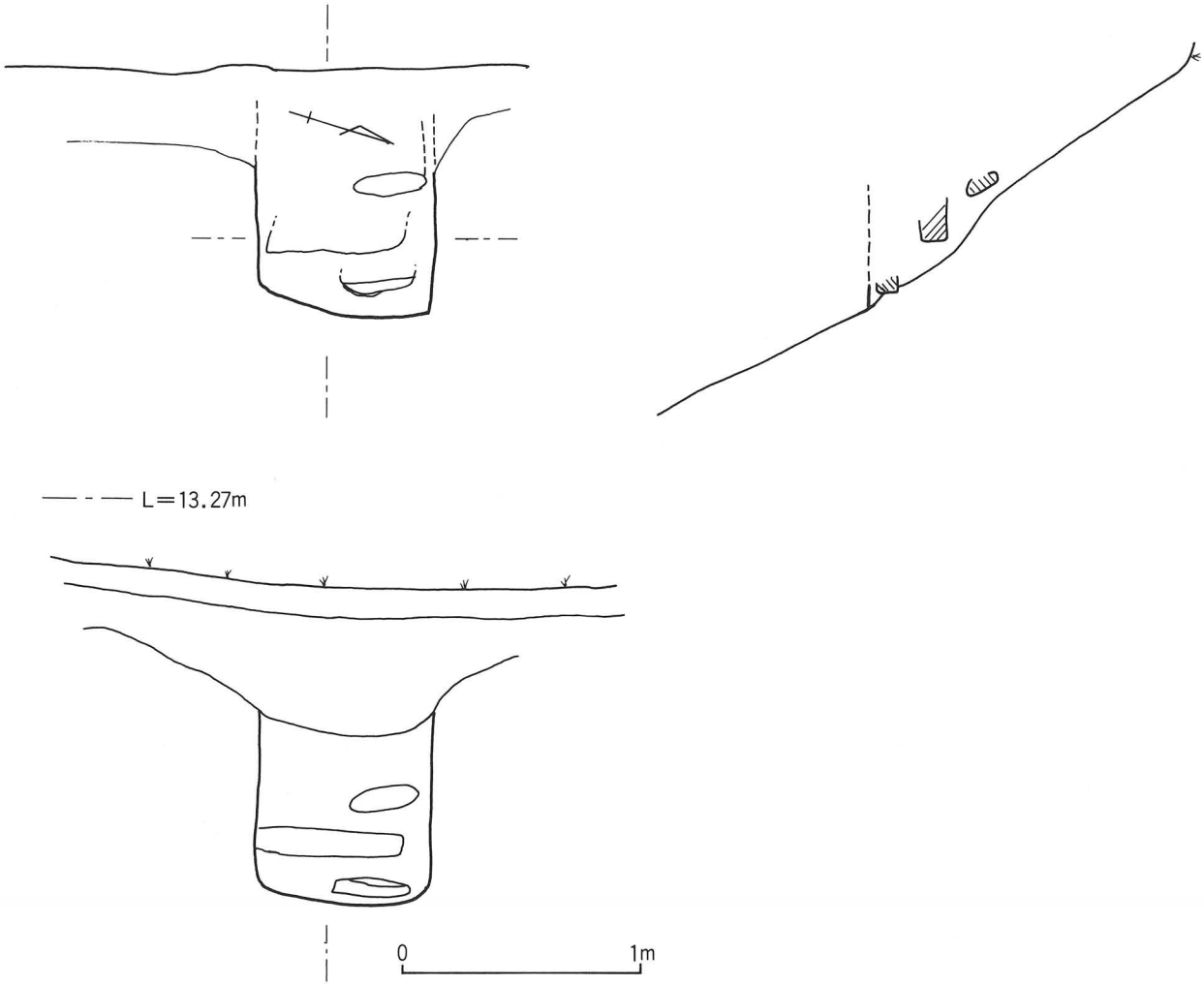
Ⅵ 号 穴

Ⅰ・Ⅱ号穴より約４ｍ高く，床面の標高は約11.5ｍである。工事中に発見されたもので，羨道部あるいは前庭部と思われる部分が露出した。幅75cm，残存している側壁の高さ約80cmを測る。閉塞石と考えられる板状石や人頭大前後の自然石がみられる。羨道部とすれば，天井部は落盤していることになる。遺物は検出れさなかった。

これ以上破壊されることがないので，発掘しなかった。完全と言えないまでも，良好な状態で残されていると考えられる。



129．Ⅵ号穴



130．Ⅵ号穴実測図

Ⅲ．ま　と　め

本横穴群の構成

島根町誌の記述によると，かって５穴が開口していたらしい。そのうち２穴が残され，同町誌には３号横穴（本報告ではＡⅫ号穴）が図と共に紹介されている。他の３穴については不明である。今回の調査で確認した遺跡は，横穴20穴（横穴かどうか疑わしいもの５穴を含む）と土壙１基である。崖や斜面に沿って約45ｍの範囲で横穴の存在を確認した。Ａ区Ⅳ・Ⅶ・Ⅷ号穴が並んで検出された平坦面の続きがⅧ号穴より西側部分に延びていること，ＣⅥ号穴より南の部分に横穴存在の可能性を示唆する地形のあることなどから，全体で30穴を越す横穴群と考えることもできる。調査の結果，横穴群全体としては保存状態は決して良くないが，意外と各横穴の床面は比較的よく残されていることが判明した。

本横穴群内の各横穴の配置についてみると，全体が整然とした単位群に分かれるとまで言えないが，ある程度のまとまりがみられる。横穴の穿たれた高さを比べてみると①ＡⅣ・Ⅶ・Ⅷ号穴，②ＡⅤ・ＢⅢ号穴，③ＡⅫ・ＢⅠ号穴はそれぞれがほぼ同一レベルに存在している。特に①の横穴は近接して存在していることから，直線配置の[注4]単位群として捉えられる。

横穴の形態と時期

各横穴の形態はまちまちであるが，玄室の床面と壁や天井の構造からおおよそ次のように分けられる。

a　玄室床面方～長方形，横断面三角形テント型（四注式系，三角形断面），妻入

b　玄室床面長方形，平天井，妻入

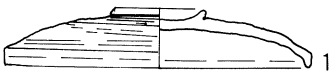
c　玄室床面長方形，平天井，平入

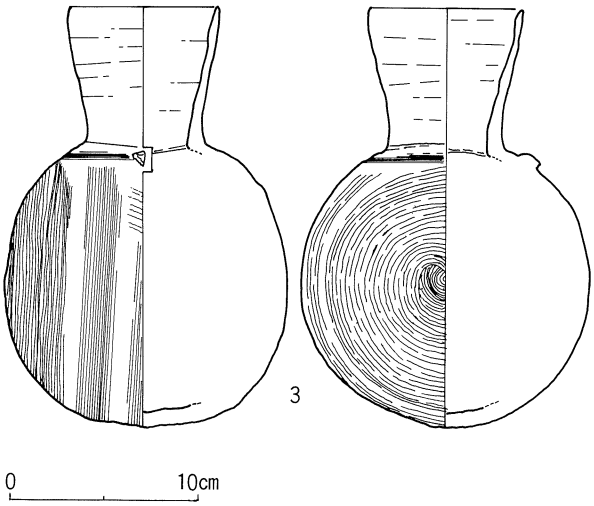
d　玄室床面長方形，丸天井，妻入

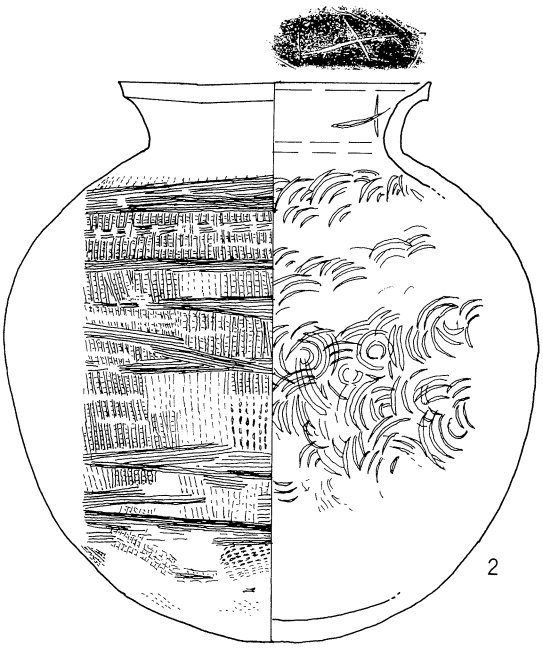
e　玄室床面方～長方形または台形，天井部構造不明

f　長楕円形プランの横穴

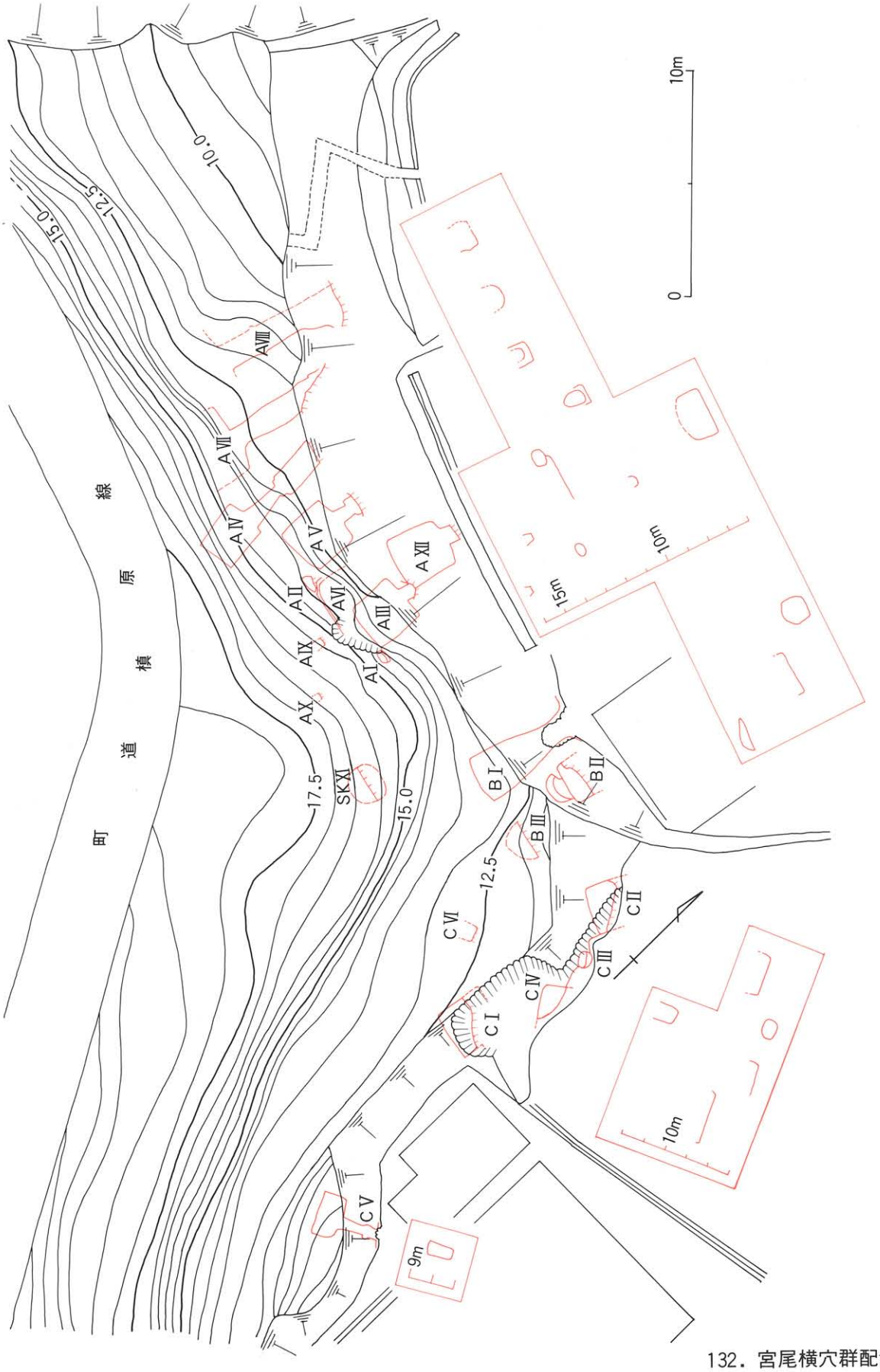
aタイプのものはＡ区の高い位置に並ぶものに多くみられる。また，このタイプは羨道部の横断面が楕円形，鶏卵形を呈すが床面がＵ字状に窪む点に特徴がある。b，c，dタイプについては，それぞれ１穴ずつあり，cタイプは本横穴群中で最も異質のものである。eタイプの







131．以前から出土していた須恵器実測図



132．宮尾横穴群配置図

表9　宮尾横穴群一覧

区	番号	図番号	横穴の形態	主な出土遺物	時期	備考
A	Ⅰ	12	長楕円形プラン	なし	不明	小児用か。
	Ⅱ	14	長楕円形プラン	なし	不明	小児用か。 Ⅳ号穴と一体のものか。
	Ⅲ	18	方形プラン 横断面三角形妻入 テント形(推定)	須恵器，土師器，刀子，鉄鏃，耳環	Ⅲ期 Ⅳ期	玄室内に板状石と玉砂利を敷く。羨道部床の横断面はU字形にくぼむ。
	Ⅳ	34	長方形プラン 横断面三角形妻入 テント形(推定)	須恵器，鉄鏃，耳環	Ⅳ期	羨道部の横断面楕円形か。
	Ⅴ	47	方形プラン 横断面三角形妻入 テント形	須恵器，刀子，耳環，勾玉	Ⅲ期末 Ⅳ期	羨道部の横断面鶏卵形。
	Ⅵ	57	奥壁のみ	なし	Ⅲ期？	横穴でない可能性もある。Ⅱ号穴と一体のものか。
	Ⅶ	59	方形プラン 横断面三角形妻入 テント形(推定)	須恵器，大刀	Ⅲ期末 Ⅳ期	前庭部から玄室にかけて床の断面はU字形にくぼむ。
	Ⅷ	68	不明	須恵器片	Ⅳ期？	前庭から羨道部にかけてのみ発掘，前庭より羨道の幅が広いか。
	Ⅸ	79	不明	なし	不明	前庭あるいは羨道部の断面を工事中に発見した。土壙または溝状遺構の可能性もある。
	Ⅹ	79	不明	なし	不明	
	Ⅺ	82	方形プラン 丸天井妻入（推定）	なし	不明	工事中発見。以前開口していたが後に埋めたと言う。
B	Ⅰ	85	長方形プラン 平天井妻入？	なし	不明	以前から開口，物置として利用していた。後世の加工痕もある。
	Ⅱ	87	方形～長方形プラン（推定）	なし	不明	
	Ⅲ	88	不明	なし	不明	工事中発見。
C	Ⅰ	94	歪みのある方形プラン（推定）	須恵器，刀子，耳環，歯？，木質	Ⅲ期 Ⅳ期	玄室に扁平な自然石を敷いている。
	Ⅱ	111	台形状プラン	須恵器，大刀，刀子，鉄鏃，耳環，勾玉，切子玉	Ⅲ期 Ⅳ期	玄室に玉砂利を敷いている。
	Ⅲ	121	長楕円形プラン	なし	不明	小児用か。
	Ⅳ	123	方形プラン	なし	不明	
	Ⅴ	128	長方形プラン 平天井平入	なし	不明	羨道部が長い。 後世の加工か。
	Ⅵ	130	不明	なし	不明	工事中発見。羨道部または前庭部の断面のみを検出。

表10－1　島根半島（島根町・鹿島町・美保関町）の横穴

番号	地図番号	名　　称	所　在　地	概　　要	備　　考
1	J 1	亀田横穴群	島根・小波・亀田	3群6穴	島根町誌
		第1支群		3穴，丸天井，2号穴は天井中心部に凹線	出土遺物は東京国立博物館
		第2支群		2穴，丸天井，人骨	
		第3支群		3穴，丸天井	2穴消滅
2	J 7	宮尾横穴群	島根・大芦・小具	30穴以上存在？	島根町誌，本報告
3	K 7	寺の奥横穴群	鹿島・上講武		菅田考古15，16
	－1	清水支群	・清水	7穴確認	
	－2	長谷支群	・長谷	16　穴	
4	K 9	恵谷横穴群	鹿島・北講武・恵谷	丘陵突端	菅谷考古16，御津貝塚横穴群発掘調査報告書Ⅰ
	－1	1 号 穴		整正家形，妻入，須恵器，土師器	半　壊
	－2	2 号 穴		整正家形，妻入，須恵器，土師器	半　壊
	－3	3 号 穴		整正家形，妻入，須恵器，土師器	半　壊
5	K11	清水の奥横穴群	鹿島・南講武・下組	5穴以上，丸天井，三角形断面，平入，須恵器	菅田考古16
6	K13	嵐廻横穴群	鹿島・名分・嵐廻	土砂流入，山腹7穴	
7	K16	芦谷横穴	鹿島・北講武・芦谷	山腹，平天井	菅田考古16
8	K18	一矢横穴	鹿島・名分・一矢	玉　類	
9	K23	田中の奥横穴	鹿島・名分・湯戸	1穴以上	
10	K24	かまの横穴	鹿島・名分・湯戸	丘陵尖端，不群（土砂流入）	
11	K27	峯谷寺の横穴群	鹿島・佐陀本郷・峯谷	丸天井	
12		岩戸横穴群	鹿島・佐陀宮内		
13	K29	芦山横穴群	鹿島・佐陀宮内・呂山	2　穴	
	－1	1 号 穴		須恵器	
	－2	2 号 穴			
14		兎山平横穴群	鹿島・佐陀宮内		
15	K32	寺尾横穴群	鹿島・惠曇町・寺尾	5穴以上，須恵器，土師器，人骨，羨道部断面円形，胴ばりのある長方形プランと台形プラン	鹿島の遺跡小集
16	K34	才の奥横穴群	鹿島・名分・才の奥	山腹2穴，須恵器，人骨	破　壊
17	K59	茶畑横穴群	鹿島・御津・茶畑		
	－1	1 号 穴		不　群	
	－2	2 号 穴			
	－3	3 号 穴		三角形断面，平入	御津貝塚横穴群発掘調査報告書Ⅰ
	－4	4 号 穴		不詳，土師器	
18	K62	峯谷寺の奥横穴群	鹿島・佐陀本郷・峯谷	山腹2穴	

表10－2

番号	地図番号	名　　称	所　在　地	概　　要	備　　考
19	K79	中尾谷山横穴	鹿島・南講武	整正家形１穴	菅谷考古16
20	K81	御津貝塚横穴群	鹿島・御津	第１支群４穴，第２支群５穴	第１支群消滅，御津貝塚横穴群発掘調査報告書Ⅰ
	－１	第１支群１号穴		三角形断面，平入，須恵器，鉄製品，土師器，人骨	
	－２	第１支群２号穴		三角形断面，平入，箱式棺，須恵器，土師器，人骨	
	－３	第１支群３号穴		三角形断面，平入，須恵器	
	－４	第１支群４号穴		三角形断面，平入，須恵器・土師器片，金環，磁器片	
21	K82	免目横穴群	鹿島・佐陀宮内	２穴以上	
22	Ⅰ１	女男岩横穴群	美保関・森山・女男岩	８　穴	美保関町誌
		１号穴		四注式系，三角形断面，平入，須恵器	
		２号穴		四注式系，三角形断面，妻入，須恵器	
		３号穴		丸天井系，半球形	
		４号穴		丸天井系，半球形	
		５号穴		丸天井系，半球形	
		６号穴		丸天井系，半球形，須恵器	
		７号穴			
		８号穴			
23	Ⅰ12	殿川内横穴群	美保関・森山・殿川内	３　穴	美保関町誌
		１号穴		四注式系，三角形断面，妻入	
		２号穴		四注式系，三角形断面，妻入	
		３号穴			
24	Ⅰ22	片江横穴群	美保関・片江・深浦	８穴確認	美保関町誌
		１号穴		四注式系，整正家形，平入	
		２号穴		丸天井系，方形断面	
		３号穴		丸天井系，半球形	
		４号穴		四注式系，整正家形，平入	
		５号穴		丸天井系？	
		６号穴		丸天井系，半球形	
		７号穴		丸天井系？	
		８号穴		丸天井系？	
25	Ⅰ26	菅浦横穴群	美保関・菅浦		美保関町誌
26	Ⅰ63	駒喰横穴	美保関・森山・駒喰	四注式系，三角形断面，妻入，須恵器，人骨	美保関町誌
27	Ⅰ86	中峰山横穴	美保関・海崎	須恵器	美保関町誌，消滅？

地図番号は「島根県遺跡地図Ⅰ（出雲・隠岐編）」（昭和62年３月発行）の番号

ものは，aタイプに属するかと思われるものもあるが定かでない。fタイプは前述のように小児用と考えられる。

須恵器を出土したほとんどの横穴はⅢ期とⅣ期の両方のものがみられるが，Ⅳ期の土器しか出土していない横穴もある。完全な形で残された横穴は皆無であったことから，Ⅳ期の土器しか出土しなかった横穴も本来はⅢ期のものが存在した可能性がある。本横穴群はⅢ期に穿たれ，Ⅳ期の時期に続いて使用されたものが多いようである。

被葬者の地位

発掘の結果，玄室内に板状石，玉砂利，扁平な自然石を敷いたりするなど被葬者に対して丁寧に扱っている横穴もいくつかあった。また，出土遺物をみると，須恵器の他に鉄器や装身具など豊富な出土量を誇る横穴もあった。なかでもCⅡ号穴からは金銅装大刀やメノウ製勾玉，水晶製切子玉が出土し注目をあびた。

横穴は一般庶民の墓と思われがちであるが，最近の研究では地域住民の中でも「上流」あるいは「中流」以上の人物の墓と考えられている[注5]。比較的まとまった平野と天然の良港から得られる経済力を基盤としたこの地域の有力者の墓であったと言えよう。

横穴の分布

表10－1・2は，これまでに知られている島根半島（島根町・鹿島町・美保関町）の横穴をとりあげてみた。島根半島のほぼ全域にわたって横穴の存在が知られている[注6]が，島根町内においては発見例が少ない。大芦地区の本横穴群と野波地区の亀田横穴群が知られるのみで，加賀地区では未発見である。今後の調査等によって新発見の可能性もあるが，地質との関係も考えられる。横穴は当地方ではマサ土と呼ばれる粘り気のない土に穿たれた例が多い[注7]。本横穴群の穿たれた斜面は安山岩の風化したもので粘り気のない硬い地質である。

参考文献

注1　山本　清「出雲と島根町の古墳のあらまし」（島根町誌）1987年

注2　門脇俊彦「山陰地方横穴墓序説」（古文化談叢）1980年

注3　山本　清「山陰の須恵器」（山陰古墳文化の研究）1951年

注4　山本　清「横穴の型式と時期について」（山陰古墳文化の研究）1951年

注5　山本　清「横穴被葬者の地位をめぐって」（島根考古学会誌第1集）1984年
松本岩雄「原始・古代の美保関」（美保関町誌）1986年

注6　山本　清「山陰の古代文化」（六興出版）1989年

注7　山本　清「古代」（川津郷土誌）1982年に，次のような記述がある。
「ねばり気の強い粘土は，乾くと割れ目ができてぼろぼろにこわれ落ちるためであろう，めったに横穴を造っていない。」

宮 尾 横 穴 群

平成２年３月

発　行　島根町教育委員会
島根県八束郡島根町大字加賀1455

印　刷　㈲谷　口　印　刷
松江市母衣町89番地